特500
573

衛生部隊前進

著　駿藤　齋

1

0056924000

0056924-000

特５００－５７３

衛生部隊前進

斎藤駿・著

大東出版社

昭和１５．１１

AJE

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２日
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

407

~~禁安ク—998~~
特500-573

序

衛生上等兵齋藤駿は上海戰直後に召集せられて出征し、南京追擊戰、徐州會戰、漢口攻略戰等に相ついで參加し、楊子江を挾んで中支の野に轉戰することニ年の後、昨秋歸還した私の前任部隊の一員である。

出征中は殆んど其の大部分を收療部隊として極めて重要であり、且複雜困難なる經理室の勤務に服し、常に繁劇多忙の裡に在りながら、寸暇を偸んで週刊「オバラニュース」を編輯し、隊員並に傷病將士の陣中の無聊を慰し隨處に多大の好評を博したものである。斯うした事は固より齋藤上等兵が文に長じ殊に編輯に多分の天才を有してゐた事によるとは云へ、又觀察の鋭利な事と仕事に勤勉である結果と謂はねばならぬ。

此の度、更に陣中の日記を整理して世に發表する事とし、題して「衛生部隊前進」といふ。蓋し、中支の南から北に、東から西に、前進に次ぐに前進を以

て終始した事を寓意したのではあらうが、此の書名が何んだか號令の様に聞えて、勇躍の氣分を巧みに表現してゐる事に微笑ましさを禁じ得ない。

私は此の書名が齋藤駿といふ人物を最も雄辯に說明してゐる様に思はれる。

書名について私の感懷を披瀝した以上、最早その内容に多くを述べる事は寧ろ贅言であらうから、之は讀者の批判に委ねることとするが、齋藤上等兵は矢張り自分の前進的氣魄と性格とを此の著書に遺憾なく反映せしめてゐる點に特長を有してゐる事だけは明言して差支へないと信ずる。

幸ひに此の書によりて、戰爭の本質と言はうか實相と言はうか、さうしたものゝ片鱗でも知らるゝ様ならば、銃後に寄する著者の努力も亦酬ひらるゝであらう。

昭和十五年秋

陸軍軍醫大佐　小原德太郎

著者の言葉

これは私が昭和十二年十一月に召集を受け、同十四年九月乘船歸還の途に就くまで書いてゐた日誌を、なるべくそのまゝ一つに取纏めたいはゞ私の"從軍記"といつた様なものである。

私はもとより作家ではないから、私の書いたものに所謂戰爭文學としての高い價値があらうとは思はれない。併しこれが私の一生涯を通じて、他の如何なる場合に於てもおそらく味はひ得ないであらう民族的感銘によつて終始した私の"出征の記錄"であるといふ意味において、私自ら限りない愛着を覺えるのである。

私の所屬してゐた部隊は私達が歸還の後も中支の山野を幾たびか轉戰して、今は〇〇に在つて傷病將兵の收容治療に奮鬪しつゝある。その中には私と苦樂を共にした戰友の何人かがまだ殘つてゐる。私の傳染病室勤務時代の上官であつた門野軍醫も居られる。この間なつかしいお便りを頂いた。

いま踏み越え來つた彼の地の山野を回顧すると新らたな感激が湧いて來る。さうかといつてこの手記を何度書き直して見ても、私には結局これ以上に書き現はすことが出來ないと思ふ。それは私の力量に比べて戰線での體驗が比較にならぬ程尊く偉大であつたからである。

私は是れを一番簡單な言葉でどう表現したらいゝか。今でも一人で苦心してゐる。

このたび本書の上梓に當り色々と御指導を辱うした元部隊長小原大佐殿の御懇情を深謝する次第である。

昭和十五年十一月三日

齋藤駿

序文……陸軍軍醫大佐　小原徳太郎

著者の言葉

上陸……一
待機……一四
最初の前進……二五
顔家村の丘……三五
オハラニュースについて……七二
ヒゲ談義……七七
不淨考……九九
南京の春……八四
蚌埠行……一二四
蚌埠の病院……一二〇

敵襲とその後……一三
ねもんぶくろ……一五六
戰線夜情……一九九
戰死……二〇〇
それから……二〇三
二度目の正月……二〇四
或る戰傷兵の戰線日記……二〇八
勤務交代……二〇〇
傳染病室勤務……二〇六
衛生部隊前進……二四五

裝幀　高井貞二

上陸

昭和十二年十一月二十八日、午前九時十五分、船が上海の〇〇埠頭へ横付けになつた。

我々は背嚢の重さを背に感じながら足もとを注意して船の階段のロップに摑まつて降りて行つた。

一列縱隊並んで先頭の者から一人づつ上陸して行つた。私は階段の端と地面との境まで來て、いま一歩で大地に足が着くといふ時に『上陸第一歩だなア』といふ事を考へるともなく考へた。天氣は良かつたが冷たい風が吹いてゐた。

倉庫の樣な大きな建物が立ち並んでゐて、澤山の日本兵が苦力を使ひながら糧秣をトロッコに積んでは何處かへ運ばせてゐた。我々とは先き上陸してゐる兵隊達である。服も汚れてゐたし顏も黑く髯も伸びてゐた。苦勞してゐるらしい風であつた。

上陸したばかりの我々の方を見ては戰友同志が何か言つてゐた。私は新入學の一年生の樣な氣持でこの光景を眺めながら、皆んなと一緒に埠頭の廣場へ背嚢を下して其の上へ腰を掛けて休んでゐ

た。

私達の乘つて來た御用船が、部隊の荷物を陸揚してゐる。赤十字のマークの付いた醫扱が起重機に釣り上げられて宙にぐる〳〵廻ひながら埠頭の片隅へ積み重ねられてゐる。

白ペンキでOSKと大きく書いてある倉庫の前で、私達は遲い朝飯の飯盒を開いた。

此處が上海の一角である事は間違ひない。然し此處が上海のどの方面に當るのか私は見當がつかない。そしてそれと同時に、敵が一體どんな狀況にあるのかそれも全然判らない事であつた。つい其處ら邊りに砲煙が渦卷てゐる樣にも思はれたし、また戰爭とは全く懸絶された土地へ旅行にでもやつて來た樣な氣もした。

我々は宿舍がまだ決まらないので、とに角此處で一服してゐる事になつた。陽が高くなつて來ると、冬衣の下へ着込んで來た冬シャツ二枚が暑苦しく少し汗ばむ樣であつた。

私は梅干の種子を舌の上で弄びながら、背囊に腰を掛けたまゝぼんやりしてゐた。揚子江の水面に陽が一ぱいに照つて波頭が白くめら〳〵と濁流の間に光つてゐた。

私達の乘つて來た御用船は、その水景をバックにして、胴體を横たへてまだ荷物の陸揚をしてゐる。

○○丸といふ病院船であつた。

黑い制服の看護婦が五六人甲板に立つて我々の方を見てゐる。あの看護婦達は我々と一しよに○○を發つて來たのであるが、彼女等は船内の勤務であるから、上海と内地との間に在つて後送患者についての仕事をするのであつた。

我々の船室は船の底であつた。いま此處からは見えない水の中である。

明い甲板から梯子を傳つて其の船室へ降りると、むつとする樣な空氣の中に朝から電燈がともつてゐて、外界の見えない部屋の中では夜と晝との感じが判然しなかつた。頑丈な鐵のボートや釘で締めつけられ組立てられてある大きい鐵板や鐵柱が横に縱に、それが不規則な陰影を投げて天井を構成してゐた。うつかりして歩くと、頭をぶつゝけさうな低い天井であつた。疊が敷いてあつた。

我々は何十人宛か〻一團となつて其處へ腹ばひになつて酒を飲んだり、踊つたり、唄つたり戰爭の話をしたり、甲板へ出て海を眺めたりして上陸の日を待つてゐた事であつた。

黑い制服の看護婦達は上甲板の廣い部屋に屯してゐた。私達とは、狹い廊下で擦れ違ふ事がよくあつた。或る時、擦れ違つた一人の看護婦に私は擧手の敬禮をした。彼女は「御免下さい」と言ひ乍ら向うへ走つて行つた。

それからちよい〳〵やつて見たが中には默つて頭を下げて行くのもあつた。然し矢張「御免下さい」の方が氣持が良かつた。それは締めてゐる心のブレーキを、やんわりと緩められ、樣な生暖かい一瞬の印象であつた。

私の部隊のT少尉が輕い感冒で咽喉を痛めたので、私にマスクを作つてくれとの事であつたが私の私物はまだ荷造りのまゝで針や糸を取り出すのが面倒であつたし、それに私の手では上手に出來ないと思つたから、私は之を看護婦に賴む事にした。

恰度、上甲板から自分等の部屋へ歸らうとして廊下を歩いてゐた時、擦れ違つた看護婦に私は禮を厚くしてマスク製作の一件を依賴した。「うまく出來ますか知ら……」と謙遜しながら彼女は其の日の晩までにといふ私の急な註文を微笑ながら引き受けてくれた。

「彼女」といふ詞ーは「若い」といふ連想がつきまとふ。なる程此の看護婦は決して年寄りの部類ではなかつたが、それでも私よりは三ツ位ゐ年長の三十二三歳に見えた。けれども私の此の鑑定は、誰が見ても老けて見える黑い制服の爲に、或る程度の正當を缺いてゐて本當はもつと若いのであつたかもわからない。併しそんな事はどうでも構はんではないか。

さて其の夜、私は彼女等の部屋のドアーを開けて畫の約束の人を探さうとしたが、何十人かの制

服が屯してゐる其の場の光景私は壓倒されてきよろ〳〵してゐた。

胡散臭いと思つたらしく、手近い所ー坐つて何かしてゐた一人が「誰に御用ですの……」と訊いた。

私は名前は聞いてなかつたから首實驗をさせて貰ふつもりである。「誰に……」と訊かれても「ハア」と答へてきよろ〳〵してゐるより他に處置がなかつた。

すると向うの隅の方から「あゝマスクでせう」と言ひ乍ら約束の看護婦が白い布切を持つて、出口に立つてゐる私の方へやつて來た。私は助かつた樣な氣持がした。

「あゝテルイさんに御用でしたの」

と先刻の看護婦が私の方を見乍ら云つたので、此の親切な看護婦は「テルイ」といふ名前である事が判つた。

私はテルイさんの手からマスクを受取ると、厚くお禮を言つて皆んなの視線を背中に感じ乍ら部屋を出た。

ストーヴの傍で暖かいコーヒーでも飲んだ時の樣に私は上氣してゐた。

燈火管制のしてある甲板は眞暗で寒かつた。足許のずつと下の方で波の音がしてゐた。

其の夜、私は看護婦の誰かゞ、あの踵の高い靴を履いて甲板から海の中へ轉落したので、私が助けに行ぐといふ勇ましい光景を夢に見た。そしてそれがテルイさんである樣な、さうでない樣な判然しない記憶であつた。

それから何日かの間、私はテルイさんに逢ふ機會がなかつた。そして其の儘上陸してしまつたのであつた。

× ×

私は背嚢に腰を掛けて御用船を眺めながら、あの甲板に立つて我々の方を見下してゐる五六人の看護婦の中に、テルイさんがゐるのではないだらうかと思つた。

何處からかトラックが白衣の戰傷兵を載せて何臺もやつて來た。車は棧橋のすぐ傍で停つて、戰傷兵が擔架に横たはつたまゝ車から下されると、附添ひの兵隊が靜かに擔つて棧橋を登つて我々の乘つて來た御用船の中へ入つて行つた。擔架から降りて附添ひの兵隊と肩を組む樣にして登つて行く者もあつた。皆んな前線から送られて來てこれから此の船で內地へ還送にならうとしてゐるのである。こんな有樣をぼんやり見てゐた私は、自分がいま戰場へ來てゐるのだといふことを明瞭に意

識した。そして我々がお互ひの胸に秘めてゐた、未だ見ぬ戰爭に對する色々の想像が、此の眼前の現實によつて歴然と裏書きされた樣に思つた。それは微塵も怖しいといふ感情ではなかつた。硝煙と血と殺戮の場面が一瞬腦裏を掠めたその後に、尊くも傷ましい戰友の姿を通して我々は、我々の鬪志が急激に湧き立つのを感じた。

私達はこんなところで愚圖々々してゐないで、一刻も早く戰場へ出て衞生部隊としての私達の任務を全うしなければならないと思つた。

午後二時頃、部隊は整列をして宿舍へ行進して行つた。埠頭へ陸揚げされた荷物は後でトラックで運ぶ事になつてゐた。

我々は行進をしながら左右に展けて來る戰火に見舞はれた民家の荒廢した姿を眺めて口々に『ひどいナア』を連發した。私は何年か前に映畫で見た關東の大震災の慘狀を想ひ起してゐた。支那人は一人も見えなかつた。

所々に燒け切れたらしい電線がアスファルトの道路にだらりと垂れ下つてゐた。

私達はそれを屈つたり跨いだりして行進して行つた。大きな四ツ辻には、白い布を頭に卷いた交通整理の脊の高い印度人が銅像の樣に突つ立つてゐた。時々風を捲く樣にして軍の自動車が走つて

ねた。

埠頭から千米程行つた所に、コンクリートの大きな建物があつた。部隊は此處で宿泊することになつた。建物の中は足の踏み場も無い位ゐに白紙が散亂してゐた。大型の印刷機械が何臺もストライキの工場の樣に動かぬ姿で並んでゐた。其の機械の下も夥しい白紙の狼藉であつた。支那小學校の教科書にするらしい印刷物が散ばつてゐた。露骨な排日の文字も刷つてあつた。私達は機械と機械の間へ、其の紙を積み重ねて恰度疊を敷いた樣にして、寢床の用意をし始めた。陽が暮れると底冷えする樣に急に寒くなつて來た。部隊はとも角此處で一夜を明かすのである。機械の間へ七八人程づつ入つて紙を着て横になつた。私は腹が減つて來たので、ガサ〳〵と起き出て飯盒に殘つた飯を喰べた。あちらこちらに焚火をしてゐる兵隊もあつた。建物の中が薄明るく見えた。

水筒や飯盒を焚火で暖めてゐる者もあつたが、私は何だか億劫であつたから冷えた水筒をそのまま口に當てゝがぶ〳〵と飲んだ。私は何といふこともなく外へ出た。建物の出口の所に口の壞れた水道があつて、水がぢやあ〳〵と出し放しになつてゐた。外はもうすつかり暗くなつてゐて、灯の光も見えない何となく氣味の惡い夜景であつた。人は一人も歩いてゐなかつた。

壞れた水道の水の音が、闇の中に谷川の流れの樣に聞えてゐた。その音を聞いてゐる中　遽かに

小便がしたくなつたので、其處らで一寸失敬して建物の中へ入つて叅脚絆も靴も履いたまゝで、先刻の紙の寢床へごそ〳〵ともぐり込んだ。

『寒いナア……』と紙の中で戰友の誰かゞ言つた。私は枕にしてゐた背嚢から外套を外づして、頭から被つてまた横になつた。

あちらこちらで暗がりの中から、ぼそ〳〵と話聲が聞えてゐた。昨夜は船の中で最後の一夜だといふので、殆んど眠らずに皆んなで車座になつて酒と罐詰で景氣よく騒いだので、何となく疲れてゐる樣な眠い樣な氣持であつたが、さて眠らうとすると足許と脊筋から寒氣がして來て中々眠れなかつた。

召集を受けて家を發つて來たのが一年も二年も前の事の樣に思はれたし、〇〇の岸壁を離れた時の船と陸との有樣がつい昨日の事の樣に間近い記憶で甦へつて來たりした。

× ×

明け方近くの〇〇の港は朝靄の中に大小幾多の汽船がボーボーと汽笛を鳴らしながら往き來してゐた。煙突や柱の樣なものが何本も立ち並んでゐて、それが船であるのか丘であるのか判らなかつ

た。畫近く我々の船は岸壁へ横付けとなつた。澤山の兵隊が乘り込んで來た。我々は甲板の手摺に寄りかゝつてそれを見下ろしてゐた。岸壁を一ぱいに埋めた見送り人が甲板を見上げて「萬歳々々」を連呼してゐた。萬歳の續きが『露營の夢』の歌になり、歌の終りが萬歳になつた、私達も一緒になつて手を振つて合唱した。船と陸とが一つになつてどよめいてゐた。

一人の兵隊が甲板の上から、長い紐の先へ紙片に何か書いたものを結び付けて、群衆の中へ垂れ下すと、女學生らしい一團が人を掻き分け乍らむらがり寄つて來て、その紙片れを飛び付く樣に引つたくつて讀むと大聲で笑つた。彼女等は別の紙片に何か書いて紐の先へ結び付けた。兵隊はすると手繰り上げた。甲板の兵隊がどつと取り圍んで問題の紙片に何が書いてあるかを覗き込んでゐたが、やがて『ワツハツ……』といふ歡聲と一緒に甲板の手摺りに散つて、今度は銘々が手拭を裂いたり手帳の紙を千切つたりして紐の通信を始め出した。群衆の中の女學生は俄然忙しくなつて來た。

私も「バット」の空箱の白い所へ『お見送り有難う』と鉛筆で走り書きしたのを下げると、中の一人がそれを取つて見てしばらく經つて白い手を振つた。私は手繰り上げて見ると、其の横の所に『兵隊さんのお名前は』と書いてある。私は自分の名刺の住所の所を切り取つたのを下げると、二三

人で何か相談してゐる樣子であつたが、しばらくすると手を振つて合圖をしたので手繰り上げて見ると『御武運の長久を祈り再會の日をお待ちします』と書いてあつた。

彼女達は人波を泳ぐ樣な格好でしきりに手を振つてゐた。私は右手をメガホンの樣にして『有難う、有難う』と嗽鳴る樣に言つた。私の聲は船と陸とのどよめきに掻き消されたが、彼女達も何か叫び乍ら相變らず手を振つてゐた。

ドラが鳴り響いて來た。ボーボーボーツと船全體が鳴る樣な汽笛の音、岸壁の人の群が左右に大きく搖れて『わアーツ』といふ樣な聲とも音ともつかないものが船を搖ぶる樣に盛り上つて來た。日の丸の小旗が白と赤の花びらの樣であつた。紙屑籠をひつくりかへした樣でもあつた。私達も聲を限りに萬歳を叫んだ。十姉妹の樣にずらりと甲板に並んで手を振りながら岸壁のどよめきに應へた。

船底の方からゴロ〳〵ガラ〳〵といふ音が聞えて來た。七八人の船員が太いロップを引張ながら甲板の上を忙しさうに往つたり來たりしてゐたかと思ふと、岸壁の端と船の横腹との間に油の浮いた海水の面が見え出して、それが一尺二尺と段々廣くなつて行つた。それは否みやうもない內地の陸との袂別の刻一刻であつた。私達はたゞ何かを叫び續けてゐた。さうしてゐる事によつてやつと

しつかりしてゐる事が出來る樣なそんな氣持であつた。

それは其の前日、〇〇の港を發つた時にも、そしてまた故郷の驛から知人や近親者や家族に見送られて汽車に乘つた時にも、我々の一人々々が等しく經驗して來たであらう氣持であつた。何かを目茶苦茶に掻き廻してゐる樣な、そして自分も亦何かに掻き廻されてゐる樣な氣持ちであつた。じつとして默つてしまつたが最後、心の隙き間から生暖いものが胸先きを衝く樣にこみ上げて來るのであつた。

陸地の方が段々小さくなつて行つた。

空はすつかり晴れ渡つてゐて海鳥の一群が浪頭をすれ〳〵に飛んでゐた。

水平線の彼方に陸地の影がいつまでも墨繪の樣に見えてゐた。兵隊はいつまでも甲板に立つた儘で顏をまつ直ぐに其の方に向けて眺めてゐた。

氣が附いて見ると皆んな何時の間にか叫ぶのを止めて默つてゐた。

私は成るべく短い時間の裡に、令狀を受取つて以來の私の身邊の色々な有樣や想ひ出のひとつ一つを、もう一度心の幕に映し出して見ようとした。然し、そのくせ私は家を出た時から絶えず私の心の何處かに在つたに違ひない肉親の姿と、そして家の門口で振返つた私の視野の外れにちらりと

映じた臨月の妻の姿とが、意地惡くも判然と頭の中に浮んで來るのを一生懸命に拂ひ除けようとしてゐるのでもあつた。

× ×

私はうと〳〵と眠つては寒さに眼を覺ました。身動きをする度にガサ〳〵と紙の音がした。隣の戰友はもう鼾を立てゝゐる。

私はまた小便がしたくなつたので障害物競走の土管くゞりの樣な格好で紙の寢床を起き拔けた。焚火がすつかり消えてゐて其處ら邊りは眞暗であつたが、散らばつてゐる紙がほの白く浮いて見えてゐた。私は手探で背囊から懷中電燈を出して、戰友を踏まない樣に足許を照らしながら、出口の方へ歩いて行つた。表へ出ると闇の中から「明りを消せ」と低い鋭い聲で呼ぶ者があつた。私は畫、此處へ來た時から其の辻に立つてゐた海軍陸戰隊の步哨の姿を思ひ出し乍ら、ハッと思つて右手の拇指で懷中電燈のスイッチを引いた。

待機

紙の寢床で二夜を明かした我が部隊は、それから三日目の早朝、三百米程離れた建物へ移動した。支那人が經營してゐた廣々とした煙草製造工場の跡であつた。此處は割合に整頓が行き屆いてゐた。我々は小學校の雨天體操場の樣な二階の廣場に、各分隊毎にひとかたまりになつて宿泊する事になつた。私は四分隊であつたが、都合で一分隊に入つた。分隊長は松川衞生伍長(現在曹長)であつた。私と同じ郷里の出身である。

郷里と云へば我々の部隊は殆んど全部が同じ○○の出身者であつた。名乘り合へば『あゝさうか、君はあそこの息子か……』といふ具合であつた。

さて部隊は此の煙草工場を宿舍として當分待機することになつた。何時前進命令が出るかも判らないといふ氣忙しい緊張の中にも、ひとまづ落ちついたのであつた。手紙を出す時の部隊名は、上海派遣軍松井部隊氣付○○部隊○○部隊と書けといふ會報が出た。

私達は床板に毛布を敷いて、腹這になつて故郷へ便りを書いた。船の中でも書くには書いたが、

部隊名の書き方が判然してゐなかつたので只『○○丸にて』として置くより方法が無ささうであつたし、それでは手紙を貰つた方でもすぐに返事を出すといふわけには不可ない。私は借金でも返濟する樣な氣持で『上海派遣軍……』を一枚々々丹念に書いた。上陸以來の狀況を出來るだけ詳しく家や知人へ書いた。宛名を書き乍ら其の人達の面影が頭に浮んだ。

夥しい部隊の荷物が埠頭からトラックで運ばれて來た。私達はそれを階下の石廊下へ積み上げた。患者用の毛布が筵包の儘で、小山の樣に積み重ねられた。

晝の裡は小春日和の長閑さであつたが、夕方頃から冷たい風が一直線に吹いて來て氣溫が急に低下した。着て寢るのに毛布が一枚づつ支給された。此の宿舍には電燈の設備があつた。夜になつて電燈が燈つた時、戰地ではない樣な平和的な感じがした。

よくも電燈がつくものだと思つた。上海の一角へ足を踏み入れたばかりの私は、どうかするとつい其處ら邊りが第一線である樣な錯覺に囚はれて、電燈が燈るといふ事が、私の戰場に對する概念には、どうもちぐはぐな現實であつた。

然し電燈の笠には皆んな黑い布が被せてあつた。私達は薄暗い光の下で毛布を被つて寢た。ちよつと頭を擡げて見ると、廣い建物一ぱいに皆んな枕を並べて寢てゐる。恰度お寺の本堂へ泊り込ん

だ團體の樣であつた。

あちらこちらでゴホン〳〵と咳をする者がある。部隊の吉田准尉が巡察に來て、

「皆んな燈火管制に注意すること、

それから、寒くない樣に外套を着て寢ること」

と言ひ殘して行つた。

私の隣りに寢てゐたH二等兵が、

「一杯やつて寢ると溫いぞ」

と囁やいた。私は、

「有るのか」

と訊ねたら、

「街へ出たら買つて來よう」

と言つた。

「街？　何處で？」

「日本人街へ行けば賣つてるぞ」

私は既に治安恢復した日本人街を想像して、此の暢氣な戰友の言葉を其の儘何の不思議もなく受け入れようとしたが、矢張戰火に目茶々々に潰滅された街だけが頭に浮んで來て、酒を賣つてゐる樣なそんな家が此の上海に在つたりはしないだらうと思はれてならなかつた。

紙の寢床よりはずつと寢心地は良かつたが、寒氣は相變らず身に迫つて來た。

私は本當に一ぱい飲んで寢たらいゝだらうナアと思ひ乍ら、何時の間にか寢込んでしまつた。

其の翌日から勤務に支障の無い者は外出しても良いといふ事になつた。但し一人歩きは絶對にならぬといふ條件付であつた。

「勤務」と言つたところで、待機の衞生部隊では患者は一人も收容してゐないから、殆んど皆んな外出が出來た。私は部隊の辻主計少尉（現中尉）の許、經理室の助手の樣な仕事を命ぜられてゐたので、午前中は何かと用事があつたが午後になれば殆んど毎日の樣に戰友達と一緒に外出をした。

毎日いゝ天氣であつた。拔ける樣な蒼空を友軍の飛行機が氣持のいゝ爆音を響かせて、悠々と飛んでゐた。原形を留めぬまでに打ち壞された煉瓦造りの人家が兩側に並んでゐた。辻々のコンクリート造りの電柱には、まるで射擊の標的でもあつたかの樣に無數の彈丸の痕が殘つてゐた。屋根看板が今にも落ちさうに軒下にぶら下つてゐた。所々に海軍陸戰隊の兵隊が、鐵兜をかむり銃劍を

構へて嚴然と立つてゐた。痩せた野良犬が崩れた煉瓦の間を嗅ぎながら彷徨うてゐた。

こんな廢墟の街を通り拔けて日本人街へ入ると、此處は全く別の世界であつた。

日本の兵隊と日本人と支那人と軍の自動車が、町幅一ぱいに氾濫してゐた。私達はキモノを着て街を歩いてゐる日本の女をいとも懐い氣持で見たのであつた。日本人の商店が軒を並べて皆んな繁昌してゐた。

私は五六人の戰友と一緒に、店の軒々を覗いて歩き乍ら、幼い時に母に連れられて行つた何處かの祭禮の雜鬧の中で、不圖見附けた屋臺店の狐の面を買つて欲しいと無理に母にせがんだ昔の事をぼんやり思ひ出してゐた。

私達は此の街で何よりも先きに食慾を滿さうとした。前進すれば不自由をするから今の內に精々喰べて置かうといふ氣持が自然に動くのであつた。

「皇軍歡迎」といふ看板が出してあるさゝやかなカフェーへ入つた。粗末な椅子とテーブルが三ツ四ツ置いてあつて、先客の一團の兵隊がビールを飲んでゐた。私達もビールを註文した。壁に幾つも小さい穴があいてゐた。

「これは鐵砲丸の跡かね」

と私は背後から立つたまゝでビールを注いでくれた女に聞いた。女は何の變化もない表情で、

「さうよ、妾達がうしてゐたら飛んで來たのよ」と言つた。

「君等は偉いナア」

と私は本當に感嘆した。

「怖かつたわ、でも彈丸つて仲々當らないものね」

此の日本人の女は既に銃火の洗禮を受けてゐた。兵隊の私は未だ其の味を知らずに新らしい軍服を着て待機してゐた。

或る日、私は松川分隊長に天ぷらの美味い家を發見したから行かうと誘はれたので有志二三人も一緒に日本人街の其の家へ行つた。うどん屋兼料理屋であつた。何でも事變の十年も前から、此の街で店を開いて在留日本人の間では可成り名前を賣つてゐるとの事であつた。なる程うまかつた。齒切れのいゝ口調で「いらつしやいませ」と迎へて呉れる日本娘の存在が、天婦羅の味に拍車をかけて宿舍の夜の寢物語りに桃色の花が咲いた。

私はそれからは出來るだけ仕事の都合をつけては、此天婦羅を喰べる爲に日本人街へ出かけた。率直に言ふと「いらつしやいませ」の雰圍氣に接するためであつたかも知れない。

天婦羅を喰べ乍らの或る日の會話、

「いつ上陸なさつたんですの」

「先月（十一月）の末」

「前進なさるの」

「勿論」

「いつ？」

「判らんよ」

「お判りになつたら私に知らせてね」

「君はスパイか」

「いやアよ」

× ×

炊事場で風呂を沸かしたから、各分隊毎に入浴せよといふ報せに私達は大いに喜んだ。

私達の分隊では一人が五錢の割前を出し合つて、バリカンを二組買つてあつたから、皆んなで刈り合ひをしたクリ〳〵坊主が褌一貫になつて階下の入浴場へ飛んで行つた。

バケツやら、釜やら茶ッ葉やら米俵やらがゴタ〳〵と置いてある炊事場の片隅に、五六人は入れる大きな鐵桶がある。支那人は何に使つたのかは知らないが、風呂桶としては格好のものであつた。別の釜で湯を沸してバケツに汲んでは此の中へあけるのである。

廣島の宿舍で出發の前夜入つたきりで、ずつと其の儘何日ぶりであつた事か。私達は嬉々として其の鐵桶へ飛び込んだ。

私達は長々と足を伸ばしたり、背中を流し合つたり、お湯に入つたり出たりした。

『こゝは名代の東海道……』

故郷に女學校二年生の娘があるといふY二等兵が、虎造張りで浪花節をうなり出した。

夜、寢る前に毛布の上へ五六人が圓陣を作つて一杯のんだりした時にも此の兵隊は、

『こゝは名代の……』

を金時の樣に顔を眞赤にして目を細くしてうなるのであつた。仲々上手であつた。私も浪花節が好きであるから、アンコールをすると何べんでも繰返して唸つた。

本當にいゝお天氣が續いた。上海には冬といふものが無く、此の儘一直線に春になつてしまふの

ではないかとさへ思はれる程、長閑な日和が續いた。夜の寒氣は一杯のんで寢るといふ戰術によつて防げばいゝのであつた。

或る日私は、日本人街の食料品店で煙草と酒とを買つた。既に顏馴染の主婦さんは私のまだ新らしい軍服を見乍ら、天ぷら屋の娘と同じ樣な事を訊いた。

「いつ上陸なさいました？」

「十一月の末です」

「何處へ前進なさいますの？」

「さあ、僕らには何　判らんですよ」

「御苦勞さんですね。いまはまだいゝんですがね、少し暑くなつたら大變ですよ、惡い病氣が流行りますからね」

此の日本人達は五六年も前から支那へ來て働いてゐるのであつた。上海事變が起きた時にも、日本人街に頑張つてゐたのであつた。

上陸し一間のない私達よりは遙かに支那通で而も戰爭通であつた。色々と話を聞いた。戰線は既に西方『南京』へ延びて、皇軍はひた押しに南京へ南京へと迫つてゐた。

「お正月までには大丈夫『南京』は陷ちます、その時の用意に此の間大きな日の丸を買ひました、兵隊さんのお蔭です」と其の主婦さんは言つた。兵隊さんと云へば私も其の一人であつたが然し其の「お蔭」の中へ加はる資格は私には未だ無いと思つた。

思へば私達を歡呼の聲で送つてくれた故郷の人達が、おそらくは私達はもう戰線へ出て花々しく働いてゐると思つてゐるであらう其の頃は、未だ斯うして上海あたりで待機の日を送つてゐるのであつた。私は私の此の絨衣を早く戰塵に汚したいと思つた。

○月○日遂に其の命令が出た。

夜の點呼が濟んだ後で、松川分隊長が緊張して其の命令を傳達した。

一、部隊は來る○○日、顏家村に向ひ前進、同地に病院を開設せんとす。

一、梱包は午前九時迄に車輛に登載の準備を完了し、人員は各分隊毎に舍前に整列して指揮官の命を待つべし。

一、警備兵は豫め○○○○○○○○○○○○すべし。

といふのであつた。

私達はその二三日前から、近い中に前進するらしいといふ噂を耳にしてゐたが、判然と其の命令

を聞くと流石に心が引緊のを覺えた。其の夜私達の分隊では黑い覆で包んである電燈の下へ誰かの地圖を擴げて、目的地の顏家村は何處にあるのかを調べ、其の地圖を取り圍んで銘々が眞劍な顏をして圖上戰術を始めた。地圖で見る顏家村は南京の西眞近に小さい○で現はれてゐた。私達は硝煙の中に倒れてゐる戰友を想像した。上陸してすぐに埠頭で見た戰傷兵の姿を思ひ出した。

翌日の夕方、宿舍の隣りの空いた廣間へ全員が集つて最初の前進を祝ふ大會食が催された。

莚被りの酒樽が幾つも置いてあつた。私達はこれを飯盒に汲んで來ては飲んだ。

鯛のお頭付が一尾づつ、これは內地から冷凍で來たものであつたが、私達にとつては無上の御馳走であつた。

中央正面に陣取つた小原隊長の一場の訓示があつて、それから無禮講になり、皆んな手拍子を揃へ聲を張り上げて唄つたり騷いだりした。此の廣間には電燈の設備が無かつたから、陽が落ちると段々薄暗く肌寒くなつて來た。

然し皆んな醉つてゐたから、薄闇の中で盛んにメートルを上げてゐた。餘興が始まつて、私は眞中のテーブルへ出てY二等兵に習つた文句で浪花節を一席やつた。喝采を浴びて自分の席へ戻ると、師匠格のY二等兵が私の首に嚙り付く樣にして「いよう、よかつたぞ……」と言ひ乍ら相當怪しく

なつた調子で十八番の『こゝは名代の……』を唸り出した。

威勢のいゝのが十人程出て「酋長の娘」を踊つてゐる。私も可成り飲んでゐた。

私は階下へ降りて便所の小屋がある裏の廣場へ出た。ほてつた兩頰に夜氣がひんやりと冷たかつた。小屋の中へ入るのが面倒くさかつたから其處らで空を見上げながら小便をした。本當に銀砂子を撒いた樣な星が空一面に輝めいてゐた。

寢床へ入つてから、

『明日前進します、元氣です』

と家へ宛て、葉書を書いた。

最初の前進

（當時の私の手記「任地を指して」より）

「オハラニュース」第一號所載

十二月十二日、小原部隊が顏家村へ前進の日である。十一月廿八日此の上海へ上陸以來、晴天に

惠まれてゐたが、今日はまた何といふ素晴らしい快晴であらうか。異國　來て仰ぐ日本晴れの碧空である。

私達は朝五時頃から起きて身廻り品を背嚢に詰めたり、飯盒に飯を詰めたり、衆脚絆を平常とは特別吟味して卷いたりした。

銃が各分隊へ若干づつ配ばられた。小山の樣な梱包が舍前へ積み出されると、九時半、〇〇部差廻しの軍用トラックが何十臺かぞろ〳〵と長い列をなしてやつて來た。先頭の車から輸送指揮官が降りて來て部隊の副官松浦中尉と何か話してゐたがやがて、『梱包を積め』といふ命令が出て、我々は上衣を脱いで積込み作業にかゝつた。トラックの上へ恰で轉宅の時の樣にうず高く積み上げた。運轉手の兵隊が『そんなに積み込んぢや車が駄目ぢやないか』と小言を言つたが、私達は聽えない態をしてどし〳〵積込んだ。どうも梱包數の割合にしては車が足らぬらしい。愚圖々々してゐると殘留梱包が出來さうに思はれた。私達は色々と工夫して積んで見たが、結局どうしても載せ切れぬ梱包がまだ五六車輛分位ゐは出來た。後發將兵の若干名が此の殘留梱包と一しよに、三四日遲れて我々の本隊を追及する事になつた。

私達は積込の作業が終ると、武裝をして、車上の梱包によぢ登つて適當に座席を設けて腰掛けた。

背嚢は運轉臺の屋根の上へ括り附けた。前の車に、後の車にも、兵隊と梱包とが一ぱいに乘つてゐる。私は車の上から宿舍の大きな建物を見渡して、もう此の家へは二度と來ないであらうと思つた。

「發車準備完了……」と後の車から呼ぶ聲がした。私の乘つた車もエンヂンをかけてゐる。十時十分、輸送指揮官の車を先頭にして、トラックの縱列が徐々に動き出した。

後發の將兵一個分隊が、殘つた梱包の前に堵列して萬歲を叫んだ。私達も手を振つて萬歲を叫んだ。四ツ辻の所で白い布を頭に卷いた印度人の交通巡査がにんまり笑つて擧手の敬禮をしてゐる。日本人街を左手に見て坦々たるアスファルトの道を、車は好調のフルスピードである。天ぷらの匂も、そしてあの笑顏も前進して行く今の私にはすべてが過去——過去——過去である。私達は前進して行く。何も考へずに行かうではないか。前へ行く車の埃がひどい。マスクをかけて外套の頭巾を被る。上海の街を離れるあたり見渡す限りの荒れ果てた麥畠を通して、遙かの地平線は雲一つない蒼空に溶け込んで、何處まで行つても盡きることを知らぬ大陸支那が眼の前に展けて來る。燒け落ちた村落がある。縱に横に大小幾多のクリークがある。壞れかゝつた橋がある。

「おい、寢てるぞ!!」

と同乘の戰友が傍の畑を指さして叫ぶのでふと見ると、人馬の屍體が五ツ六ツ轉つてゐる。紺色

のズボンをはいてゐる。まだ新しいのも、糜爛してゐるのもある。支那兵だ。竹籠細工の樣にあばら骨ばかりになつた馬の屍體を、野良犬がじやぶつてゐる。

時々往き交ふ路傍の支那農民が手を合せて、我々の車を一臺毎に拜んでゐる。

正午十分過ぎ『嘉定』の西端で晝食のため約三十分休止。車に乘つた儘で飯盒を開く。

今朝宿舍を出る時に詰めて來た二食分である。あと一食分しかないと思ふと一寸心細い。

『古里村』『場尖鎭』を經て『無錫』に着いた頃には、生々しい新戰場趾に宵闇が迫つてゐた。『無錫』には友軍の〇〇隊が宿泊してゐた。「美味いよ」と言ひ乍ら、道傍の空箱の上で怪しげな鍋を利用して、ぜんざいを作つてゐる兵隊の一團がある。髭の赭顏が焚火に映えてゐた。民家がぽつん〳〵と闇の中に建つてゐる。土民は一人もゐないらしい。

目的地の『顏家村』まではまだ六十里餘あるといふのに途中で事故を起した車があつたりして、思つたより道の良い割合に時間がかゝつて、今夜は此處の廢屋で一夜を明かすことになる。此の調子では明日一ぱいに目的地着はむづかしいかもわからん。

そゞろに夜の寒氣を覺える。土民の家の中には藁がある。入口の所へ焚火をして藁の中へ身體を投げ出すと、フンワリと具合のいゝクツションである。分隊の者が十人程かたまつて懷中電燈の明

りで飯を食ふと、急に眠くなつて來た。他の分隊でも適當な家を見付けて、あちらこちらで焚火をしてゐる。

私は外套を被つて藁の上へ横になつた。皆んなも「あゝ疲れた〳〵」と言ひ乍らゴソ〳〵と横になつた。とに角寢るに限る。勝つて來るぞと勇ましく……と誰かゞ向ふの方で唄つてゐた。

× ×

私達はまだ暗い裡に起きた。蒼い片割月が出てゐる。ぐつすりよく眠つた筈であつたが全身は何となく倦るかつた。

何か貴重な物を捨てる樣な氣持で、水筒の水で口を洗つた。朝めしに餅が出た。

私達は焚火で餅を燒く事にした。

あちらにもこちらにも、七八人程づつ焚火を圍んで、銘々が自分の餅を見つめながら燒け上るのを待つてゐる。

餅は皆んな中が軟かくならぬ中に外側が黑焦になつた。私達は其の焦げたところを手ではたいて噛み付いた。

夜が白々と明け初めて來た。私達は再びトラックに分乘した。出發に當つて松浦中尉から、

「これから先き、相當に道路が悪いから振り落されぬ樣に注意すること。

それから殘敵の跳梁も豫想せられるから、途中で下車命令があつたならば直ちに下車して、車の側面に伏せること」

と注意がある。いよ〳〵これかららしい。私は外套の上からそつと千人針のあたりを押へて見た。

銘々が彈丸の裝塡をした。

午前八時二十分出發『常州』へ……。

大して悪い路でもない。私達は、それとなく彼方此方の丘の蔭や森蔭に氣を配つてゐた。

陽が高くなつて來ると前へ行く車が砂埃を濛々と捲き上げる。車はその埃の煙幕の中へかくれてしまつて、乘つてゐる兵隊の頭だけが車の動搖と一しよになつて搖れてゐる。

振り返つて見ると、後から續く車も砂埃の中に埋もれて、運轉臺の硝子窓と兵隊の頭とが、白い砂煙の中に消えたり現はれたりしてゐる。道路を覆ふ長い一列の砂埃の中に、外套を被つた兵隊の頭と、そして時々キラ〳〵光るものとが搖れてゐる。蜿々長蛇の砂塵の進軍であつた。私達は手拭で鼻と口を覆ふ樣にして、外套の頭巾の上から固く結んだ。

車は後尾になる程どうしても遲れ勝ちである。私の車一列の中央邊であつた。縱列は時々停車して後續の車の追及を待つた。

一番後の車が追ひ着くと後の方から、

「後尾到着」

といふ申し送りが來た。私等は同じ樣に『後尾到着』を呼はつて前へ傳へた。遙か先頭の方を見てゐると、濛々と砂煙が上り出して、それが一定の間隔をおいて順々に前進を始める。そして再び砂塵の進軍が續く。

午前十一時四十分『常州』着で少休止。

左手眞近に常州の城壁を眺めて、晝めし代用の食パンと林檎を喰べる。

今日はとても喉が渴く。一昨日上海を發つ時に詰め來た水筒は既に輕くなつてゐた。

クリーク以外に水らしい水は見當らなかつた。私達は故里の綺麗な水道の水を想ひ出し乍ら、林檎の水氣で僅かに喉を潤した。

正午二十分過ぎ『常州』を出る。

急に道が悪くなつて來た。車は駱駝の背中の樣な道をエンヂンが亂調子に喘ぐ樣にうねりくねり

と進んで行く。私達はしつかりと梱包に摑まつてゐた。少し進んでは停車した。運轉の兵隊が「チエッ」と舌打をし乍らズツクの袋でラヂエターにクリークの水を補給した。がつくん〳〵と上下左右に搖り動かされる度に先刻喰べた食パンと林檎とが腹の中でこんがらかる樣である。沿道の所々、そして畠の中あたりには相變らず馬や人の屍體が轉がつてゐて特有の臭氣を放つてゐる。昨日何處かの道傍で初めて發見した時には皆んな車の上から、

「いよう!! ゐる、ゐる……」

と叫んだものであつたが、今は誰も何とも言はずに默つて見てゐた。

處々の土民の空家には友軍が駐屯してゐた。

此の邊りは友軍がしきりに動いてゐる。

行軍中の〇〇隊を追ひ越す。車上から聲をかけると第〇師團の兵隊だといふ。私達の故郷の近くである。埃の中で皆んな互に手を振つて「しつかりやれ!!」と言つた。三時半頃『白塔』といふ村で、とても危險なクリークの橋と、目茶苦茶に壞れた道路に行き惱む。爆擊の跡らしい大きな穴に、車輪が埋まり込んでしまつた。私達は車を下りて後押をした。穴の中で後の車輪がグウ〳〵と空轉した。その度に、タイヤーにかけてあるチェンが、私達の顏へ土砂を跳ね上げた。

冬の陽脚は早い。『蘆口鎭』を行く頃、赤い大きな夕陽が、遙か彼方の森蔭に沈まうとしてゐた。美しい夕燒である。所々に火災を起してゐる民家があつた。いつの間にか燃え出していつの間にか消えて行くものらしい。

江南の天地が夜になると、晝の小春日和にひきかへて、穴藏へ引きずり込まれる樣な暗い寒さを覺える。兵隊は皆んな車の動搖一身を委せ切つた樣にして、默つて俯伏してゐた。二日續けてのトラツクの行軍ですつかり疲れた。腹が減つて來た。目的地の顏家村には、先發の戰友が飯と熱いお茶とを用意して待つてゐてくれる筈だ。

振り向けばヘツドライトが怪物の目玉の樣に並んで續いて來る。其の白い斜線の中に、濛々として埃が舞ひ上つてゐた。

落莫たる夜の曠野を、我々の縱列だけがゴーゴーといふエンヂンの音を立てながら上下左右に搖れて進んで行く。

道幅の狹いゴタ〳〵した部落々通り拔けると、前の方から「ライトを消せよ」といふ申し送りが來た。私はハツと一て闇の中に眠たい目を瞠つた。後に續く車のライトが、一臺づつ次々に消えて行つた。

僅かな月明りが路をほの白く照らして、車はぞろ〳〵と兵隊の黒い影を乘せて進んだ。

少し行くと「ライトをつけよ」といふ。

又しばらく行くと「ライトを消せよ」といふ。敵に備へ乍ら進んで行く。

やがて、併し大分長い時間の樣ー思はれる頃、輸送指揮官が尋ね〳〵て、やうやく顏家村の兵舍に到着した。此處だ、此處だ、といふのでやれ〳〵と思ひ乍ら、腕時計を見るともう十分で十二時である。

白い色の大きな建物が目の前にあつた。「いよう、御苦勞さん、御苦勞さん、萬歲々々〳〵」といひ乍ら先發の兵隊が何人か中から出て來た。下車しようと腰をあげたら腰から下が痺れた樣になつてゐて、フラ〳〵と尻餅をついた。

それから皆んなと梱包を卸して、其の白い建物の中へ入つて示された一室の床板に、疲れた體を自分で勵ます樣にして毛布を敷いた。

炊事掛の戰友が作つてくれた大きな握飯を喰べてお茶をぐつと飲んだ時に、やつと生氣にかへつた樣であつた。

蠟燭が燈つてゐた。もう夜中の二時過ぎであつた。上海を出る時に卷いた儘の脚絆を解いて寢床

に横たはつたら、まだトラックに乘つてゐる時の樣に體がフラ〳〵と搖れる樣であつた。

遠くの方でドカーン〳〵と砲の音がしてゐた。あれは南京の攻擊か。

私はとに角、眠らなければやり切れんと思つた。

顏家村の丘

「顏家村」は南京の七里東方にある小さい村である。中國政府が建てた「砲兵學校」の煉瓦造りの校舍が、ながらかな傾斜をもつた丘陵の彼方此方に、幾棟も建つてゐた。

私達の部隊が此處へ到着する迄は此の建物を利用して、第〇〇の野戰病院が病院を開設してゐた。此の部隊は私達の到着と同時に他へ移動して行つた。私達の部隊は之を引繼いで、上陸以來最初の病院開設の業に携はつたのであつた。南京は十二月十三日に陷ちた。恰度この顏家村へ着いた日である。

どかーんどかーんといふ音が遠い所から響いて來た。翌日、十四日から私達は俄然忙がしくなつて來た。入院患者の殆んど全部は南京攻略戰に於ける戰傷兵であつた。まだ新らしい患者であつた。

校舎の事務室でもあつた樣な平屋が、丘の下の廣い野原を眞中にして、兩側にずらりと建ち並んでゐた。それは皆んな病室に利用された。部屋の中は土間であつた。板や空箱を工夫して造つた寢臺に藁を敷き、その上に毛布を敷いた所へ、戰傷兵が枕を並べて寢てゐた。臺の無い部屋では土間に直接、藁と毛布が敷いてあつた。

支那の家は採光の具合が惡く、どんなに天氣のいゝ眞晝でも部屋の中は薄暗い。

手足や頭を卷いた繃帶が、その薄暗い部屋の中で、もぞり〳〵と、少しづつ何かを訴へる樣に動いてゐた。病衣を着てゐるのも軍服の儘でゐる者もあつた。

軍醫と衞生兵とが片ッ端から繃帶交換をして廻つた。

「痛いか」

「痛くありません」

「大丈夫です、痛くありません」

右大腿部の銃創と骨折とを兼ねてゐる患者が、仰向けに寢たまゝで軍醫の問ひにさう答へながらも、齒を喰ひしばつてゐる樣子であつた。どの部屋へ行つても同じ樣な光景であつた。ところで、私の勤務は斯うした病室ではなかつた。

經理室附の兵隊として、各病室から請求して來る色々な品物を出したり記帳したり衣糧廠へ行つ

て此らの品物を受領して來たりするのが主な仕事であつた。

經理室の倉庫——倉庫と言つても矢張り病室と同じ樣な部屋であつたが——には紙、筆、墨、インク、封筒、蠟燭、木炭、燐寸等種々雜多の品物が準備してあつた。それは恰度百貨店の倉庫の感があつた。

內地から上海への航行の途中、船の中で各部隊の勤務割が定められ、其の時から私は經理室附となつてゐたのであるが、その命令を聞いた時私は、衞生兵として何だか緣の遠い仕事を當てがはれた樣に思へてならなかつた。そして愈々病院が開かれて病室で立ち働いてゐる衞生兵の姿を見ると、私はぽつんと置去りを喰つた樣な氣がしてならなかつた。けれども私は「命令」といふものに對して、超人爲的な大きなものを悟る事によつて、蠟燭を分けたり、マッチを配つたり、帳簿をつけたりする事も亦戰傷兵の看護と相俟つて、名譽ある任務の一つである、といふ風に解釋附けて、私の觀念を自分で整理した。

經理室は部隊本部の隊長室の並びで、廊下を一つ隔てゝ此の一棟全體の一番隅にあつた。病室と同じ二階なしの平屋で、三間四方位ゐの之れも薄暗い部屋であつた。表側に小さい窓が一つあつて「獨房」といふ感じがする。窓際へ机を並べて私達一仕事をした。そして此處が私達の事務室兼、食

堂兼、寢室であつた。寢室と言つても寢臺に應用出來る樣な物は全部病室の方で使つたから、私達經理室の者五名は部屋の片隅の土間へ、藁や毛布を敷いて雜魚寢をした。

此の五名といふのは辻主計少尉（現、中尉）を頭として福島主計伍長（現、軍曹）それに横山、塚谷、私の各衞生兵二等兵三名といふ陣容であつた。

病室の多忙に並行して私達の仕事も忙しかつた。事務用の消耗品は大體事が足りる狀況であつたが、病室へ對して私が一番氣の毒に思つたのは蠟燭と木炭の不足であつた。病室附の衞生兵が白い作業衣を着た儘で請求の傳票を持つて來ては「炭を吳れ」「蠟燭を吳れ」と云ふ。傳票を受取るとプーンと藥品の臭ひがする。私はその傳票に書いてある數の半分も應じられぬ物資補充の實情を說明して、木炭三俵を一俵に、蠟燭二十本を十本程にして渡さねばならぬのが心苦しかつた。

木炭の方は其處ら邊りの壞れた家の材木を薪にしたりしてどうにか代用する事は出來たにしても電燈の無いこの村での蠟燭不足は、殊にそれが重症患者のゐる病室の場合には、氣の毒を通り越してむしろ悲慘な夜景が連想せられた。

最早十二月の半ば過ぎであつた。夜は殊に寒い。夜中にふと目が覺めて便所へ行かうと部屋の外へ出ると、眞正面から冷たい空ツ風が吹いて來て、シャツと外套を引被つた寢起きの姿では、思はず

ずぶる〳〵つと身震をする。

墨繪の樣な丘のうねりくねりのあちこちに、病室の窓から洩れる鈍い蠟燭の光が難破船の樣に物寂しかつた。こんな晩は、決つた樣に其の翌朝から粉雪がちら〳〵と降る。そして炭も蠟燭も需要が多くなる。併し私は、現在の在庫と後の補給との關係を考へては、恰で器械の樣な冷たい氣持で要求を値切つて行かねばならなかつた。

或る日の暮れ方、病室の衞生兵が蠟燭を二十本くれと言つて來た。併し他の病室からの要求を豫想すると八本が精々であつた。

「冗談ぢやない。八本や十本ではどうにもならん」

と其の兵隊は小言を云つた。

「とに角今夜はこれで辛抱してくれ」

と云つて、私はぶつ〳〵言つてゐるその兵隊を歸した。しばらく經つと其の病室の軍醫が、白い作業服のポケットへ聽診器を突つ込んだ儘で、經理室へ荒々しく馳け込んで來た。

「おい、蠟燭はもう無いのか」

×　　×

經理室の前で立ち停ると、私に燐寸を貸して呉れと言つて煙草を銜へた。私は胸の物入れからマッチを出して摺つた。

軍醫は默つたまゝですつかり暗くなつた丘の方を眺めながら煙草を吸つてゐた。

丘の上の部屋の窓から薄明い灯が洩れてゐる。軍醫はほつと吐息をついた。それはひどく疲れてゐる表情であつた。

「怒つても仕樣がない。君、少しでも心配出來るだけ賴まれんかね」

私は理由もなくじーんとしたものを胸に感じて「はア」と答へて倉庫から五本出して來て默つて渡した。

「無理いうて濟まん」

「ハア」

暗い中で敬禮をしながら私は、とても良い事をした樣な、そして自分自身が救はれた樣なほつとした氣持がした。

×　　×

兵隊は朝起きると先づ、水を汲みに行くのが仕事であつた。井戸は丘の上の炊事部の傍に一つあつた。その他にも二三點在してはゐたが、上から覗いて見ると屍體の樣な物が浮いてゐたり、とても變な臭がして氣持が惡いから、皆んなは相談し合つた樣に丘の上へ汲みに行つた。何處かで調達して來た大きなバケツか桶の樣な物を棒にぶら下げ、二人で擔つて歩調を揃へて丘を越えて行く。

井戸は釣瓶式になつてゐた。凍つた朝などは、釣瓶の繩がぼう鱈の樣に固く硬ばつてゐて、空轉をするし、手は切れる樣に冷たかつた。毎朝の井戸端は兵隊で賑はつてゐた。銘々が自分の受持の患者の話やら、あれは助かるとか助からないとか、家から手紙が來るとか來ないとか話題は中々豐富であつた。

手紙と云へば十一月〇〇〇上陸以來、手紙を受取つた者はまだ一人もなかつた。

こちらは暇を見ては手紙を出してゐるのに內地からは一本も來なかつた。

皆んな手紙の來るのを待つてゐた。

×　　×

朝から氣持よく晴れ渡つた日であつた。

本部の前の草原に兵隊が十二三人、人垣を作つて何かを見てゐた。私は經理室の窓からそれを見て何であらうかと思ひながら外へ出て、人垣の後から覗いて見ると、破れた正規兵の服を着た支那人が震へながらうづくまつてゐる。左の胸部に銃創らしい傷口が見えてゐて赤黑い血の凝りが上衣にこびり付いてゐた。病室の裏の小屋に隱れてゐたのを、警備隊の兵隊に發見され、それをうちの兵隊が讓受けて來たとの事であつた。で、取りあへず此の明るい所へ連れて來て、さてこれから何うしようかといふ事を協議してゐるのであつた。

年齡は二十五六、色の黑い痩せた男であつた。すつかり戰意を喪つて、何かを哀願する樣な眼指しで、取り卷いてゐる我々の一人々々を見上げてゐた。

後の方で誰かゞ「やつちまへ、やつちまへ……」と叫んだ。皆んなの顏にそれが良からうといふ表情がさつと流れた。繃帶をした入院患者がぞろ〳〵と出て來て取り卷いた。

「何んだ、どうした」

隊長の聲がした。人垣がさつと左右に開いて皆んなは敬禮をした。

「殺しては不可ん。創を見てやれ。そして誰か軍司令部へ護送して行け」

隊長はさう言ひ殘して本部の中へ入つて行つた。皆んなは隊長の姿が本部の入口に消えるのを見送つて、しばらく互に顏を見合せて默つてゐた。すると、

「よし、俺がやつてやる」

と言ひ乍らギブスで兩手を餅屋の樣に眞白にした治療室附のN二等兵が、腰を屈めて敗殘兵の服を脫がせた。右の上膊部にも、擦過傷がある。兵隊の一人が藥物と繃帶材料とを持つて來てNと二人で創口を洗つた。敗殘兵は時々顏を顰める。

こびり附いてゐた血の凝りが取れて、綺麗になつた創口の肉が、拔ける樣に明るい陽に白々と照らされてゐた。敗殘兵はこれから何うなるのかナアといふ樣な顏付で創を見たり皆んなの顏を見たりしてゐた。

やがて繃帶が終つて服を着せてやつたN二等兵は、誰に云ふともなく「オーライ」と言つた。

敗殘兵は地べたに坐つた儘で何べんも御辭儀をしてゐた。

私と同じ經理室に勤めてゐる横山二等兵が、

「よし、今度は俺の番だ。俺が司令部へ連れて行つてやる」
と言ひ乍ら前へ出て、
「立てッ」
と云つた。併し敗殘兵は只お辭儀をしてゐるだけであつた。横山は彼の肩先を右手でぐい〳〵押し乍ら、
「立てと云つたら立たんか」
と呶鳴つた。相手は相變らずお辭儀をしてゐた。之は怒る方が無理で、彼には日本語が判らんらしいのである。

× × ×

やがて、丘の向ふの道路に面した表門を出て行く敗殘兵と横山巡査の後姿を、我々は別々の氣持で見送つてゐた。

× × ×

此の頃、餘り砲聲は聽えなかつた。併しぢつと耳をすますと、遠い所からゴロ〳〵と地を這ふ樣な音が聽えて來た。
丘の上から西の方を見ると荒涼たる一面の原野の彼方に低い山がある。あの山の向うが「南京」だといふが、此のゴロ〳〵といふのはその「南京」の街の音かも知れない。
私達はまだ三度の飯に事を缺く樣な事はなかつた。之は召集令狀を受け取つた時の豫想を裏切つた重大な事の一つであつた。
尤も、新鮮な野菜と肴は滅多に喰べられなかつたが、その代り豚は毎日であつた。
あちらこちらの戰火で飼主を失つた豚が五匹また七匹と一群をなして漂泊の旅を續けながら此の邊を通りかゝるのを、兵隊は色々な戰術で捕つて來ては炊事掛で調理するのであつた。豚肉は鹽燒が一番甘い。
空の飯盒を火にかけて、底が少し熱くなつた所へ、炊事掛から貰つて來た細切の豚肉を入れ鹽を振りかけて搔き混ぜてゐると、とても堪らんいゝ臭が味覺をそゝる。
私達は古バケツの中で木ッ片等を燃して、經理室の隅の方で此の燒肉をやるのが例であつた。塚谷と横山と私の三人は、肉が手に入ると競つて此の燒肉係をやつた。どうせ燒け上つたのは皆んな

で分けて喰べるのであるから、人に燒かせて置いて自分は專ら喰べる方だけにすれば良ささうなものであるが、私達兵隊は率先して燒く方の係をやつた。といふのは、燒き乍らちよい〳〵味を見るといふ術があるからであつた。軍隊用語で之を「檢食」といふ。

凡そ「檢食」は一回限りが原則であるが、私達の此の「檢食」は、一切喰べて見ては鹽が足んと云ひ、又一切れ喰べては辛いといふのが通例であるから、燒豚の檢食態度に關する限り、其の都度小紛爭が繰返された。

時々、經理室へ蠟燭を受領に來るので顏馴染の警備隊の年老つた上等兵が、或る日、大きな赤い肉をぶら下げて部屋へ入つて來て、

「今日捕つた水牛だ。甘いですぞ」

と言ひ乍ら置いて行つた。其の夜、私と塚谷との共同作業でそれを鹽燒にしたがとても固くて嚙み切れなかつた。これは肉が新らし過ぎるからだといふので、倉庫の小屋の隅へ藁繩でぶら下げて新聞紙を被せて置いた。明日喰べよう、今日はもう良からうと言ひ乍ら、新規に補給される豚肉の方に氣を取られて件の水牛は忘れるともなく忘れてゐたが、それから五日目の夕方、塚谷が「腐ると不可んぞ……」と言ひ乍ら出して來たのを見ると、鮮紅色であつたのが少し黑ずんでいさゝか異常

の臭氣を放つてゐた。

私が「手遲れだなア」と言ふと塚谷は、

「まだ脈はある」と言つて蠟燭の空箱の上へべたりと置いて、上邊をナイフで切取つたのを見ると中の方は五日前と同じく赤い色を保つてゐた。塚谷は、

「大丈夫だ、恰度い〳〵加減だ」

と言ひ乍らそれを細く切つて、

「今日は、すき燒きだ」

と飯盒を出して部屋の隅でガタ〳〵やり出した。暗くなつて來たので私は机の上の蠟燭に灯をつけて、先刻から開いた儘の帳簿をつけにかゝつた。

しばらく經つと、い〳〵臭が部屋ぢうに立ちこめて來た。それは曾つて私が故鄕を立つて來る二日前の晩に、友達と二人で肉屋の二階で突き合つたすき燒の臭を思ひ出させた。

私と向き合ひの机で何か仕事をしてゐた二人の主計と、私の隣の横山が「い〳〵臭やナア」と言ひ出した。

塚谷が私の方を向いて口をもぐ〳〵させ乍ら、

「今日は檢食をやらんのか」
と言つたが、私は生刻の異常の臭氣が何となく氣になつてゐたから、
「うん、今日は貴樣に讓つて置かう」
と答へた。それでもいざ出來上つて、平常もの樣に土間の毛布の上へ皆んなと一緒に車座になつて其の飯盒を取り圍んで見ると、箸は自ら活潑に動いて、皆んなと一緒に「美味い〳〵」を繰り返し乍らすつから平てしまつた。
喰べ終つてから私はクレオソート丸を一度に五粒服んだ。翌朝、便所へ行つたら、眞ッ黑い固い奴が爆彈の樣に落下した外に異狀はなかつた。

× × ×

十二月も押し迫つた廿三日の夕方、南京へ連絡に行つた部隊のトラックが、南京野戰郵便局から受取つて來たといふ白い大きな行囊を五個程積んで歸つて來たのを手始めとして、それからは大てい五日目程に手紙が來る樣になつた。郵便の行囊を積んだトラックが、丘の彼方の門を入つてなだらかな坂や崖の間を縫ふ樣にしてやつて來ると、兵隊は窓から首を出して、

「來た、來た」と叫んだ。
行囊は本部の兵舍掛が兵隊の勤務場所毎に區別して配達するのであつたが、兵隊はそれが待遠しくて耐らなかつたから、こそ〳〵と本部の事務室へ出かけて行つて、自分のが有るか否かを內偵して來るのであつた。そして自分への名宛を發見すると、掛の兵隊に有無を言はさず押收して來て、恰で鬼の首でも取つた樣にいそ〳〵と封を切るのであつた。
一口に手紙と言つても、その內容は色々であるが、矢張り眞實の籠つてゐるのが嬉しい。
「お宅の前を通りましたら御兩親共にお揃ひでお達者の御樣子でした」
といゝ樣な事が書いてあると、其の處だけを何べんでも繰返へし讀んだ。
たとへ其の文章が下手でも惡筆でも、人の眞心が犇々と胸を打つた。
喜んで封を切つても、嚴めしい印刷物で、
「謹啓時下……」
に始まつて、
「東洋平和のため……云々」
で「敬具」に終る樣な機械化的、大量生產的な類には、尠からざる失望を感じた。

併し之は私の贅澤な申し分であるかも知れない。他の戰友達には何本も來たのに、自分には一本も來ないといふ樣な日には耐らない寂寥に囚はれて、嬉しさうに讀んでゐる奴の顏を見るのも腹が立つのであつた。「謹啓」でも印刷物でも何でもいゝ。自分への名宛を發見した刹那の喜ひだけで既に手紙としての價値があるのではないだらうか。

手紙といへば此の二十三日に來た最初の手紙の中に、私にとつて私の人生の歷史に劃期的ともいへるニュースが齎されてゐた。

それは妻が男兒を分娩したといふ故郷からの便りであつた。私が初めて「父」になつた事を知らせてくれた便りである。

當然來る筈の報らせが來たに過ぎないのであつたが併し、

「丸々とよく肥えてゐるし、兄さんに生き寫の顏をしてゐます」

といふ弟が書いた其の手紙を讀んでゐる裡に、生れて初めて經驗する「父」の意識が全身にみなぎつて何故か顏がほてつて來るのをどうする事も出來なかつた。之が嬉しいといふ感情であらうか。

原隊地を發つて故郷の驛を通過した時に、歡送迎の人と旗の波の中に既に無格好なスタイルで揉まれてゐた臨月の妻の姿と、海山越えて遙かのあの町のあの家の中に、まだ眼も開かぬ赤い肉塊の

樣な私〻赤ン坊が、蒲團にくるまつて眠つてゐるであらう有樣とが、頭の中をぐる〳〵廻り乍ら明滅した。その夜、同室の塚谷や横山が何處かでビールを一本心配して來て、「お祝ひ」だと言つて栓を拔いてくれた。

私は蠟燭の灯の下で椅子に腰をかけ、兩足を机の下へぴんと伸ばして胸を張り乍ら、性來が飲めぬビール瓶に口を當てゝぐいとひと口やつて「有難う」と言つた。

「おい、嬉しいだらうナア」

と言はれると本當に急に嬉しい樣な氣持がした。嬉しいに相違ない。私の子供が故郷の空の下で呼吸をしてゐる。

暖い空氣が私の身邊をふんわりと取り卷いて、世界中の幸福を私一人が背負つてゐる樣な氣持になつた。私は何といふ事もなく立ち上つて、部屋の壁に掛けてある私達の共有財產の小さい鏡の前へ行つた。

私は鏡を見た。丸刈の若い顏が微笑んでゐた。

× ×

南京との連絡がつく樣になつてから、經理室では酒保品として南京衣糧廠から煙草と羊羹を少しづつ仕入れて來て販賣することになつた。お客の大部分は入院患者であつた。

第一線から送られて來た患者は、ひどく煙草缺乏に惱まされてゐたと見えて、何はともあれ先づ煙草を要求した。羊羹幾何あつても足りなかつた。

酒保品が少しでも到着したとなると、まだ通報もしないのに荷造りを解いてゐるうちから經理室の前へ長い一列の縱隊が出來た。

獨り歩き出來る患者が我一にも〳〵とあちらこちらの病室から出かけて來て並んでゐた。其の列は石廊下を横切つて本部の入口へ延び、更に草原から丘の方へ續く日もあつた。併し南京での物資調達も數量の點でまだ思ふ樣には買へなかつたから、忽ち品切になるのが例であつた。尤も、煙草は一人に一個、羊羹は一人に一本といふ風に統制をとつてはゐたが、蜿々長蛇の白衣の縱列には敵はなかつた。

もう品切れだと言つても患者は中々押しが强い。「本日、たばこ、羊羹賣切れ」と書いた紙を本部の玄關の壁に張り出すと、其處に順番を待つてゐた縱列が、

「殺生なことを云ふなよ」

と悲痛な叫びをあげた。

殺生ではないが、無くなつたものはどうにもならん。取り付けを喰つた破産の銀行の樣なものである。

私も煙草のみであるし、甘い物も好きであるから押かけて來る患者の氣持はよく判る。

それだけに「賣切れ」の看板を出すのは心苦しい次第であつた。

雪がちらついたり、いゝお天氣になつたりして歲の暮になつた。

昭和十二年十二月三十一日夜の十二時、私は机に凭れて私の陣中日誌を書いてゐた。窓の外は眞ッ暗であつた。私は外へ出た。

徐夜の鐘が聞えて來る筈はないが、望鄕の念切々として征野の越年亦ひとしほの感慨であつた。

月も星もない夜空である。

「女郎の誠と玉子の四角、あればみそかに月が出る」

戰友の誰かゞ言つた浪花節の文句をふと思ひ出して、なる程みそかには月が出ないものかなアと思つた。

私の家族は今頃年越そばを喰べてゐるであらう。

私の故郷の習慣である。

私は私の大好物のそいを、所詮味はへぬものだけに餘計に戀しく思つた。

部屋へ入ると皆んな年越の酒だと云つて水筒で燗をしてやつてゐる。私もその車座へ割り込んで飲んだ。

× ×

昭和十三年の元日早々、私達の部隊は上陸以來最初の新聞人の來訪を受けた。

それは○○特派員木村毅、○○○○ニュース映畫班の開田、小野の三氏であつた。陣中とは言ひながら雑煮餅も喰べ、炊事掛りが本部の玄關脇へ据ゑ付けた菰被と、恰も朝來の快晴とに何となくのんびりした正月らしい氣分になつて、流石に此の日ばかりは閑散な經理室の一隅で毛布を頭から被つてうつら〳〵としてゐると、本部の方が何だかざわめいて來たので、のそ〳〵起き上つて出て見ると、國防色の上衣に○○の腕章を附けニッカーズボンを穿いた四十年輩の太つた男と、同じ樣な服裝の若い男が二人、部隊の松浦副官の案内で病室の方を見に出かける所であつた。松浦副官は私を見ると三人をひと足やり過しておいて「○○の特派員の方だ」

と言つて其の人達の名刺を私に見せた。

私は「ハア」と言ひ乍ら其の名刺を見て中で太つたのが木村氏だなと直感した。木村毅と言へば新聞人といふよりも、むしろ傳記小説の作家として主に講談社の雑誌を通じて其の名前だけを知つてゐたが、顔を見るのは是れが初めてであつた。其の夜、炊事部の裏手の丘にある第五病棟の二階廣間で、木村氏を中心として軍醫達の座談會が催され、松浦副官が私にも聞きに來いと云はれたので、私は非常な期待をもつて蠟燭と筆記具を携へて會場へ出かけて行つた。

圓形に並べられた机に、部隊の軍醫等が、正面には木村氏と外の二人を中央にして小原隊長や松浦副官が腰掛けてゐた。蠟燭の灯があちこちに搖いでゐて、並んでゐる人達の半顔をほのかに照らしてゐた。恰で貧乏寺の報恩講の樣であつた。

私は此の座談會での皆んなの話を何より貴重なものとして一語も聽き洩らすまいと一生懸命に筆記した。それは主として次の樣なものであつた。

○○特派員を圍む座談會要記

—前　略—

（開田特派員）

日本の女でも中々偉いのがゐますね。

私共が上海で此方の方面へ來る準備をしてゐた時、狐の襟卷をした日本の女が、とても若い美人でしたが「私も一緒に連れて行つて下さい」といふんです。

例の林フミ子女史は女記者として行かせたいと思つてゐましたが、こんな關係の無い人を同行するのは社としても具合が悪いし、實際困つて「何をしに行きたいんですか」と尋ねたら、

「我々は若い女性として團體を組んで皇軍慰問隊を作つて日本女性の意氣を揚げたいから」

と熱心に云ふんです。併し私共の立場として同行するわけには不可んので、その理由を話して禮を厚くして歸つて貰ひましたが實際ガツチリした女がゐますね。

(木村特派員)

あの時はね、傍に澤山人が見てゐるので、

「此の御婦人は決して××婦ではありませんからと聲明したければいかんし、いや、あの調子では相當に熱心なものでしたよ。

先日私が林フミ子を連れて「太湖」の飛行場へ行つた時に、入口の所に海軍　歩哨が立つてゐて私と林さんとが並んで入つて行くと「アン畜生!!」と云ひ乍ら捧げ銃をしたのはどうも……(笑聲)

(松浦副官)

此の間私が南京へ連絡に行つた時でしたが○○門の所に支那兵の○○○○○○○がクリークの底に澤山バラ撒かれてあるのがありましたね。

(開田特派員)

入場式の時にはあそこらは綺麗に掃除がしてありましたが、あの中にね、○○が半分位ゐ切れてまだ動くのがあつて……

(木村特派員)

澤山の捕虜があつて殘つた家族の者がぞろ〳〵とやつて來て、亭主に逢はせてくれと言つて三日位ゐ續けてやつて來たのがあつたね。

(開田特派員)

さう〳〵あれは南京が先月の十二日かに陥づて間もなく私達が出かけた時だつた。途中で支那の婆さんが僕達の自動車に獅嚙つついて離れない。

正規兵がまだ澤山殘つてゐて恐いから助けて呉れといふんです。

捕虜の中でも善良さうなのは家へ歸してやつてゐましたが、その時一人の男に貰ひ手が三人もや

つて來て「これは私の息子です」とか「これは私の夫です」とか言ひ合つて、その一人を奪ひ合つて連れて歸る。ところが其の翌日になると「これは違つてゐます」と言つて返しに來て、他のを呉れといふ樣な始末で……中には見てゐる私達に助けてくれと云つて命乞ひをする者もゐましたが、そんな事は出來ないから我々はほう〳〵の態で逃げて來ました。……（笑聲）

（松浦副官）

ではこれから木村氏等が特に斯ういふ方面について知りたいと思はれる事があると思ひますからそれを一つ〳〵註文して頂いて、それで何かの御參考になれば何とか纏めて頂くといふ樣にしたらいゝと思ふから、木村氏に進行係りといふ樣なところでお願ひしたいと思ひます。

（木村特派員）

實は私一人だけでやつて來て筆の方で衞生部隊の活躍を內地へ紹介したいと思つてゐたのでしたが寫眞の方も手がすいてゐたので倖だと思ひ一緒に來て貰つたわけです。

この事變が始まつて以來、內地で私も現地報告の講演を五十回程やりました。ニュース映畫の方も大いに歡迎せられまして其の優秀にして大膽な點に於ては同じ現地へやつて來てゐたスペインの寫眞班も遠く及ぶ所ではないと言はれてゐました。然し今日ではそろ〳〵內地の人も從來の戰爭の

話や映畫には食傷の氣味で、私も時間があれば異つた方面に於ける現地の有樣を內地へ知らせたいと思つてゐました。これは東京驛で私が見た事でしたが白衣を着た兵隊さんが歸つて來られた時、五ツ位ゐの男の子が父ちやんと云つて左の袖に縋つたところが左手が無いので其の子供は不思議さうにして見てゐる。其の有樣を見て、出迎へに來てゐた參謀本部の人達も、藝者が澤山來てゐましたが其の藝者も皆んな貰ひ泣きしてゐたのですが、あんな光景をニュース映畫にすればとても國民を强く打つ事ですが、それは許されないので然し文章に現はしても構はないのであります。

そこで、今日のお話も幾ら悲慘な事でも結構ですから眞實の儘を話して下さい。一人で五分間位ゐづつ如何でせう。

（松浦副官）

自分は庶務主任で直接患者にあたることは尠いのでありますが、たゞ色々の報告を聞いただけで非常に感銘する時もあるので……實際何とも言はれない氣持ちの……

（吉田准尉—現少尉）

食事の方の話でありますが、衞生兵は食事の時にはとても忙しくて重症者には喰べさせねばならんし、食事の分配はしなければならんし、中々手が廻らんのですが中に斯んなのがあるんです。

兩手を傷めてゐる患者が仰向けに寢た儘で食器を胸の上へ載せて傷の輕い片方の手でさじで掬つて喰べてゐる狀況ですな。

輕い患者ですと小豆を飯盒で煮てゐる者もあります。

（隊　長）

患者同志で助け合はんかナ。

（吉田准尉）

さういふなのもあります。食慾の障りのない患者は自炊をしては、それを重い患者に分けて喰べさせてゐるのをよく見かけます。

（第三病棟A軍醫）

私は患者が死んで行く時に　天皇陛下萬歲を本當に言ふかどうか疑がつてゐたのですが先日私の病棟で死んだ胸部銃創の擔架隊のあの兵隊等は立派にそれを言つて死にました。實に私共軍醫として何故斯ういふ立派な兵隊を死なせねばならぬのかといふ事を深く感じます。

それから衞生兵の働き振りですが今まで內地などで聞いてゐたのでは野戰病院あたりで患者が衞生兵を呼んでも中々來て呉れないので松葉杖で衞生兵を突ついたといふ樣な事も聞いてゐましたが

我々の病棟では六人位ゐで百人程の患者を扱つてゐるのですが、皆んな濕情をかけてやつてゐるので……

それから病棟區長（衞生下士官）が考案して重症者と輕症者とを隣り合せに一人づつ挾んで寢かせる樣にしたところが重い患者の世話を隣の輕い患者がしてくれるといふ風で實にいゝ具合だと思つてゐます。忙しい時には斯うした事がとても助かります。

（松浦副官）

人工呼吸のあの話をしたら……

（第三病棟A軍醫）

あゝ、あれは死にましたが僕の病棟から死者を出して折角やつてくれた衞生兵にも濟まんと思つてゐます。併し手當については思ひ殘すことはありません。

絕對に思ひ殘すことなく良心に恥ぢない手當が出來るのは軍隊の設備の良い所だと思ひます。

（松浦副官）

もう最期だといふ事になるとたとへ五時間でも六時間でも生き延ばしてやることに努力するが此の野戰に於てういの衞生兵が非常に努力してくれる。いますぐ死んでしまふといふ患者でも人工呼

吸をやつて一時間でも生き延ばさしてゐる。

あの人工呼吸は一人で十分間も續けてやると、とてもえらいのですがそれを交代しては五時間でも六時間でも續けてゐる有樣です。

(木村特派員)

そんなのは特に生かして置きたいといふ理由があるのですか。

(松浦副官)

別に理由なんてありません。良心的にさうするんです。忙しい時にでも徹底的にやつてゐます。

(木村特派員)

さういふ手當は年齢のいつた衛生兵がやるのですか。

(松浦副官)

× ×

(除　長)

今まで死んで行つた患者の事を後で考へて吾々が後悔する樣なのは一人も無いが死に到るまでの

處置が……藥は充分に有るし金錢を離れてやるから注射でも何でも遺憾なくやる。此の間も「瓦斯エソ」で足を切斷することになつて本人も覺悟してゐたが、それを注射をしたり、毎日繃帶交換をしたりして經過を見てゐると切らなくてもいゝらしい。藥物の効果が現はれて來てゐる。本人も一日々々氣持がよくなりますと言つてゐる。それがとても喜んでゐたが赤ン坊の樣に甘えて、わし等が行つてもぜんざいを喰べたいと言つたりする。正月が來たら餅を喰べさせると云つたらとても嬉しがつて正月はまだですかと顏を見る度に言つてゐたが……

それが昨日死んだんだ。人工呼吸などあらゆる事をしてやつたが可愛想だと思ふ。あの時ぜんざいを喰べさせてやれば良かつたと思つたりしたが……

實際手當については是は此處だけではないが徹底的にやつてゐる。

それから感心するのは死んで行く時に何か言ひ殘す事はないかと尋ねても、何も言ふ事は無いと言つて一言も私事を云ふものがない事だ。戰爭の眞只中では萬歲を叫んで死ぬが後方の病院ではさうでもあるまいと思つてゐたのに此の病院へ來ても私事を語らず萬歲を叫んで靜かに死んで行く。

入院患者の特色だ。感心だと思ふ。

それから暗い蠟燭の光りで默々として次から次へと繃帶交換をしてゐる衛生兵の姿にも泣かされる事がある。

それは勇ましい姿である。

斯ういふ所の患者は手術ばかりでなく、慰めてやつたり熱いものをやつたり新聞や煙草を與へたりして精神的に盡すといふ事が大切だと思ふ。わしは大體さういふ風に考へてゐる。

(第四病棟B軍醫)

自分の病棟では將校患者ばかりを〇〇名ばかり預つてゐますが何ういふものですか重傷患者も、「痛い」といふ事を聞きません。

准尉で一人、これは右手の骨折貫通銃創ですが毎日繃帶を交換する時に起き上つて貰はんと都合が惡いし、其の起きる時に痛いのを堪へて起きられるのがよく判るので其の度にお氣の毒に思ふんですが……で起きて貰つて交換を終つて又寢る時に大きな溜息をついて「あゝよかつた」と言はれるんです。さうすると私の方でも「あゝよかつた」とそんな風に思ふんです。本當にその時は私自身も「あゝよかつた」と思ひます。

患者が實家へ出す手紙を時々調べるのですが、どんなに重症の患者でも皆んな、

「すぐ治る、大した事はない」

といふ風に書いて家の者に心配をかけまいとしてゐるのがよく判ります。

そんなのを見ると實際その……。

それから夜の診斷の時ですが、寢臺と寢臺との間が狹いので私がその間へ入ると衛生兵が入られないので困る。そんな時には傍の手の無い患者がもう片方の手で蠟燭を持つてゐてくれる。そんな事をして此の患者と衛生兵の間にとても平和的な……を見て泪ぐましい樣な……です。

(第三病棟A軍醫)

野戰の患者は重症は別として一般に恢復が早い樣です。隨分永くかゝるナアと思つたものでも一日々々と恢復してすぐ一人で歩ける樣になります。

そして患者がお互ひに助け合ひ親切にし合つて內地の病院では一寸見られない狀態をよく見るのです。

此の間も或る患者が繃帶交換をする時に痛がつてゐるのを隣りに寢てゐる足を切斷した患者が、「直ぐ治るぞ、大分良くなつてゐるぞ」と言つて慰めてゐます。

今度は其の足を切斷した患者の番になつて繃帶を交換する時になると先刻の其の患者が……自分

は寢てゐて隣りの者の創は見えないんですが……さもよく見える樣に、

「あゝ大分良くなつてゐるなア」

と云つて前のお禮返しの意味か……（微苦笑）

さう言つて勵ましてやつてゐるので可笑しい樣ですが其の眞心には實際泣かされるんです。內地の一般の病院ですと足や手を切斷する時には患者の妻子や親戚の者まで集まつて來て大變なことになるのですが、此の野戰では本人の承諾だけで……本人に其の事を言ひ聞かせていくら嫌がつても軍醫が決めれば切斷してしまふのですが、さういふ最後の手段を選ぶ時に患者の妻子等の事を思ふと感慨深いものがあります。

（第五病棟C軍醫）

患者の中で盲管銃創もありますが、面白いのは其の彈丸を拔き取つた場合にそれを、その彈丸をとても欲しがるんです。

部隊では保存して置く事になつてゐて患者にやるわけには不可んのですが、患者は拔き取つた彈丸をつくづく眺めてゐます。

一種の何とも言はれぬ氣持だらうと思ひます。一度、あまり欲しがるので內密でやつたのがありますが……あの氣持はまた格別でせう。

（木村特派員）

日露の時にはやつた樣ですね。

私の知つてゐるんで斯ういふ患者があつたですね、上海戰爭が始まつたとき一人の兵隊が上陸するとすぐに一發やられた。一發喰つて野戰病院へ收容されたんですが、戰友達の手柄話を聞いてたまらなくなつて、恰度其の時その病院へ行つた社の支局長に、自分はまだ敵の顏も見ない裡にこゝへ入れられてしまつて殘念だから是非たのむ。是非共前線へ連れて行つて下さいといふので仕方なく自動車で前線をぐる〳〵廻つて見せてやつて、又もとの病院へ連れて行つたら又出して下さいと言つてきかなかつたのですが此處ではそんなのは無いですか。

（松浦副官）

今日まではまだ無い樣ですが皆んなしきりに原隊復歸を志願する樣です。

うちの病院では目下のところ殆んど後送といふ事はしないで大てい原隊復歸ですが、まだすつかり治つてゐない裡からそれをしたがるので、で成るべく治つてからといふ事にしてゐますが、さうすると何うしても承知しない。まア數日後になつたら歸してやらうと言ふとその數日を最少限度の

二三日といふ風に自分で勝手に決めて指折り數へて待つてゐて、數日といふ話だつたがもう五日にもなるが早く歸して下さいときかんのがあります。こちらも色々と注意して原隊復歸の日を決めるんです　大體こんな樣な空氣です。

（木村特派員）

こんなのは何うですかね、たとへば日記をつけてゐる患者がありませんか、あの吳淞鎭の戰ひの時に兵隊の手紙を澤山持つて歸つたが社で檢閲すると中にカフェーの女給に宛てたのが澤山出て來ましてね。（笑聲）

（第三病棟A軍醫）

さうです、そんなのは私の方の患者にもちよい〳〵有ります、中に名古屋の藝者に熱心に出してゐるのがありますが。

（木村特派員）

いや、そんなのは何處にでもよくあるらしい。どうも○○の兵隊は名古屋の藝者宛が多いらしい

（笑聲）

開田君、繃帶交換の樣子を撮つて見たらどうかね。

（開田特派員）

いや、それがね、血の滲んでゐるのを撮ると不可ないので……（笑聲）

それよりも先刻のお話の患者同志で世話をし合つたり看護兵や軍醫の手助をしてゐる所を寫すと野戰病院の感じが出て良いと思ひますね。

實は上海の兵站病院へ恩賜の繃帶が下つたとき、患者がそれを押し戴いてゐるところを寫して內地で公開して感心された事があります。

恩賜の繃帶を患者が拜んでゐる、軍醫と看護兵がぢつとそれを見てゐるといふ三人の情味ある光景で、その映畫を見た女の人などがオイ〳〵泣き出したりして困つた事がありましてね。

（小野特派員）

明日湯水鎭の溫泉場へ先きに行つて……

（開田特派員）

溫泉場では兵隊が裸だから駄目だ。

（木村特派員）

いや、いゝよ、首だけ出してゐるところを撮つてもいゝだらう。乳から上なら構はんだらう。（笑

聲)

筆者註

此の湯水鎭といふのは顏家村の一里程西にある小部落で其處に自然の溫泉があり蔣介石の別莊もあつた。恢復期の患者の爲めに部隊では此處へ分院を設けてゐた。

(木村特派員)

白い病衣は皆んな着てゐない樣ですが……

(松浦副官)

えゝ、それはまだ充分に配給されてゐないので……

死者の取扱ひの狀況などは如何でせうか。

(木村特派員)

それは寫眞にも文章にもどうもむつかしいですね。

(開田特派員)

その死ぬことについての話ですが日本のニュース映畫では日本の兵隊は一人も死んでゐないので……(笑聲)

日本の兵隊の傷ついた所なども、足を傷めて倒れてゐたのが起ち上る場面がありますが、あれは檢閲の方では何かに躓いて倒れたのが起き上るといふ風に解釋してくれて許可をとつてゐるわけです。ところが都合によると其の一べん起き上つたのが又倒れる場面がある……それはどうも困ると言つて許可して呉れないんです。

——以下省略——

× ×

此の座談會での主なる談話は大體こんなものであつた。私は勤務の關係上、まだ直接患者に接するといふ事が無かつたので、かうした話は今更の樣に物珍らしくその一つ一つに胸を打たれた。

私達の部隊は命によつて南京へ前進することになつた。

私達、經理室の兵隊は二三日前から色々の物品を梱包にして前進の用意を備へてゐた。

昭和十三年二月十二日、顏家村の丘には雪がちらついて、肌寒い風が荒れた野原から吹いて來る。南京まで僅かに七里、私達は此の日早朝から部隊のトラックに梱包の積み込みを始めた。十二月十二日に此處へ來てから恰度二ケ月目、私達は待望の南京へ前進する喜びに躍々として移動の作業を

した。

上海から此の顔家村へ前進した時の樣に大袈裟ではなかつた。距離が近いから、恰で郊外から街へ轉宅でもする樣に、數臺のトラックが何べんでも往復して梱包や兵隊を運んで行つた。私は病室の兵隊等と一しよに梱包の間へ割り込んで顔家村を後にした。表の門を出る迄、車は丘陵の間を廻り廻つて緩やかに走つて行つた。

振り返へると私達の住家であつた灰色の平たい家が、丘の間々に何となく寒さうに見えてゐた。野原の眞ん中に、私の愛用した便所の小屋が小さくぽつねんと立つてゐた。

「オハラニユース」について

「オハラニユース」といふのは部隊員の寄稿を取り纒めて謄寫版刷りにした、四頁乃至八頁の部隊のパンフレツトと云つた樣なものである。

部隊がまだ、上海で待機してゐる頃、或る日何かの用事で本部の事務室へ入つて行つた私に、部隊の副官であり庶務主任であつた松浦中尉が、

「これから部隊の陣中日誌を書いて行かねばならん。それは誰か下士官の者にやつて貰ふ心算だがそれとは別に何か部隊員同志が讀み合ふといふ樣な部隊の機關誌と言つたものを適宜に發行して見ては如何だらうか。部隊も近く何處かへ前進する事になる筈だし、益々忙しくなつて、そんな事は或はとても出來ないかもわからんが、せめて一ケ月に一回でも二回でもいゝから皆んなから原稿を集めてやつて見ると面白いと思ふがね」

と云ふ相談(?)を受けた。

これは私にとつて實に愉快な話であつた。

私は故郷の青年團に關係してゐて、謄寫版刷りの機關誌等をやつた事もあるし、元より下手の横好式の趣味を持つてもゐるから此の話を聞いてゐる裡に『はゝアあゝいふ具合にやればいゝんだな』と大體の輪廓が頭に浮んで來て「やらして下さい『オハラニユース』と名附けませう。大體一週に一度の發行で」

と簡單に引キ受けてしまつた。

それから數日後に顔家村へ前進といふ事になつたので、上海待機中には全然具體的に着手といふ事は出來なかつた。併し私の胸の中では此の事に對する野心湧然たるものがあつて、恰度前進當日

の十二月十二日の朝も「トラック」に積み込む爲に兵舎の前へ小山の樣に出された梱包に腰を掛けポケットから手帳を出して「オハラニュース」といふ標題の文字を何ういふ風にしようか等としきりに構想を練つてゐたものであつた。

で、顏家村へ着いて病院開設早々の慌しい過渡期的狀態が少し落ち着いて、私が經理室の兵隊としての仕事の分野も判然して來たし、其の中に更に私の時間として「ニュース」編輯の餘裕も見出す事が出來た。併し最初から原稿を募集することに色々な困難が豫想されたので、取り敢へず私があれやこれやと考へてゐた事、殊に上海から顏家村への最初の前進行を主眼として書き下した見本的な原稿を松浦中尉にお目にかけると「此の調子で良いだらう」との事であつた。そこで部隊が內地から持つて來た謄寫版用具を一組出して貰ひ、紙の方も色々と取り計らつて貰つて茲に洋半紙半折六頁「松浦庶務主任檢閱、週刊オハラニュース」の第一號が十二月十九日附で出來上り、部隊全員に一部づつ配られたのである。小原隊長は忙中わざ〳〵「ニュース寄書」なる隨筆をものされて其の卷頭を飾つて下さつたが、斯うした試作品とも言ふべき第一號に取りかゝつた時から、私は私の精力と熱意が今後いつまで續くかといふ事に對して私かなる憂ひを持つたのである。さもあらばあれ私が此の創刊末尾の編輯寸話に於て、

「週刊」などと銘打つて毎週日曜日發行の豫定と約束はしたが、もとより專門にかゝつてゐるわけではないから此の約束には八割の妖怪性がある。凡そ豫定と越中褌は外れる事において相通ずるものがあるが、其の罪を不足勝ちな用紙と蠟燭とに轉嫁したところで、必ずしも卑怯の誹は受けまいと思ふ。とに角大いに勉强するつもり。

蠟燭の消えかゝりたる夜寒むかな

と書いたのも、省て亦宜なる哉である。

それでも一週間後の二十六日附で第二號を出す時には、創刊號の反響とでも言はうか部隊員の投稿もあり、一部の熱心な軍醫等から注意を受けてゐた所謂三號雜誌の危機も切り拔けて、昭和十四年一月十八日附發行の第三十七號（信陽にて病院開設の頃）まで、其の間戰況に依り多少の遲延は免がれなかつたにしてもどうにか續いたのである。

尤も途中で部隊長の更迭があつて「オハラニュース」の名は第二十八號が最後となり第二十九號からは矢張り部隊の名を其の儘に「さゝきニュース」として發行を繼續してゐた。

そして此の名前の變る頃から內容に於ても、從來の部隊員の投稿を纏めるといふ行き方から、次第に部隊の動靜を銃後に傳へるといふ本質的な「部隊ニュース」に變つてゐた。

之は私が、特別に意識して斯うしたのではなく、何時の間にやら次第々々にこんな姿になり、之を手にした部隊員の方でも亦、自分が讀んだ後を故郷へ送るといふ風になつて了つたのである。要するに對内的から對外的へと着眼の對象が變つて行つたのである。

私は此の自然の推移を非常に面白く思ふと同時に、之れが本當の「ニュース」の行き方であると思つて、内心の快哉を禁ずる事が出來なかつた。其の後私達の部隊（第一半部）は、既に漢口陥落と同時に同地へ前進してゐた第二半部を追うて、二月上旬漢口へ前進し、間もなく私は勤務交代の爲め上陸以來の職場であつた經理室から傳染病室附となつた。當時恰も、二度目の隊長更迭で、今の藤本隊長（現任）を迎へてゐたから、尠くとも漢口進出に依つて拓けた筈の私の視野に映じた感覺を、此の新らしい名の「フヂモトニュース」に盛り上げて行きたいと思つてもゐたが、事務的な仕事とは縁の遠い傳染病室勤務ではそれもどうやら困難らしく思はれたし、いま一つには此の傳染病室附を好機として、衛生兵らしいスリルに身を投じて見ようとの小つぽけな野心もあつて、遂に前述の第三十七號を最後として思ひ出の鐵筆を捨てたのである。

「しつかりやれ、最後まで續けよ」との故郷の知人からの聲援に對して相濟まぬとは思つたが「ニュース」もどうやら本質的な軌道に乘つて曲りなりにも一つの結末をつけたわけであるし、私も亦

これから傳染病室の兵隊として其の本線に乘り換へての御奉公であるからとの小人らしい自己辯護の青いシグナルを、心の一隅に掲げたのである。

それにつけても私は私の陣中に於ての一つの私的事業であつた「ニュース」發行について、絶えざる指導と聲援とを送つて頂いた銃後の人達に對しては勿論のこと、小原、佐々木の兩部隊長や松浦庶務主任及び部隊の將校各位と、そして謄寫刷りや製本の手傳ひを夜遲くまでしてくれた戰友諸君の情に對して、今もなほ深甚の感謝を捧げてゐるものである。

陣中風物　その一　（於頴家村）

隨筆「ヒゲ談義」「オハラニュース」第四號所載

物の本に依れば、ヒゲに「髭」「鬚」「髯」の三種が記されてある。そして「髭」は鼻下のヒゲであり、「鬚」はあごのヒゲであり「髯」は頬のヒゲであると説明づけられてある。

然し我々はたゞ單に漠然と「ヒゲ」と言つてゐる。しかもその「ヒゲ」といふ言葉は鼻下の「髭」

を直感的に連想させる。色、形態ともに優秀なる紳士のヒゲを連想させるのである。實にヒゲは鼻下に端然と在つてこそ初めてヒゲのヒゲたる價値を發揮するのである。

ヒゲの世界は實に躍々として鼻下に在る。誰やらが言つた、

「それヒゲは顔面の威嚴を保つ上に於て必要缺くべからざるものにして云々」

の名言も、恐らくは鼻下のヒゲに贈つた最大級の讃辭たるを失はないものであらう。蓋し鼻下のヒゲはヒゲ三種の中、第一級に推すべき性質のものである。

次にあごの「鬚」及び頰の「髯」であるが、鼻下のヒゲが部分的に毅然たる獨立性を持してゐるに反し、此の二者は相互に相關聯して生育し、一見判然たる區別に困難を感ずる場合が多い。而かも此の兩者は大ていの場合、鼻下のヒゲの敵である。何となれば、如何に端然たる鼻下のヒゲと雖も之等兩者の連繫的發生によつて著くその存在價値が減殺されるからである。

本說に異議ある者は宜しく我が小原部隊を見るがよい。到る所ヒゲ、ヒゲ、ヒゲの世界である。まさしくヒゲの見本市の觀があるが、併もその大部分は人體自然の本能に任せた非人工的、非美術的の類であるから、調整次第で本然の美を發揮すべき鼻下のヒゲに向つて他の兩者が慘酷な侵略を試みてゐるのが多いではないか。

甚だしきに到つては、顔にヒゲが生えてゐるのか、ヒゲの一部分が顔であるのか、その解釋に苦しむのさへある。これ等はヒゲと云ふよりもむしろ顔面に生えたる一面の「毛」と云ふべきであり物の本に示されたるヒゲ三種の例外に屬する代物である。

傳染病室の西梨子衞生兵の如きは其の代表的存在であらう。斯ういふ類を此の儘に放任して置くときは、やがて鐘馗樣が毛生藥で顔を洗つた樣になるであらう事は想像に難くない。私がこんな事を書くと或は、

「ヒゲを伸ばしたくとも伸びぬ男こそ憐れなれ」

との抗議を受けるかも知れない。之は私にとつて實に手痛い頂面の一針である。

さう言ふならそれでよろしい。大いにぼう〳〵と伸ばすがよろしい。

陣中風物　その二

（於顏家村）

隨筆「不淨考」「オハラニュース」第九號所載

「御」の字を冠して「ゴ不淨」といふ。これは上品な稱へ方である。普通一般には「便所」といふあちら語を引用して「WC」といふ場合もある。これは多くの場合「便所」をカムフラージして相手に比較的美しく印象づけようとする野心を內藏した、殆んど日本語化された便利な一種の符牒である。

人情風俗を異にする異國からの輸入語は、おしなべて醜なるものを體裁よく表現せんとする場合に重寶がられる特徵を持つてゐる。話は違ふが、和服の場合には脛をも見せぬ令孃でも、それが一旦洋裝になるとスカートが風に捲られるのを平氣でゐたり相手が外國人であつたために性的羞恥心が極度に割引されて、賣國奴の汚名を新聞紙上に謳はれた往年の女スパイの心理も、矢張「WC」なる言葉から受ける印象乃至は觀念の原理と一脈相通ずるものがあるではないか。

「カワヤ」といふ人もある。これは「御不淨」「便所」「WC」に比較して最も非大衆的で、どちらかと云へば士族向であり、時代劇めいてゐる。白足袋の御家老が燭臺でも持つて現はれるのでなければ「カワヤ」も板につかぬ。

さて私はいつでも「便所」と稱へることにしてゐる。第一には習慣、第二には言ひ易いこと、第三には誰にでも、何處へ行つてもよく判るといふ三ツの理由に因る。他日、私がどんなに出世をし

ても、此の稱へ方は變更しないつもりである。そも〳〵便所は、小、大、各々その用便を足すといふのが其の二大目的たる事、今更論を俟たぬ嚴肅な事實である。

而して、前者は其の回數に於て後者に數倍するが、一回の所用時間は極めて短いから、用便中に於ける感興も亦單純である。精々のところでその優勢なる壓力を利用して器物に羽を休めてゐる蠅を追つ拂つて見たり、左右上下の方向轉換によつて火事場に於けるホースの放列を連想して見る位ゐが關の山である。

そこへゆくと、後者は普通一日一回に過ぎないが、時間的に惠まれてゐるだけに湧然たる感興に於ては遠く前者の及ぶところではない。

「小」に對するに「大」を以てしたる、蓋し適切無比の冠詞ではある。

殊に野戰陣營のそれには野趣滿々として捨て難い感興がある。

就中、私が愛用惜しまないのは本部前のバラック式便所である。これは曾て正月元日の隊內移動演藝班に加はつて、傑出した「八木節」を觀せてくれた、當時の我が部隊配屬の建築班が置土產のサービスに建てゝ行つたといふ由緒あるしろものである。

廣々とした野原の一角に、遠慮勝ちに小ぢんまりと建つてゐる其の便所は、大建築物中に近代文

化を誇る水洗式のそれに比すべく餘りにも可憐である。

雨の降る夜や風の吹く朝には、それが痛々しくさへある。雨の夜、窓を通して見る彼の姿は寂しさに泣いてゐる樣である。

風の朝は吹き飛ばされまいとしてしつかりと地面に摑まつてゐる樣である。それは憎めない好ましい姿である。

さて、其のドアーは密閉に不完全の憾みはあるが、針金應用の內鍵によつて使用中の獨占感を素される惧は殆んどない。板一重を境にして大便所が二つに仕切られてある。私は成るべく向つて左の方へは入らぬ事にしてゐる。見晴らしが良くないからである。隣りが小便所になつてゐるので建物全體から云へば中央の室で見通しが利かず用便中の感興の殆んど凡てが減殺されるからである。

私の好きなのは右の端である。此處はいゝ。おもむろに用を足し乍ら横に長い板の隙間から視野一ぱいの光景を眺める。

野原の眞中あたりに白い放馬が一匹、枯草を喰つてゐる。その前脚と後脚の間から五百米程向うの灰色の兵舍が見える。

さん〳〵とふり注ぐ陽を薄汚の身一ぱいに浴びて其の馬は暢氣さうである。

私がこんな所から見てゐるとは氣が附かぬであらう。

兵隊が一人此の原を横切つて行く。その歩調に合せて「道は六百八十里……」を唄つて見る。うまく合ふ。腰のあたりから上の方が馬の蔭になつて見えなくなつたが、すぐ又全身が現はれる。

「晴らさにやならぬ日の本……の」

まで來たら、その兵隊は俄に走り出した。

こつちも負けずに唄を早めるが、其の速度が不規則で合はせるのにひと苦勞である。

他人の迷惑を考へぬ個人主義的な馳け足はよろしくない。

突然「おーい、早く出ろよ」とドアーの外から聲がする。他人の迷惑を考へぬ自己陶醉はよろしくない。想念を紊されたといふ損失は明日の參詣で補ひがつく。

（附記）　主眼たる野戰便所の表現に不徹底の憾みを殘したまゝ草稿未了にして南京へ移動のため此の便所とも惜しい別れを告げねばならぬ。我々が去つた後、何んな者が何んな風に是れを使ふであらうか。

或は叩こはされてしまふかもわからない。併し私はいつまでも私の心の廣場の一隅にそつくりその儘建てゝ置きたいと思ふ。

たとへそれが拙いとは云へ、私が今日までに文章を書いた時の構想が、大ていは此處での用便中の産物であつたといふ意味に於ても、いつまでも其の儘に建てゝ置きたいものである。

南京の春

顔家村から七里の南京へ、私達のトラックは風を突く樣にして走つた。昭和十三年二月十二日の晝近くであつた。殆んど直線の赭土のいゝ道が續いてゐた。兩側の所々に岩の突き出た小高い山があつて、雪が寒さむと殘つてゐた。

一時間程走ると向うの方に白い城壁が見え出した。

「南京だ、南京だ」

と皆なトラックの上から伸び上つて叫んだ。私達の憧れの南京である。田舍から街へ出て來たのである。トラックが緩やかな坂道を登りつめると、高さ二丈もあらうかと思はれる城壁が頭の上にあつた。お伽噺の王城の樣に何となく古めかしい疵だらけの城壁が大地から生え上つた樣に毅立してゐた。城門の左右に積み上げてある土嚢と土嚢の門をトラックが摺れ〳〵に入つて行つた。その

門の所に日本軍の歩哨が二人立つてゐて、私達のトラックを一臺々々見送つてゐたが、赤十字の印のついた醫扱を見ると、

「病院だな」

と呟いて、恰度私達のトラックを見上げて、

「何處の部隊だ!!」

と言つた。同乘の戰友の一人が梱包の間から首を出して、

「小原部隊だ」

と答へると、

「あゝ、小原病院か」

と言つて、相棒の歩哨と何か話してゐた。

私は「小原病院」といふ風に呼ばれたのが初めてであるから、何だか内地の個人の病院の樣な氣がした。

「小原病院」併しなる程、小原病院には相違ない。城門をくゞると立派な鋪裝の道路が遙か前方へ一直線に延びてゐて、その兩側には枝ばかりの楊柳が一定の間隔を置いてずつと向うの方まで並ん

でゐた。

トラックがその道路にかゝると、私達は一齊に後ろを振り返つて見た。城壁の內側には土囊がうず高く小山の樣に積み上げられて、日本の兵隊が澤山の苦力を使つて何か作業をしてゐた。

土囊の山の上で一人の兵隊が手を振つてゐる。私達も手を振つてそれに應へた。

今、入つて來た城門を中にして土囊を積んだ巨大な景色が後ろの方へ段々遠のいて行くのを眺め乍ら、私達は銘々に一つの激戰を追想してゐた。

私はあの城壁の頂點に鐵兜と砲彈の炸裂と日章旗とが、硝煙の中に明滅する「戰爭」の或る場面を追想して、いま私達斯うして何の苦もなく平穩な南京へ入つて來たのが何だか夢の樣な、そして何とも云ひ知れぬ大きな力の前に私達の樣な病院の兵隊は決して威張つてゐる事は出來ないといふ樣な氣がした。私達は占據された地點へ一發の銃聲も聞かずに斯うして入つて來たのである。これでも人は兵隊だといふ。これでいゝのだらうか。

私の前に梱包に捆まつて立つてゐる塚谷に私は「いま入つて來たのは何といふ門だらうか」と尋ねた。塚谷は外套の頭巾を被つた頭をこつちの方へ捻ぢ向ける樣にして、

「中山門だ」

と言つた。

トラックは中山門から一直線に七、八百米程突つ走つて、右手の鐵柵に圍まれた廣い庭園を前にした、素晴らしく大きな五階建の白い建物の前で停つた。先きに到着してゐる部隊の兵隊が、其の庭園に卸されてある梱包を中へ擔ぎ入れてゐた。こんな大きな立派な建物の中で今日から我々が仕事をするのだと思ふと、私は急に濶達な嬉しい氣持になつた。

皆んなは、

「いよう、いゝぞ、いゝぞ」

と言ひ乍らトラックから飛び降りて直ぐに梱包の擔ぎ込みを始めた。

表の高い鐵の門を入つて、庭園を眞すぐに行くと、正面にどつしりとした玄關がある。玄關の上の大理石の樣な白い石に、

「中國中央醫院」

と黑い大きな字が横に刻み込んであつた。

その玄關を挾む樣に左右から登り勾配の車寄があつた。

映畫に出て來る富豪の邸によく斯んなのがある。私は梱包を擔いで此の玄關を入り、磨き出され

た樣な石の廊下を軍靴でガツ〳〵と歩いて行く兵隊達の姿を見て、それが何となく調和のとれぬ景色の樣に思はれてならなかつた。

これは後で知つた事であるが、此の「中央醫院」といふのは、元中國政府の建立になる南京隨一の病院であつたとの事である。

私達が入る前迄、他の衞生部隊が此處で病院を開設してゐた。私達の部隊が夫れを引き繼いで事務を續行することになつたわけである。

此處でも私は相變らず經理室勤務であつた。經理室は玄關を入つてすぐ廊下を右へ曲つた所の一番初めの部屋であつた。

先發の福島主計伍長と横山の手に依つて室内の設備は殆んど出來上つてゐた。何處かのホテルの客室の樣な二重ドアーの立派な部屋であつた。

私達は經理室用の梱包をどし〳〵運び込んだ。福島伍長と横山が、

「何うだ、いゝ所だらう。もう蠟燭や水の心配は要らんぞ」

と言つて、これが電燈のスイツチ、これが水道だ、洗面所も便所も此の部屋に付いてゐると、今着いたばかりの辻主計や塚谷や私に室内の模樣を說明した。私と塚谷は、

「いゝナアいゝナア」

と言ひ乍ら壁の隅のスイツチを上げたり下げたりして、明るい電燈がついたり消えたりするのを見て喜んでゐた。

部屋はドアーによつて三ツに仕切られてゐて、眞中を事務室兼食堂、兩方を寢室といふ事に決めた。私はこの寢室の入口のドアーにそれぞれ「A室」「B室」といふ張紙をした。籤を引いた。私と塚谷とが「B」へ、福島伍長と横山とが「A室」へ寢る事になつた。辻主計は二階の將校室である。

寢室は二人づつ入るのに恰度格好の部屋であつた。寢臺が二つ置いてある。表に面した硝子窓には白い長いカーテンが附いてゐた。

部屋の隅には洗面器具が取り付けてあつた。水道の栓が二つ並んでゐる。一つの方は壞れてゐたが、もう一つの方は捻を廻すと綺麗な水がじやあ〳〵と出た。

私は塚谷と二人で窓際が足になる樣に寢臺を二つ並べ直して、内地の兵舍と同じ樣式で毛布を敷いた。私はとても愉快な氣持になつて、其の上へぽんと飛び上つて横になつた。寢臺のバネがグウグウといふ音を立てゝ私の身體がふわ〳〵となつた。

塚谷も一緒になつて隣りの寢臺へ飛び上つて、

「此奴ア氣持がいゝぞ」
と云つた。
顔家村でつるべで水を汲み上げては顔を洗つたり、土間へ雜魚寢をしたり、蠟燭の夜を過したりしたのとは大きな變り方である。
私は手を伸ばして枕もとの壁のスイッチをカチンと上へ上げた。天井から下つてゐる電燈に白々と灯が燈つた。塚谷が、
「おい、畫の裡から勿體ないぞ」
と笑ひ乍ら言つたから私は又、カチンとスイッチを下げた。そして早く夜になるといゝナアと思つた。A室で福島主計と横山とが、これも亦寢臺を置き變へたり、背嚢の置場所を工夫したりしてガタ〳〵とやつてゐた。
私は事務室の、私に振り當てられた机の上へ帳簿や、インク瓶を並べ立て乍ら、何とはなしに獨りで微笑んでゐた。
他の各部屋でもそれ〴〵自分の居室の設備をやつてゐると見えて兵隊が廊下を忙しさうに往き來してゐた。

私は階段を昇つて行つた。昇り口の直ぐ傍に故障を起して永く使はぬらしい大型のエレベーターが檻の樣な鐵柵の中におさまつてゐた。
二階は本部と隊長と將校の部屋であつた。
三階の各室が病室勤務の兵隊の部屋であつた。どの部屋でも壁に釘を打つて背嚢や銃を掛けたり寢臺の下へ私物を片付けたりしてごた〳〵とやつてゐた。
四階と五階とは空つぽであつた。
私は五階から更に屋上へ拔け出る狹い階段を登つた。屋上へ一歩踏み出すと急に廣々と眼界が展けて、肌寒い風がビュー〳〵と吹いてゐる。
私はコンクリートの手摺にもたれて下を見た。部屋々々の硝子窓が私の足もとから下の方へ一つ一つ小さくなつて、表玄關の車寄が兩手を擴げた樣に白くにゆつと伸び出てゐる。
庭では後から着いた兵隊が、炊事部の鍋や釜の大きな梱包をがら〳〵と「トラック」から卸してゐた。
鐵の表門に日の丸と赤十字の旗が揭げてあつて、其の下には最早誰かゞ銃を構へて歩哨に立つてゐた。

×　　×

振り返へると、つい眞近に紫金山が、一面の荒廢した畠に裾を引いて、どつしりとした威容を見せてゐた。ずつと向うの繁華らしい街の方には、高い建物が空を突く樣に立つてゐて兵隊や、支那人や、自動車が動いてゐた。斯うして眺める南京は最早、戰爭といふ一つの殺戮の世界から建設の階階に入つてゐるのであつた。私は「出征」といふ事を考へて今かうしてのんびりとしてゐるのが何となく物足りなく思はれたが、併しその一方で理由もなく「有難い」と思つた。夕方近くになつて「電燈を點けるのは良いが、各部屋では必ず燈火管制を嚴守すること」といふ會報が出た。

經理室では黑布が用意してあつたので、私達はそれを適當に切つて各室から取りに來た兵隊に分配した。

私等も自分の部屋や事務室の窓へ黑布でカーテンを作つた。

私達は薄暗くなるのを待つてゐた樣に電燈を點けた。電燈のある部屋、それは何となく暖い平和な氣持であつた。私は顏家村で蠟燭の不足に氣を揉んだ時の事を思ひ出すと、ほつとして嬉しかつた。其の夜遲くまで私は此の明るい電燈の下で幾日ぶりかで何本も手紙を書いた。何の手紙にも

此處には電燈も水道も、いゝ寢臺もあつて嬉しく思ひます。

といふ事を書いた。

横山、塚谷もせつせと書いてゐた。內容は大てい一緒らしかつた。

×　　×

一月十三日（日曜）

一日中しと〳〵と雨が降つてゐる。

何か斯う、戰塵が洗はれて南京が昔の詩の都に還つて行く樣である。事務室の窓から見える表の道路の楊柳の下を、傘をさした斷髮の姑娘が小さい子供の手を引いて歩いて行く。

私は壁に掛けてある黑板に、

「敵なれど戀して見たくなりにけり
　雨の中ゆく支那服の女」

と落書をして獨りで悅に入つてゐると、塚谷がそれを見て、

「敵なれどが不可ん」

と言つたので、私はさうかなアと言つて、
「何となく」
と訂正した。塚谷はしばしそれを見てゐたが、
「フフン、さつぱり歌になつとらんぞ」
と言つたので、私は襤褸布で消して了つた。
皆んなで事務室の床や前廊下を綺麗に拭いた。事務室の前にがら空きの大きな部屋があるので、それを經理室の倉庫に決めた。昨日假りに廊下の隅へ積み重ねて置いた梱包を解いて其の部屋の中へ整頓した。
午後、福島主計と横山とが衣糧廠から木炭をトラックに一ぱい受領して來た。流石に此處では物資の廻りが潤澤らしい。
木炭の倉庫は廊下を眞ッすぐに行つた横手の出口に近い一番端の空部屋にした。此處から横手の空地へ出て向うに見える別棟が傳染病室である。白い作業衣を着た部隊の兵隊がマスクをはめて出たり入つたりしてゐる。私は病室附もいゝけれど傳染病室は敵はんなアと思つた。
夜の點呼が濟んでから、昨日書き殘した手紙を書いて寢室へ入つたら、塚谷が何處で工面をして

來たのか赤い電球を取付けて、
「何うだ氣分が出ていゝだらう」
と喜んでゐた。

二月十九日（土曜）
今日から前の倉庫の隣りが部隊員の入浴場になつた。此處は前から浴場であつたので設備はちやんと出來てゐる。
隔日である。午後三時から五時迄が將校でそれから後が下士官と兵隊の時間となつた。私等は自分の部屋の中で褌一貫になつて、その儘、廊下を横切つて入浴場へ飛んで行つた。
外國人が使ふ樣な白い浴槽に皆んなは芋の子を洗ふ樣にして入つてゐた。
顏家村では入浴場の設備が全然無かつたので私達は四五人づつ一緒になつて湯水鎭の溫泉場まで出かけて行つた。
それも遠いし、何かと勤務に追はれて、彼處にゐる間に二三回程しか行けなかつた。
これからは一日置きにこんな手近い所で入浴が出來るのである。

風呂から上ると手紙が來てゐた。

その中に父が送つて呉れた新聞があつた。

白い紙の帶封に父らしい几帳面な字で私への宛名が書いてある。出征以來、弟からの便りは度々であつたが、父の筆の蹟を見るのはこれが初めてゞあつた。ペン先で書いたらしい其の字の一つ一つの線が少し震へてゐた。これは父の特徴である。

私は、私が尋常一年生の頃、學校で下足札を失くした時、父は新らしい札に「もう失ふんではないぞ」と言ひ乍ら矢張り几帳面な字で書いてくれた事を思ひ出した。それは今日の此の帶封の字と同じであつた。私は急に、私の門出の朝「祝出征」と書いた旗の蔭で、體を兩膝で支へる樣にして前屈みに立つて、じつと私を見送つてゐた年老つた父の姿が思ひ出されて目頭が熱くなつて來た。

私は其の帶封を叮嚀に剝ぎ取つて私の寢臺の傍の壁に貼りつけた。

二月廿五日(金曜)

傳染病室の兵隊が全身に消毒藥の臭をぷん〳〵させ乍らゴム長靴を五足受領に來た。

私は倉庫からゴム長靴を出し乍ら、

「どうだ、忙しいが」

と言つたら其の兵隊は、

「うん、腸チフスが〇〇人程ゐるんでどうもならん」

と言つて倉庫の隅にあつた藁繩で縛つて抱へる樣にして廊下を走つて行つた。

夜、寢床へ入つてから塚谷は、

「南京へ來て便利は良いが、豚の鹽燒が出來んので淋しいなア」

と言つた。

私は「うん」と言ひ乍ら毛布を被つて、顏家村の丘を想ひ出してゐた。

二月廿六日(土曜)

近頃めつきり暖くなつた。木炭の需要も少くなつて來たので樂である。

晝めし後から「オハラニュース」の第十號に取りかゝる。夜遲くなつて刷り上げを終る。A室もB室も寢たらしい。

病院全體はもう森閑としてゐて、時々表門の歩哨が歩くらしいカツ〳〵といふ靴の音と、裏病室

の患者が何か大聲で呼んでゐるのが聞えて來るだけである。

二月廿七日（日曜）

南京へ來てから最初の外出日である。

顏家村では別に外出日の定めは無かつたが、此處は街であるから少し內地式になつたらしい。午前中に「ニュース」の製本もすつかり終つて畫めしを喰べてから顏を剃る。塚谷と二人で外出する事になつてゐた。

私は肌着と、シャツを着換へた。塚谷も襟布を新らしいのと取換へたり手の爪を切つたりしてゐる。

塚谷と私とは並んで鏡の前で上衣を着た。

塚谷は鏡に寫つてゐる二人の一等兵の肩章を見て笑ひ乍ら、

「二人を合せると衞生伍長で班長殿だな」

と言つて服のボタンを掛けてゐる。

私も、

「それを又二つ合せると曹長殿だぞ」

と言つて笑つた。

私達、部隊の兵隊は皆んな去年の暮、顏家村で二等兵から進級してゐるのである。もつと詳しく書くと、私達は召集を受けてから顏家村での進級までは補助衞生二等兵であつた。

今では最早、一つ星が二つになつて、押しも押されもせぬ衞生一等兵である。」

何處か他の部隊を探せば、私達より一つ下の二等兵がゐる筈である。

私は塚谷と二人で營門を出た。

他の部屋の兵隊も二三人づつ連れ立つては出て行く。いゝお天氣である。

街路樹の楊柳がほんのりと靑ずんでゐる。やがてもう新芽が出るらしい。

私達は出の通りを右手へまつ直ぐにぶらり〳〵とずつと向うの賑やかな街の方へ歩いて行つた。

兵隊が澤山出てゐた。

所々の部隊の屯營の前には步哨が立つてゐた。小さい橋を越すと其處から前方は次第に街らしくなつて來た。

物知りの塚谷は、

「これが中山路の通りだ」
と言つた。
壊れた家に應急修理をした樣な色々な店が兩側に並んでゐる。飲食店が澤山ある。どの飲食店の前にも白い「エプロン」をした支那姑娘が立つてゐる。彼女等は決つた樣に片方の手を腰に當て、片方の手を顎へ當てゝ爪を嚙む樣な格好をして立つてゐた。私達のまだ知らない日本の流行唄のレコードが聞えてゐた。
兵隊がぞろ〳〵歩いてゐた。
洋車を走らせてゐる兵隊もある。
所々に屋根を撃ち拔かれた煉瓦の崩れ落ちた家がある。
大きな建物の玄關には○○部隊本部とか、軍特務機關とかの看板が出てゐて自動車が何臺も並んでゐた。まつ直ぐに行くと大きな四辻へ出た。四辻の眞中にコンクリートで固めた小公園の樣な高臺があつて青い葉の低い樹木が其の周圍を取り圍む樣に立ち並んでゐた。
軍のトラックや洋車がそれを避ける樣にして走つてゐた。
向う側の廣い道路に幾筋も支那人の露店がずらりと並んでゐる。

私達は其處へ行つて見た。陽除けも何もない本當の露店である。毛の附いたまゝの豚の足、家鴨の丸燒、怪し氣な寶石類、赤や青の支那人の着物、ぼか〳〵と湯氣の上る粥の樣な喰べ物、古釘、古椅子、古テーブル、あゝそれは正しく支那人の生活必需品を網羅した露店の大部隊であつた。恰度私達が夜店でも素見す時の樣に、何百人何千人とも判らない支那人の群が此の露店の列と列との間を往つたり來たりしてゐた。其の中を、掻き分ける樣にして見物してゐる日本兵のカーキ色の服がちら〳〵と見えてゐた。私達も其の人込みの中へ入つて見て廻つた。向うから治療部の吉川伍長と、長原一等兵とがやつて來るのに出會つた。長原は私の顏を見るなり、
「おい此處は泥市だぞ」
と言ふので私は、
「何うしてだ」
と聞くと彼は、
「此處で賣つてゐる物は皆んな戰爭の後で奴らが泥棒して來た物だといふ話だ」
と言ふ。私は、
「ふゝん、それで泥市か」

と言つてあツはツ〳〵と笑つた。皆んなも一緒に大聲で笑つた。周圍の支那人は理由の判らぬ顔をして私達の方を見てゐた。

しばらく歩いてゐる裡に長原等は人込の中へ見えなくなつた。私と塚谷とは元來た方へ戻つて行つた。鷄の足を油で揚げた樣な物を賣つてゐる屋臺店の中年の支那女が汚い着物の間から乳房を出して三つ位ゐの子供に乳を飲ませてゐた。塚谷は「可愛いゝな」と言ひ乍ら、肩にかけてゐた「カメラ」のレンズを其の方へ向けると、彼女は恥しさうに子供を横へ置いて胸の紐を結んで了つた。四辻を少し戻つて來ると横小路から出て來た五六人の支那小孩(子供)の一團が、私と塚谷の後から

「先生煙草進上」

と言ひ乍ら追ひ馳けて來た。

× ×

小孩達は私等二人に追ひ縋る樣にして、

「煙草進上」を口々に唱へて手を出す。

私は上衣の物入から「ほまれ」の袋を出して後の方へ二三本投げてやつた。彼等は押し合ひ爭ひ

乍らそれを拾ひ取ると、又追ひ付いて來て「煙草進上」と言ふ。

私は又、二三本投げてやつた。こんな事を三四回も繰返してゐる裡に私のたばこは全部無くなつてしまつた。塚谷は煙草は吸はぬから持つてゐない。私は「もう無いぞ」と兩手を振つて見せたが彼等は中々押しが强い。二町でも三町でもついて來た。

私も塚谷も五月蠅くなつて後ろを振返へつて、

「こらッ」

と呶鳴つた。小孩達は「ウワーッ」と言つて少し逃げて行つたが、私達が歩き出すと又追ひ馳けて來て「煙草進上」を繰返した。

其の中に此の小孩の一團は次第に人數を增して來て何時の間にか十五六人になつてゐた。これは私達にとつて驚くべき現象であつた。彼等は私達の前後左右を取り卷いてゐた。而も其の悉くは頭や顏に變な腫物の出來てゐる恐ろしく汚ない子供達であつた。私と塚谷とは其の汚い一團を兩手で押し退けて一方の退路を見出すと、

「此奴アとても敵はん」と言つて逃げ出した。

三月四日(金曜)

上海へ公用の連絡に行つてゐた辻主計と塚谷。昨夜遅く歸隊。

朝めしが濟むと塚谷は上海で買つて來たといふ上原敏の「上海便り」のレコードをかけた。

私は無條件にいゝと思つた、そして早く此の唄を覺えたいと思つた。

蓄音器の音を聞きつけて、あちらこちらの部屋から部隊員が「いゝぞ、いゝぞ」と言ひ乍らやつて來た。私達の事務室はレコード大會の樣な光景になつた。蓄音器は前から部隊に一臺あつたが、レコードの新らしいのが無かつたので皆んなは子供の樣に喜んで其の「上海便り」を何べんもかけ廻した。

辻主計は「ぼち〳〵買ひ集めて患者慰問に使ふ心算だ」と言はれた。

夜。もう寢ようとしてゐる十時半頃、玄關の方がガタ〳〵と八釜しくなつて來たので出て見ると擔架に乘せられた兵隊が銃を擔いだ五六人の戰友に護られて入院して來た。毛布から半分程出てゐる其の顏は蒼白く「ウン〳〵」と唸つてゐた。

患者は直ぐに治療室へ運び込まれた。

左足の膝關節から少し下の所が柘榴の實の樣にぐちや〳〵に打ち碎かれて、白い骨が露はに見え

てゐた。軍醫と治療部の兵隊とが色々な器械をガチヤ〳〵云はせ乍ら手當を始めた。

護送の戰友が暴れようとする患者の手足をしつかり押し付けて、

「もう少しだ、辛抱しろ、辛抱しろ」

と元氣づけてゐる。

患者は唸り聲の吐切れ〳〵に、

「畜生!! やりやがつたナア」

と舌が硬ばつた樣な聲で呼はり續けてゐる。

護送して來た兵隊の話では、南京城外、南方二里の村落地點を巡察中に、闇の中から五六發の銃聲が聞えた瞬間、此の一人が倒れたといふ事であつた。

「我々はすぐにその附近を探し廻つたが奴等逃げてしまつたらしい。

明日は小隊長殿にさう言つて敵討に出かけますよ」

と言つてゐた。

處置が終つて、衛生兵の一人が大腿部の止血帶を靜かに外すと、今卷いたばかりの新らしい繃帶に見る〳〵裡に眞赤な血が滲んで來た。軍醫は無言で其の衛生兵に、もう一度止血帶を卷く樣に目

で合圖をして、患者の脈搏を診てゐたが、

「おい、强心劑を打て」

と後背に立つてゐた衛生兵を振り返つて靜かに命令した。

私は寢床へ入つてから獨りで考へてゐた。

患者が何人入つて來やうとも私は何にもしないでゐる。同じ衛生一等兵でありながら經理室の兵隊といふ違つた職場に在るからである。

然し、然し私は是れでいゝのだらうか。

三月廿三日（水曜）

南京はすつかり春になつてゐる。

私達が此處へ來た時、まだ枝ばかりであつた街路樹の楊柳が青々と新芽を吹いてゐる。冬の羅紗服では少し暖過ぎるといふ日が續いてゐる。今日は〇〇、〇〇主催、皇軍慰問團の一行がやつて來た。コロンビアの川畑文子、渡邊はま子、伊藤久男、末廣友若といふ歌謠曲と浪曲の連中に、松竹キネマの上山草人と小倉繁を加へた賑かな一團である。

斯ういふ藝術家の慰問は我々にとつて上陸以來最初の事であつた。私達は昨日の會報で此の事を聞いてから時の來るのを待つてゐた。

横山が朝起きるなり顏を剃つてゐるので、

「えらい、今日は吟味するんだナア」

と言ふと、彼は顏に石鹼を一ぱいつけて、

「フフン、今日は彼女が來るからナア」

と言つたので、私もそれもさうだと思つて顏を剃つた。

到着豫定時間の午後二時頃になると、部隊員は玄關前に出ばつて待つてゐた。獨歩の患者も病衣の儘で出て來た。

ぽか〳〵といゝお天氣である。

友軍の飛行機が何臺も爆音を轟かせながら、私達の頭の上を通つて部隊の建物の天邊をすれ〳〵に大きな鳥の樣な影を落しては飛んでゐた。

やがて表門の歩哨が私達の方を向いて、

「おーい來たぞ〳〵」

と言つた。乘用の自動車が二臺、門前で停つた。
二人の護衛の兵隊に續いて西洋人の樣な洋裝の女や、赤い腕章を附けたカーキ色の服の男達が輝かしく降りて來た。
私達は一齊に、
「うわーッ」
と言つた。歩哨の前で一人づつお辭儀をして入つて來た。歩哨は面映ゆい樣な顏で答禮をしてゐた。一行が玄關口へ差しかゝると、カメラを持つてゐる兵隊が一齊に「一寸待つた〳〵」と言つてシヤツターを切つた。
外の兵隊は一緒に寫眞に入る樣にして女達の左右を取り圍んだ。
後ろの方から足許へ割り込んで首丈出してゐるのもゐた。私も一人の女を取り圍む兵隊のひとかたまりへ無理に割り込んで、幾つかのカメラへ顏を向けた。
誰かゞ後の方で、
「おい齋藤、それは浪花節の三味線のをばさんだぞ」
と言つた。

三味線ひきでも幕引でも構はんではないか。こんな所で日本人の女と一緒に寫眞に撮られる事は光榮である。
本館の直ぐ裏手の廣間で、此の尉問團の演藝が始まつた。場内を一ぱいに埋めた白い病衣の患者の中へ私達は混じつて觀てゐた。
松竹キネマの二人は寸劇をやつた。

× ×

午前中、此の一行が來る四時間ばかり前に、庶務主任の松浦中尉が私に、今日來る渡邊はま子に唄つて貰ふために部隊員の歌を一つ考へて置いてくれと言はれたので、私は頭を絞つて次の樣な歌詞を作つて見た。

オハラ部隊の南京便り

(1)
故郷を出るとき　時雨てた
秋も終りの　黄昏に
君に誓つた　あの言葉

忘れはせぬぞ　　此の通り
眞の男を　　見て欲しい
俺の襟章は　　深緑
伊達ぢやないんだ　　赤十字
繃帶卷く手に　　歩哨線
正義の戈の　　銃とれば
城壁高く　　北斗星

(3)

どうせ生命を　　投げ出して
戰の庭に　　來たからにや
皇國の柱に　　なる覺悟
未練ぢやないが　　誰一つ
あとはしつかり　　頼んだぞ

畫めしが濟んでから、これを松浦中尉の手許へ出しておいた。一行が到着して控間で引率者らしい人に松浦中尉は私と此の歌詞とを紹介したが、私はそれ以上積極的に出る勇氣も無かつたし第一

歌詞そのものに全く自信が無かつた。殊にそれが二番の歌詞に到つては私の陣中の實生活とは凡そ懸け離れた嘘であつたからである。

私は出征以來まだ一本の繃帶をも手にしてゐなかつたし、正義の戈も執つてはゐなかつた。

勿論はま子嬢は唄つてくれなかつた。

併し私が若し病院開設以來、ずつと病室附であつたならば、私は私自身の實感を、もつと衛生兵らしい感激と興奮とをもつて歌にすることが出來たであらうし、そして今日の渡邊はま子の紅唇をついて妙なるメロデーが流れ出たであらうものを。

「忘れちやいやよ」と書いてくれなくとも、當分私には忘れられない心殘りの一事である。

四月四日（月曜）

近頃しきりに「凱旋」の噂がある。

はつきりした事は判らないが、どうもさうらしいといふのである。今日も體溫表の用紙を取りに來た病室付の兵隊が、

「今月中には此處を引き揚げて歸還するさうだ」

と言つてゐた。こんな噂を聞くと今まで忘れかけてゐた故郷の色々な事か急にあれやこれやと思ひ出されて來て、此の噂が何うか本當であつてくれゝばいゝと思ふ。出征以來僅かに四ケ月ではあるが、目まぐるしい身邊の種々相に、半歳も一年も經つた樣に思はれる。

「凱旋」「歸還」といふことは私達の胸の一番奥底に内藏してゐる希望である。

若しも噂が本當だとすれば、たとへ私達の留守宅にどんな悲劇が待ち構へてゐやうとも、私達は此の儘生きて歸れるといふ湧き立つ樣な嬉しさの前にそんな事は到底考へても見ないであらう。

四月九日（土曜）

隊長から依頼されてゐた隊長の陣中著「支那の常識」の製版を終る。

南京はもう絢爛の春である。

屋上に登つて見ると其の名の通り「紫金山」が夢を見てゐるかの樣に紫色の裾を引いてゐる。荒れてゐた田畑もいつの間にか萠え出る樣な綠の丘となつて、桃の花が綺麗な模樣の樣に木々の間に點綴してゐる。砲聲が轟いたのは一體いつの事であらうか。そしてまた再び此の街に砲聲が轟き渡るのはいつの事であらうか。彼の山、彼の綠の丘が、再び慘烈な戰場と化するのはいつの事であらうか、歴史は繰返へされるといふ。これは私達の子孫に殘して置く宿題である。

夜七時から國民大會堂で皇軍慰問の會があるといふので、私達はトラックに分乘して出かけた。

廣い會場一ぱいに兵隊が埋まつてゐた。

上原敏の歌謡曲等で場内は湧き立つてゐた。

拍手に次ぐ拍手の場内の興奮を延長して歸りの道すがら、燈火管制で眞暗な夜更の町の中を、私達はトラックの上で「愛國行進曲」を合唱してゐた。○○が近いといふ噂が、かうして歌を唄つてゐる中に段々本當になつて來さうに思はれて何となく嬉しい夜であつた。

うるんだ樣な月が出てゐた。

部隊の前へ車が停つても、私達は銘々に歌を唄ひ乍ら玄關を入つて行つた。すると留守番に殘つてゐた五六人の兵隊が廊下に立つてゐて「おい前進だぞ」と言つた。私達はぱたりと唄を止めて、

「え、本當か、何處へ？」と訊いた。

「本當だ、行き先はまだ判らんが、とに角前進だ」

私は半信半疑で經理室へ走つて行くと福島主計が、

「君ら暢氣に歌なんか唄つて歸つて來たが凱旋どころか前進だぞ」

と言ひ乍ら早くも私物品の整理を始めてゐた。塚谷と横山とは、

「凱旋にしてはまだ少し早いからナア」

と言つてゐた。十一時頃になつて命令が傳達されたが、近く「蚌埠」へ前進、日時はまだはつきりしないが直ちに待機の姿勢の準備をして置けといふのであつた。凱旋ではない。更に新しい戰線への前進である。蚌埠は津浦沿線の要衝の地、徐州戰線の基地である。南京陥落から徐州の攻撃へと軍の作戰は次の階梯に差しかゝつてゐたのである。凱旋はまだ早い。かりそめのデマを本當である樣にと念じてゐたのが悪い。私の軍服も軍帽もまだそんなに汚れてはゐない。私の顏も手もまだ綺麗である。

私達は私達の服がもつと汚れ破れて、顏にも手にも戰場の色がしみ込んでから、若し生命があつたら改めて凱旋の事を考へて喜ぶ事にしよう。私達はまだ戰場の幼稚園である。私達はもつと逞しい兵隊にならなければいけない。もう凱旋などは考へぬ。行けばいゝ。何處へでも前進すればいゝ。

「蚌埠」行

四月十七日午前十時、部隊は下關の波止場から何艘かの小舟に分乘して、揚子江を横切り、對岸の浦口へ渡つた。浦口から蚌埠行の汽車に乘るのであるが、大部隊が續々と其の方面へ出動して行くので、列車の割當が出來るまで此處に野戰〇〇病院を開設してゐる〇〇部隊の宿舍で待機することになつた。宿舍と云つても廢屋である。私達は〇〇部隊から貸して貰つた赤い毛布にくるまつて寢た。南京蟲がゐる。

電燈は無かつた。薄暗い蠟燭の下で私は南京を出る一日前に受取つた妻からの手紙をもう一度讀んだ。子供の事が書いてあつた。私の家の前で妻が子供を兩手で高々とさし上げてゐる寫眞が添へてあつた。併し今は何も考へないでゐよう。私の部隊はいま前進の途中である。たとへ私の胸の中に何んな感情が流れて來やうとも、私はそれを逆に押し流して、勇ましい前進部隊の一人であらねばならぬ。

四月十九日午前七時半、私達の部隊は浦口の驛から列車に乘り込んだ。全部無蓋車であつた。どの貨車にも部隊の梱包が山の樣に積み上げられてゐた。

兵隊は其の梱包の上へ腰を卸してゐた。私は先きに上つてゐる者に手を引つ張つて貰つてやつとの事で梱包の上へ登つた。私達は皆んな緊張してゐた。それは今度の前進先きは今迄の樣な手ぬる

い平穏な所ではないといふ事を銘々の想像で感じてゐたからであつた。此の汽車も何處で路線が破壊されてゐるかも分らないし、何時襲撃を喰ふかも判らないといふ事を皆んなは豫想してゐた。

午前九時頃、汽車が徐々に、本當に徐々に動き出した。機關車が細長い煙突から息苦しさうに煙を吐いて、我々を一生懸命で引張つてゐる樣であつたが、速力は兵隊の馳足位ゐしか出なかつた。沿線の片側にはアカシヤの並木が白い花を一ぱいに咲かせて、青い葉と一しよに搖いでゐた。

或る所では私達の頭に擦れ〳〵であつた。

私は雜囊の中から雜記帳を出して、家へ前進する旨の手紙を認めた、我れ乍ら女々しいとは思つたが「皆んな達者でゐてほしい。子供の事は呉れ〳〵も賴む」と書いた。

私の手記『蚌埠行』

（十三年四月廿四日發行
オハラニュース第十六號所載）

四月二十日

部隊は二度目の乘換をするために、臨淮關の驛で次の汽車を待つてゐた。

もう七時過ぎで、あたりには夕闇が迫つてゐた。私達は驛の前の空地に背囊を降して休んでゐ

た。

貨物列車から、駄馬が澤山降されてゐた。特務兵の一人が馬の手綱を執つて、もう一人が尻尾を摑んで、汽車からホームへ渡した足場に氣を配り乍ら一頭づつ降してゐた。

中の一頭が、何うしたわけか脚を踏み外して、ホームへ降された時には前脚が一本利かなくなつてゐた。

特務兵が五六人寄つて來て、其のふらりと力の抜けた樣な脚を撫でさすつてゐた。馬はおとなしくしてゐた。

獸醫が來て脚を調べてゐたが特務兵達に何か言つて、其の馬の手綱を執つて私達がゐる廣場へ連れて來た。馬は跛をひき乍ら首で調子をとる樣にして曳かれて來た。

其處に爆彈の跡らしい大きな穴があつた。

やがて獸醫は腰の拳銃を出して、馬の鼻面ま近に銃口を近寄せて、眼と眼の中間を狙つて引金をひいた。

宵闇の中に銃聲が響いて、馬が變な聲を立てたかと思ふと、鼻と口から幾筋かの血の絲をひいて前かゞみに穴の中へばたりと倒れた。

獣醫は拳銃をおさめ乍らじつとそれを見てゐた。私達も馳け寄つて行つて見た。穴の中で、馬の腹がまだ少し動いてゐた。

私達の向う側で一緒に見てゐた特務兵が、馬の死體に挙手の敬禮をした。私達も、はつと氣附いて同じ樣に敬禮をした。

やがて汽車が着いた。あたりはもうすつかり暗くなつてゐた。

闇を透して見ると何の貨車にも兵隊が溢れる樣に乘つてゐた。私達は架橋材料が滿載してある無蓋車へどうやら割り込む事が出來た。背嚢が重いが降す場所もない。私達は適當な足場を見付けて後の大きな材木に靠る樣にして立つてゐた。機關車はまだ給水をしてゐる。晝の薄曇りが晴れたのか北西の夜空に星が出て、ホームのアカシヤの並木の花がほの白く靜かに搖れてゐた。

ガツタン……と大きな反動と一しよに汽車が動き出した。晝の中は夏服が欲しい位ゐの暖かさであつたが、汽車が動き出すと何となく肌寒い夜氣がひんやりと迫つて來る。

ゴツトーン、ゴツトーンといふ規則的な音を立てゝ、汽車は鼠色の小高い丘陵の間を緩かな速度で走つてゐる。兵隊は皆んな眠つてゐるのであらうか默つてゐる。いつの間にやら服がしつとりと夜露に濡れてゐる。私は何となく寂しくなつて來た。拂ひ除けようとしても故郷が思ひ出されてな

らない。馬鹿！ 今更何を考へるのだ。しつかりしろ。今にでもあの丘の蔭からビューンと一發飛んで來て、私の頭にでも命中すればそれで何もかも終りではないか。

線路の杭木が拔かれてゐて、大音響と共に此の汽車がひつくりかへれば、それまでの事ではないか。星が一つ、白銀の斜線を引いて流れた。

私達と背中合せに〇〇兵の一隊が乘つてゐる。中の一人の足許に白く動くものがゐる。すかして見ると一羽の家鴨である。其の傍に犬が一匹ゐる。犬はおとなしく寢てゐるが、家鴨は時々思ひ出した樣にガアー〳〵と鳴く。さつきから變な聲がすると思つてゐたのは此奴である。よく見ると首を繩で縛つてある。その繩尻は傍の機關銃の銃身に結んであつた。

犬も家鴨も何處から連れて來られたのか、そして今又、何處へ連れられて行くことであらうか。

ゴツトーンゴツトーンと相變らず規則的な緩やかな音を立てゝ、汽車は同じ樣な夜景の中を走つてゐた。星がまた一つ長い尾を引いて落ちた。隊長は汽車の進行する方を向て材木と材木の間へ割り込んで坐つてゐる。將校マントを着た太い躰が、ガツターン、ガツターンといふ音と一緒に左右に動いてゐる。隊長はいま如何な事を考へてゐるのであらうか。私のすぐ傍の兵隊が突然聲を張りあげて唄ひ出した。

「別れて今更、未練はないが……」

追分節である。錆のあるいゝ喉である。

唄が一節終つたが誰も何とも言はずに默つてゐた。鼠色の丘と並木の夜景がぐる〳〵廻つて、汽車は一路新戰線へ向つて行く。

沈默の兵隊と機關銃と、小銃とそして犬と家鴨とを乘せて前線へ向つて行く。たばこを吸ひ付けたついでに燐寸の明りで腕時計を見たら、九時半を少し廻つてゐた。

もうしばらくで蚌埠ではないだらうか。

星がいつの間にか空一ぱいにひろがつてゐる。私は上衣の物入れから乾麵包を出して、そつと嚙んだ。

蚌埠の病院

四月も下旬の蚌埠は最早夏であつた。

ほこりつぽい狹い道路の兩側に、ごみ〳〵した民家が立ち並んでゐた。眼が眩みさうな太陽の直

射の下で、埃を捲き上げ乍ら友軍のトラックと、砲車と馬と兵隊とが續々と往き來してゐたし、何處からやつて來たのか支那人難民が汚い風呂敷包等を抱へて家の軒下を怖々と歩いてゐた。あちらにもこちらにも砲擊を受けたらしい煉瓦の落ちた家があつた。少しでも家らしい格好をしてゐる家には友軍の兵隊や馬が屯營してゐた。此の兵隊達は皆んな眞黑い顏をしてゐたし髯も伸びてゐた。

私達の部隊は其處らの家に分宿して十日程待機してゐたが、町の東に寄つた一角で病院を開設することになつた。煉瓦の塀に取り圍まれた中に、幾棟も煉瓦造りの平屋が立つてゐて、皆んな病室になつた。

塀の外にも民家が幾棟もあつた。これは皆んな傳染病室になつた。

塀の內側に五十坪ばかりの空地があつた。

空地を前にした表向きの家が私達の經理室になつた。私達はシヤツ一枚になつて、待機してゐた家からトラックで梱包を運んだ。

私達は早く夏服が欲しいと思つた。他の部隊の兵隊は大てい夏服を着てゐたが我々はまだ支給されなかつた。脇の下に風通しのある服が、とても涼しさうで私達は羨やましかつた。

此の町にも電燈があつたから、蠟燭の心配をしなくてもいゝのが私達經理室の兵隊にとつては幸

福であつた。

蚌埠へ來てから經理室の兵隊が一人增えた。病室付であつた梶谷一等兵が、酒保係りとして勤務替になつて來たからである。

此の家はとても南京のとは比較にならなかつた。風通しが惡く陰氣であつた。それでも私達は、どうにか六人分の寢臺になるものを集めて來て、形ばかりの寢室を設け經理室で取扱ふ部隊用品を其の空いた場所へ梱包の箱の蓋を開けて並べた。

建て付けの惡い粗末な硝子戸を境にして事務室を設け、何うにか是れで落ちつく事になつた。

何處か知ら直ぐ近くの邊りで、ドカーン〳〵と地響を立て〵大砲の音がしてゐた。前の空地へ出て見ると海の底の樣な青い空を、物を引き攫つて行く樣な音を立て〵砲彈が遙か前方へ飛んで行つた。友軍の陣地から射つてゐるのであつた。二三日、こんな事が續いて、それから後は毎日、遠い所で雷でも鳴つてゐる樣な音がしてゐた。

表の塀の際へ赤十字の旗が揭げられ、病院が開設された其の日から、夥しい傷病兵がトラックや擔架で運び込まれて來た。

病室附の兵隊が總動員でトラックから擔架のまゝ降しては、前の空地へずらりと並べた。

負傷兵は皆んな自分の隊でして貰つたらしい假繃帶をしてゐた。

軍醫が皆んな出て來て、擔架を跨ぐ樣にして創を見て廻つてゐた。そして夫々の病室へ運ばれて行つたが、其の後から後へとトラックが到着して、患者が擔ぎ込まれて來た。私は、南京から此處へ前進のために遲れ勝ちであつた帳簿の整理をやらうと思つてゐたが、庭先の此の有樣を見ると落ちついて仕事は出來なかつた。

私は慌てゝインク瓶の蓋をして上衣を脫いだまゝ庭先へ出た。

炊事部の森永一等兵が空地の隅の湯煮場で水飴の罐詰を切つて、大きなバケツに飴湯を作つてゐた。私は森永と一緒に飴湯のバケツを提げて擔架の傍へ行つて、負傷兵の口飲みから少しづつ入れてやつた。

負傷兵は皆んな上衣の胸を擴げて、苦しさうな呼吸をしてゐた。上衣のボタンに赤い筋の入つた紙片が付いてゐて、創の場所が鉛筆の走り書で書かれてあつた。擔架の上に仰向になつてゐる者、横になつてゐる者、俯伏してゐる者など色々であつた。

何の擔架にも負傷兵にも蠅が一ぱいたかつてゐた。附添の戰友が手で追ツ拂つても直ぐに又たかつて來た。じり〳〵と陽が照りつけてゐた。

「飴湯だ。飲まんか」
と言つて吸口を向けると、
「あゝ有難う」
と言つてゴクンと一口飲んでは、
「美味なア」
と言つた。皆んな飲んで了つて、もう一杯呉れといふのもあつた。一口飲んで默つて顏を横に向けて了ふのもあつた。
煉瓦塀の入口に近い所に、二三人の戰友に護られて胸に繃帶をした兵隊が仰向に寢てゐた。假繃帶が眞赤になつてゐた。陽焦した顏がどす黑く、息をする度に咽喉がゴロ〳〵と音を立てゝゐた。
私は傍へ屈んで、
「飴湯だ。飲まんか」
と言ふと、閉ぢてゐた眼を開けて、
「おゝ……」
と言つて、いきなり兩手で吸飲みを私の手から引たくる樣にして、ごくりと一口飲んだが、いき

なりぱつと血を吐いた。
私は、
「飴湯より水の方がいゝだらう。水を上げよう」
と言つて吸飲を取らうとすると、
「これがいゝ……」
と、吸飲をしつかり掴んだまゝ苦しさうに顏をしかめ乍らさう言つて、又一口飲んだが矢張り血と一緒に吐き出してしまつた。附添の戰友は、
「胸を擊拔かれてゐるので喉から血が出て來るらしいです。水を飲ませても通らんです」
と言つた。
またトラックが到着した。私は塀の外へ出て病室の兵隊等と一緒に負傷者を擔架のまゝ降して、そして直ぐに飴湯を飲ませた。
頭に繃帶をして弱々しい聲で「うーんうーん」と唸つてゐる兵隊がゐた。私は附添の兵隊と二人で靜かにトラックから降した。胸の紙片には、
「頭部盲管銃創」

と書いてあつた。脈搏は弱かつた。眼はかすかに開いた儘で僅かに呼吸を續けてゐた。

私はこれは危いと思つて、その儘すぐに治療室へ運んだ。治療室も入口の所から足の踏み場も無い位ゐに擔架が並べてあつた。

私は誰に言ふともなく、

「おーい、これを早く頼むぞ！」

と言ふと、中から軍醫が並べてある擔架を跳び越える樣にして出て來て、直ぐに脈を見たが、叱る樣な口調で、

「これはもう駄目ぢやないか」

と言つた。私はそつと手を觸れて見た。

トラツクから降した時、まだ感ぜられてゐた脈搏が全くなくなつて、瞳孔は虛に開いてゐた。

私は其の兵隊の腰の手拭を取つて、顏の上へそつと被せた。

× ×

蚌埠は雨が降ると道が泥々の汚い町になつた。軍のトラツクや砲車が兩側の家の軒下へ泥を跳ね

上げ乍ら走つてゐた。

雨があがると、喉の奥までがら〳〵に乾く樣な埃が舞上つて、蠅が恐ろしい勢ひで增えて來た。

町を歩いてゐると、道の眞中や軒下の所々に蠅が眞黑い集團をなしてゐた。軍靴で踏みつけるとうわーんと舞ひ上つて來て氣味惡く顏にぶつゝかつた。二三歩行つて振り返つて見ると、又もとの處が蠅で眞黑になつてゐた。蚌埠は泥と埃と蠅と、そして何だか正體の知れぬ變な臭ひのする町であつた。

町には日毎に兵隊と馬とが增えて來た。友軍は續々と此の地へ集結をしてゐるのであつた。

私達の耳には徐州攻擊開始の噂が傳はつてゐた。そしてまた私達の部隊は其の方面へ前進するのだといふ眞面目な噂が擴まつてゐた。部隊の幹部も多分さうだらうと言つてゐた。

新しい夏服が支給された。脇の下に風通しの穴のある、私達が待望の夏服であつた。

私達は炊事部の流し場に据ゑてある甕風呂に入つてから、淸々しい氣持で其の新らしい服を着て喜んだ。

患者が毎日々々運ばれて來た。重症者は大ていトラツクで運ばれて來たが、中にはどうにか一人で歩いて來たのもあつた。

そんな兵隊は皆んな重たさうに背嚢を擔いで、泥だらけの銃を持つて煉瓦塀の傍まで來ると其處へ體を投げ出す樣にして腰を卸して、塀に寄りかゝつてうと〳〵と眠つてゐた。

發着部の兵隊がそれを抱へる樣にして連れて來た。附近の空家が次から次へと病室に當てがはれて行つた。

患者用の食パンが到着した。

メリケン粉の袋に入つてゐるのを經理室の前へ積み重ねて置くと、忽ちの裡に袋の上へ蠅が黑山の樣に群り寄つて來た。此のパンは運び込まれて來た患者に直ぐに分ける事になつた。

炊事部の給與係りの米長伍長（現軍曹）が來て、

「只今から食パンを分ける。擔送で動けぬ患者の分は附添の者が取りに來ること、獨歩患者は此の前の處へ一列に並ぶこと」

と前の空地へ向つて大聲で言ふと、あちらこちらに休んでゐた患者は、

「有難い、濟まん〳〵」

と言ひ乍ら、子供の樣に嬉しさうにして集まつて來た。皆んなは言はれた通りに一列縱隊に並んだ。擔架に寢てゐる者は向うの方から顏をこつちへ向けて見てゐた。

私達經理室の兵隊は皆んな出て、メリケン粉の袋の口を切つては先頭の者から一個づつ手渡して行つた。皆んな「有難う御座います」と頂く樣にして順々に受取つて行つた。私は何となく涙ぐましくなつた。私の方から「有難う御座います」と言ひたい樣な氣持がした。

袋の口を開く方が忙しさうなので、私は其の方へ廻つて口の絲をほどいてゐたが、分配の方が早くてとても追付かなかつた。分配してゐる兵隊が「早く〳〵」と催促した。袋の口は相當嚴重に縫ひ附けてあるので中々早くは解けなかつた。私は事務室から「ナイフ」を取つて來て絲を切り取つた。

其の中に一列縱隊が段々亂れて來た。そして私達の周圍は患者で一ぱいになつてしまつた。

誰かゞ大聲で、

「並んでくれ！　一列に並んでくれ」

と言つてゐた。併し私は、空つぽになつた水筒と飯盒を持つて最前線から下つて來た患者にとつてそれは慘酷な號令であると思つた。

私は、列なんか何うでもいゝから、腹の減つてゐる兵隊に、少しでも早く「パン」が行き渡ればいゝと思つた。私は袋の上の蠅を追つ拂つては、目の前へ出てゐる手、手、手へ、片ッ端しからパ

ンを渡して行つた。

空地の片隅の名も知らぬ立木の青い葉が、夏の陽を受けてキラ〳〵と光つてゐた。

× ×

五月になつて雨が降つたり止んだりしてゐた。

前進の噂が本當になつた。部隊は作戰上、第一半部、第二半部の二つに分けられた。

私は第一半部となつた。經理室では福島主計伍長（現軍曹）と、横山一等兵とが第二半部に編入となつた。

五月七日の早朝、清水軍醫中尉を首領とする第二半部は雨あがりの泥道にトラックを驅つて、蚌埠の西北方百キロの地點にある「蒙城」へ前進して行つた。

續いて小原隊長を首領とする私達の第一半部は、蚌埠の北方「徐州」との中間に位する「北園子」へ向つて前進することになつた。私達には一挺づつ銃が渡された。

私達は千人針を背嚢の底から出して腹へ卷いた。どんよりとした空模樣の五月十六日の朝、私は上陸以來初めて自分の物として手にした銃と藥盒の重みに、湧然たる信賴の情を抱いて前進の「トラソク」に攀登つた。

何？　凱旋は？　つまらぬ事を考へるな。北へでも南へでも、百キロでも二百キロでも何うでもいゝ。何處までも前進して行けばいゝ。

敵襲とその後

五月十六日

トラツクの車輪が泥濘へ落ち込んだ。私達は車から下りて後押しをした。車がやつと動き出すと私達は泥の中を追ひ馳けて行つて飛び乘つた。靴も拳脚絆も「トラツク」の上の梱包も泥だらけになつた。

トラツクと並行して輜重特務兵の一隊が、馬に砲車を牽かせてぐちや〳〵と音を立て乍ら行軍してゐた。馬も兵隊も車も泥だらけであつた。トラツクは少し行つては泥濘へ嵌まり込んでしまつた。私達が下りて後押をしてゐる傍を、先刻私達のトラツクが追ひ越した砲車の一隊が、ぐちやぐちやと泥を踏んで通つて行つた。行けども〳〵泥濘の道が續いた。

日が暮れると寒くなつて來た。空は眞暗であつた。私達は銃に彈丸をこめて安全裝置をかけた。

私はひどく疲れて眠たくなつて來た。

やがて前方に、黑い木立ちの間から焚火のちら〳〵と見える部落らしいものが見え出した。車はそれを目標にして進んで行つた。

十時を一寸廻つた頃、やつとそこへ辿りついた。

先頭の車から誰か二三人下りて行つて、

「おーい」

と呼んだ。焚火の邊りに人影が動いて、

「おーい、誰だーい」

と問ひ返した。こつちの方が、

「小原部隊だ、此處は北園子か」

と言ふと、

「おゝやつて來たか、此處だ〳〵、皆んな早く下りて來い」

と闇の中から返事が聞えて來た。私はほつとした。是は私達の先發隊と、そして蒙城から作戰の

都合で廻つて來た第二半部の一隊であつた。

邊りは本當の眞暗闇で、何んな地形か全然見當がつかなかつた。

私達は取りあへず其處らあたりへ梱包を降して、焚火の傍に汲んであつたバケツの水で飯盒炊さんを始めた。

此處には既に第〇師團の第〇野戰病院が開設されてゐたが、明日私達の部隊が之を引繼ぐといふ事であつた。そして此の部落を中心にして附近一帶には殘敵が蠢動してゐるので、蠟燭もうつかり點せないといふ申し送りであつた。飯盒炊さんをしてゐる私達の傍へ第〇師團の衞生兵がやつて來て「焚火も危險だから消してほしい」と言つた。私達は炊さんもそこ〳〵に焚火を消した。

とに角眠る場所が欲しかつた。闇を透して見ると部落の中を横切つてゐる道路の兩側に、低い民家の屋根が見える。塚谷が、

「いま、家を見て來たが皆んな患者が入つてゐるし、今夜は此處で露營だぞ」

と言つた。

私と梶谷は「明日になれば何とかなるだらう」と言ひ乍ら塚谷と三人で、道の片隅へ梱包の箱を積んで小さい城壁を作り、携帶天幕と高粱の殼とで屋根を葺いて一夜の寢ぐらを作つた。他の戰友

も、夫々箱を積んだり天幕を張つたりして、露營の準備をしてゐた。

辻主計殿がマントを着てやつて來られて、

「わし等は向うの家で寢る事にしたが、君らは何うだ、寢る所があるか」

と言はれた。私達は、

「はい、この御殿の中で寢ます」

と言つて急造の寢ぐらを指さすと、

「ほゝう、御殿か。御苦勞だね、まア今夜だけ辛抱してくれ。それから銃は手近い所へ置いてくれよ」

と言ひ殘して向うへ行かれた。

私達三人は腰を屈めて這ふ樣にして天幕の下へ入つた。

先きに入つた梶谷が、

「此奴ア駄目だ。疊が無いぞ」

と言ひ乍らごそ〳〵と出て行つたが、しばらくすると「アンペラ」を二枚持つて戻つて來た。

私達は「此奴ア上等だな」と言ひ乍ら土の上へそれを敷くと、銃を頭の方へ置いて叉脚絆をはい

たまゝ外套を着て横になつた。場所が狹いので足を曲げて寢た。靴へ泥水が入つたのか何だかじめじめしてゐた。私は帽子の顎紐を掛け、手探りで背嚢を引き寄せて枕にした。三人とも默つてゐた。私は目を閉ぢた。うつら〳〵としてゐる私の耳に、未だ露營の設營にかゝつてゐる戰友の話聲と、何處かでどかーん〳〵、ごろ〳〵といふ砲聲とが夢の樣に聞えてゐた。

五月十七日

夜中に寒さで何べんも眼が覺めた。外套を引つ掛け直しては眠つた。

首筋が冷いので又眼が覺めた。いつの間にか雨になつてゐて、天幕の隙目からぽたり〳〵と雨の雫が落ちてゐた。足許の方からも雨が吹き込んで、外套の下から出てゐた足が冷んやりとしてゐたしアンペラもじめ〳〵と濕つてゐた。起き上つて兩手で天幕を押し上げると、溜つてゐた雨水が梱包の箱を傳つて兩側へざあ〳〵と流れ落ちた。

夜が明けた。雨は相變らずしと〳〵と降り續けてゐた。私達は外套を被つた儘外へ出た。

邊り一面は泥田の樣な泥濘になつてゐた。

其の泥濘の路を狹んで牛小屋の樣な家が兩側に二三十軒程並んでゐた。

第〇師團付の衛生部隊の將兵達は、最早出發の準備を整へて私達の部隊の將校に、後を頼みますと挨拶をして、靴が埋る樣な泥道をぐちや〳〵と音をさせ乍ら、前の道路の方へ出かけて行つた。

此の部隊は徐州へ前進した師團の後を追つて行くのであつた。

辻主計殿がやつて來られて、

「つい其處に空いた家があるから其處を經理室にしよう」

と言はれた。私達は天幕の家を壞して其の家へぐちや〳〵と泥を踏み乍ら梱包を運んだ。下積になつてゐた蠟燭の箱は泥だらけであつた。

私達の手も服も泥だらけになつた。

故郷の青年團から寄せ書をして貰つた國旗が、背嚢の下から泥水びたしになつて出て來た。

經理室に當てがはれた其の家は、之も牛小屋の樣な粗末な家であつた。土の四角い塊りを積み重ねて其の上へ高粱殼の屋根を葺いた土民の家であつた。煤けた鍋や瓶などが土間に轉がつてゐて、天井からは長い煤がぶら〳〵と下つてゐた。私達は土間へ梱包の箱を積み重ねて、何うにか三人が寢られる場所を造つた。

電燈などは勿論ない。事務室だとか机だとかそんな事を言つては居られない。私は記帳も大分遲

れてゐたし、「オハラニュース」も茲しばらく休刊してゐるが、今はそんな細い仕事をしたり物を考へたりする氣になれなかつた。

喰べる事と、寢る事に不自由なければそれでいゝといふ氣持であつた。

晝過ぎに雨は止んだが、服がしつとりと濕つてゐてぞく〳〵と寒かつた。こんな位ゐなら蚌埠を出る時に冬服を貰つてくれれば良かつたと思つた。

兩側に牛小屋の樣な民家が二三十軒、眞中に道路が一筋、之が部落「北ゲン子」である。

部落の兩端に高い木立がこんもりと茂つてゐた。砲聲は昨夜よりも激しく聞えてゐた。民家は殆んど全部病室に當てがはれて、患者は土間に敷いた「アンペラ」か毛布の上でじつと物を考へる樣な表情で寢てゐた。

部落の周圍は見渡す限りの黃色い麥畑であつた。どかん〳〵といふ砲聲は麥畑のずつと向うのあの森の蔭からでも聞えて來る樣であつた。

五月十九日

雲の切れ間から時々陽が射す。乾いた地面が靴の跡で凸凹になつてゐた。

砲聲は止んでゐた。負傷兵が「トラック」で何臺も運ばれて來た。皆んな擔架のまゝ降されて、家の前へずらりと並べられた。

病室の兵隊が、外科器械の入つてゐる箱を次々に持ち廻つて、手當をしてゐた。

私は、經理室で帳簿を記ける仕事などは、落ちついた所へ行つてから幾らでも出來ると勝手な理窟をつけて忙しさうな病室の手傳ひをした。私はこゝで「手傳ひ」といふ樣な表現をしなければならぬ自分を恥しいと思つた。衛生兵として召集令狀を受取つた時の私の戰場への色々な想像と、私が上陸以來の實際の仕事との間には大きな食ひ違ひがあつた。私は經理室にゐて帳簿を記けるといふ仕事が特別に嫌ひではなかつた。然し深綠の襟章を付けてゐる衛生兵としての物足りなさを、私は此の頃感じる樣になつてゐた。

上海から前進して「顏家村」で病院開設の時には、命令といふものに對して超人爲的な偉大さを觀念して、衛生兵で經理室の仕事をするのも矢張り御奉公の途であるといふ事に何の疑念も起らなかつた。然しそれから後、月日が流れて度々部隊内での勤務交代があつて、炊事部から病室へ、病室から治療室へといふ風に交代の命令で職場を變つて行く兵隊を見たり、いま又斯うして運び込まれて來た負傷兵の擔架の間を馳け廻り乍ら甲斐々々しく立ち働いてゐる「病室附衛生兵」の姿を見

ると相も變らず經理室に燻つてゐて「手傳ひ」に繃帶を卷かねばならぬ自分が、皆んなから取り殘された樣に思はれて、憐れにも寂しかつた。辻主計と梶谷一等兵が南京へ公用の連絡に出かけた。病室附の西梨子一等兵が「病室は狹くて寢られんから梶谷が歸つて來るまで此處へ泊めて呉れんか」と言ひ乍ら、豚の太腿の所をぶら下げてやつて來た。

塚谷は、

「ほゝう、いゝ物を持つて來たな、よし今夜はすき燒だ」

と言つて入口の傍の土を掘つて煉瓦で竈を造りにかゝつた。

〇〇〇〇から廻されて來た警備兵の〇個分隊が、今夜から此の部落の警備をすることになつた。私達は衆脚絆を解いて蠟燭を消して、足をぴんと伸して寢た。昨夜の露營とは餘程樂であつた。眞暗であつた。西梨子が私と塚谷の間へ割り込んで來た。眠らうとしたが西梨子の鐘馗の樣な髯が私の顏に觸るので五月蠅くて仕樣がなかつた。

私は「五月蠅いなアこの髯は」と言ひ乍ら一掴ぐいと引つ張つたら、

「痛い〳〵、貴樣等子供に弄らせる物ぢやない。早く寢んか」

と言つて自分で髯を撫でさすつてゐる樣子であつた。塚谷が、

「これぢや戸締りが悪い」
と言ひ乍ら起上つて、手探りでアンペラの樣な物を戸口へ引掛けて入つて來た。西梨子が、
「おい齋藤、〝今頃は何處に何うしてゐるのやら〟といふ都々逸を聞いた事があるかい」
と言つたから私は、
「そんなの聞かんわい」
と言つたら彼は、
「聞かなきや釘でも打てばよい」
と節を付けて唄つた。本職は坊さんであるといふが中々乙な事をいふ。
塚谷は、
「あゝあゝ!!」
と溜息とも欠伸とも分らぬ聲を立てゝ寢返りをしたらしい。
私達はいつか寢入つてゐた。
それからどの位ゐ時間が經つてからか、私は夢うつゝの中に遠くの方で誰やらが何か大聲で呼はつてゐるのを耳にした。

はつと思つて頭を上げると、表の方をばた〳〵と走る靴の音がする。
「敵襲だ」
といふ聲がした。
西梨子が、
「おい、起きろ」
と言つた。私は枕元を手探りで、蠟燭に灯を點けた。三人は無言の裡に手早く武裝をした。
私は蠟燭を吹き消して表へ出た。外は眞暗であつたが向うの木立の蔭が仄明るく、月でも出かゝつてゐる樣であつた。家の前には各室から出て來た兵隊が大方整列してゐた。指揮官の清水中尉が銃を持つて立つてゐた。二列横隊に並んで番號をとつた。病室勤務で手離せない者を殘して全部揃つてゐた。
「彈丸こめ」「付け劍」の號令でがちや〳〵と音がして皆んなの頭の上で劍身が白く光つた。
清水中尉が低い聲で言つた。
「只今警備兵斥候の報告によれば、北方約千米の地點に當つて我方に向つて移動しつゝある敵部隊らしきものを發見したる由である。

部隊は萬一の場合を考慮して、これより警備兵と協力して我が部落の警戒に當らんとす。」
そして警戒區分が示されて部隊は幾つかの分隊に分れた。
下士官の分隊長の「前へ進め」の號令で各分隊はがちや〳〵と劍鞘の音を殘して、白い劍身の縱列が闇の中を夫々の部署について行つた。
私が第三分隊で東方迂回道路の警戒に加はつて出かけようとすると、淸水中尉は、
「辻主計がまだ南京から歸つて來てゐないから、お前達經理室の兵隊二名は金櫃を此の道路まで持ち出して其の場に立哨警戒せよ」
と言はれた。私はどんな場合にでも金櫃の傍から離れてはいけないといふ辻主計からの日頃の言ひ付けを思ひ出して、今夜は俺は一寸あわてゝゐるなアと思つた。
私は塚谷と二人で金櫃を家の前の道路まで運び出して、前方の幹線道路の方を向いて立つてゐた。
皆んな警戒線について行つてしまふと邊りは急にひつそりと靜かになつた。
時々馳け足でやつて來る斥候兵らしいもの〻靴音が聞えてゐた。
私の腕時計は二時近くを指してゐた。私は、今にも銃の音と喊聲とが直ぐ眞近い所から起つて來る樣な豫感を全身に感じ乍ら、自分の銃劍が光るのを見つめて立つてゐた。

塚谷も默つてゐた、私も默つてゐた。
向うの木立の上の雲間から双物の樣な蒼い半月が顏を出すと、幹線道路の向うの麥畑が白く浮き出て、私達の二つの影が地面に細長く映つてゐた。
三時が過ぎても異狀がなかつた。
四時頃になると各分隊が歸つて來た。
今夜はこれで異狀が無からうといふので、警備兵に後を賴んで部隊員は皆んな自分の部屋へ歸つて寢た。
金櫃を部屋へ運び入れて、蠟燭を點けて、腰の帶革を外し乍ら私は塚谷と顏を見合せて思はず、
「よかつたなア」
と言つた。

五月二十日

空はよく晴れてゐた。
そよ風が綠の木立を靜かに搖がしてゐた。

負傷兵は今日も朝早くから運ばれて來た。

白い陽の下で皆んな毛布を被つて擔架に横たはつてゐた。

小原隊長がいつもに無く私達の家の直ぐ前の低い木立の下で、石に腰をかけて地圖を見てゐた。

午後一時頃、清水中尉が慌だしく何處からか歸つて來て、

「只今○○へ連絡に行つて參りましたが、その情報によりますと、徐州の敗敵は目下吾が部落方面に向つて續々遁走中、その兵力約三ケ師であります。敵は兵力の手薄に乘じて我が病院を包圍攻擊するかも分りません。此の際、隊長殿の御決斷を承はりたいとの事でありました」

と隊長に報告をした。私は少し離れてそれを聞いてゐたが、さてはと思つた。

隊長は「うん、さうか」「いや御苦勞」と言ひ乍ら腰を上げた。そしてしばらく何か考へてゐる樣子であつたが、やがて清水中尉に向つて、

「よし、わしの決斷はついてゐる。

すぐに○○○へ返事をして呉れ。

目下我が部隊は○○○名の患者を收容してゐる。その上部隊員の一部は『蒙城』に在つて本隊の兵力僅かに○○○名である。

此の兵力を以て此の地を死守せんとすれば、いきほひ動けぬ戰傷兵を敵の蹂躙に委ねる事も豫想しなければならぬ。

今より可及的速かに患者を後方一粁半の『板橋集』に移し、我が部隊も其處に移動しよう。

『板橋集』は地物の利用に便である。部隊は其處に於て應戰の準備を整へよう。此の事を直ぐに○○へ報告してくれ」と言つた。

それから一時間程經つてから○○○の「トラック」が何臺かやつて來た。我が部隊の「トラック」も之に加はつて重傷者から先きに板橋集への患者の輸送が開始された。部落一帶が何となくざわめいて來た。患者を積んだ「トラック」が麥畑の道を何臺か列を作つて出て行つては、空の「トラック」が歸つて來た。

私達は家の中の梱包を皆んな表へ出して、患者輸送が終るのを待つてゐた。

日が暮れかゝつて來た。

トラックが歸つて來る度に夕闇の中を家々の軒下から出て來る患者の白い着物や繃帶が痛々しかつた。

邊りがすつかり暗くなつてから、私達は梱包と一緒に「トラック」で板橋集へ行つた。

高さ七、八尺位ゐの土手が部落の周圍をぐるりと取り卷いてゐて、西と東とに小さい門の入口があつた。私達の「トラック」は西の門を右に見て土手際づたひに東の門を入つて行つた。

「北ゲン子」とよく似た樣な民家が、部落を東西に貫いてゐる道路の兩側に並んでゐた。

暗闇の中で、兵隊と梱包と「トラック」と擔架とが、入り亂れごつた返してゐた。私達は西門の眞近に空地を見出し、其處へ梱包を積み重ねて取りあへず一服してゐた。「トラック」が「ヘツドライト」をつけて門を入つて來ると警備隊の歩哨が、

「明りを消さぬか」

と呶鳴つた。

私は何處か寢る所が無いかと思つて、すぐ前の家の低い軒を潛つて二三歩行くと、暗闇に人の氣配がするので透して見ると今運ばれて來たと思はれる患者が何人か寢てゐた。私の足許にも寢てゐた。もう少しで私は患者を踏むところであつた。

此處は駄目だと思つてそつと出ようとすると、

「其處にゐるのは衞生兵さんですか」

と言ふので、

「あゝさうだよ、何か用事かね」

と言ふと、

「濟まんですが私の隣の此の兵隊が先刻から、出血がひどいと言つて苦しんでゐますが、見てやつて呉れんですか」

と言つた。私は上衣の物入れから燐寸を出して擦つた。家の中が薄明るくなつて、土間に高粱の殼や毛布を敷いて寢てゐる痛々しい何人かの患者の姿が眼に映つた。私は聲のした方へ向つて、

「何の人ですか」

と言ふと、中の一人が仰向に寢たまゝで、

「この兵隊です」

と隣に寢てゐる患者を指さした。

燐寸が消えかゝつたので私はもう一本擦つて足許に氣を附け乍ら患者を跨いで近寄つて見た。煤けた天井の一點を凝つと視つめて其の兵隊は、頭を私の方にして仰向けに寢てゐた。毛布の端から尖つた鼻が出てゐた。

私は三本目の燐寸を擦つて傍へ屈み乍ら、

「創の場所は？」
と尋ねると、隣の患者が、
「左の足です」
と言つて自分で半身を起して毛布を捲つてくれた。膝の關節から足首へかけて副木の繃帶がしてあつた。其の中程は血が眞赤に滲んでゐた。私が、
「痛いかね」
と言ふと、其の兵隊は矢張り天井を視つめたまゝで、
「大丈夫です。少し寒いだけです」
と、しはがれた小さい聲で初めて答へた。
私は先刻「北ゲン子」を出る時に水筒に詰めて來たお湯のあることを思ひ出したので、梱包の繩に結び付けてあつた水筒を取つて來て兵隊の口に當てゝやつた。兵隊は美味さうに飲んでくれた。
今の私にはこれ以上の事は出來なかつた。私は、
「いま、軍醫殿に來て貰ふから待つてゐてくれ」
と言ひ殘して出ようとすると、今度は出口の近くから、

「ちよつと此の毛布を敷き直して下さい。背中が痛いですから」
と言ふ聲がした。私は表にゐる塚谷に懐中電燈を持つて來てくれと呼ばつた。塚谷は、
「何んだ〳〵」
と言ひ乍ら懐中電燈を灯して入つて來た。
枯れた高粱の太い莖が恰度背中に當る毛布の下になつてゐたので、私は塚谷に患者の上半身を支へさせておいて具合良く敷き直した。
外は相變らず擔架と梱包の往き來で混雜してゐた。私は其の中から田賀軍醫の姿を見付けたので今の患者の事を話した。
軍醫は、
「よし〳〵何處だ」
と言つて私の後からついて來られた。

× ×

私達は家の軒下へ外套を被つて寢た。
今夜は月が見えない。斯うして寢てゐる私の頭の眞上の方に鈍く光る星が一つある。時間が經つ

に從つて段々靜かになつて來た。今日の晝、「北ゲン子」で隊長が清水中尉に言つてゐた事をもう一度思ひ出してゐた。

「蚌埠」を出てから僅か數日の間に、私の部隊はぐる〳〵と廻轉する戰爭の坩堝の中へ入つた樣な氣がする。

そして私の身内にも、何か激しい感情が湧き起つてゐる樣に思はれてならなかつた。

向うの暗がりから、そ〳〵と話聲が聞える。

これも露營の部隊員らしい。耳をすますと徐州が昨日陷ちたとか言つてゐる。傍へ行つてもつとはつきり聞かうと思ひ乍ら、私はいつか寢入つてしまつた。

五月二十一日

夜が明けて、土手に近い空家が、露營よりは良い事を發見した私達は、其處へ梱包を運び入れて私達の家にした。

高粱を葺いた屋根の所々から陽の光が射し込んでゐた。すぐ其處に西門があつて、土手の前方は見渡す限りの麥畑であつた。風が吹くと實つた穗先がざわ〳〵と波打つて、遙か向うの森の邊りは

黃色くぼやけて見えた。

西門から五十米程行つた麥畑の中に井戸があつた。私達は其處へ行つて釣瓶で汲み上げては飯盒や顏を洗つたりした。

遠い所で機關銃の音がしてゐた。午後になつて患者〇〇名を〇〇へ後送することになつた。患者輸送班の「トラツク」が何臺も東の門から入つて來た。炊事部が握飯をこしらへて是らの患者に分配した。

「トラツク」は西の門から列を作つて出て行つたが、しばらく經つと、患者を載せたまゝ東の門から逆戻りをして歸つて來た。それは途中で敵彈を受けて先頭の車の運轉兵が卽死をしたりして、とても輸送不可能であるからとの事であつた。

決心してゐた事が思つたよりも早く、而も確實にやつて來さうであつた。

その中にド、、、、、といふ機關銃の音が眞近に聞えて來た。少し遠くにドカーンといふ迫擊砲の炸裂するらしい音がした。

私達が土手の蔭から首だけ出して前方を見てゐると、麥畑の中を這ふやうにして二人の兵隊が一人の負傷兵を戶板に乘せてこつちへやつて來た。それは警備隊の兵隊達であつた。

西門を入ると馳け寄つて來た衛生兵達に、

「すぐ其處でやられた、早く見てやつてくれ」

と言つて又麥畑の中を脊を低くして走つて行つた。

負傷兵の、服の胸の邊りが赤く染つてゐた。

びゆーんと耳もとを掠めて行つた。私は本能的にはつと頭を下げて土手の蔭へ身をかくした。

私の直ぐ後の乾いた土の上へぷす／＼と砂煙が上つた。彈丸が一寸杜切れた。

私は何といふこともなく自分等の家の方へ馳けて行くと、家並の後の方から隊長がいつに變らぬ

ゆつくりした足取りで獨り言の樣に、

「ほゝう、一寸やりよるわい」

と言ひ乍ら出て來られた。

夕方、部隊長の命令が傳達された。

それは、我が部落は漸次敵の包圍下に入つたもの丶如く、而も後方との連絡は斷たれてゐるから

部隊員は警備隊と協力して此の地を守るべしといふのであつた。

夜になつた。

我々は着劍銃を持ち警備隊の兵隊と一緒になつて、部落を取卷く土手の塹壕に身を伏せてゐた。

私は塚谷と並んで西門のすぐ右手の壕に入つた。空は眞暗で今にも雨にもなりさうな風が吹いてゐた。塹壕の土が夜露にしつとりと濕つてゐた。何處かで犬がしきりに啼いてゐた。

遙か左手の、畫間見た麥畑の彼方の森の邊りに、ちら／＼と赤い火が見え出した。ずつと右手にも、そして眞正面にも赤い火が明滅した。

敵だ、と私は直感的にさう思つた。

其の何かの合圖の樣な赤い火は、見る／＼中に數が多くなつて、明滅しながら眞正面へ移動して行つた。

それが一時に消えて、しばらく經つと前方約四、五百米の邊りに、パツ／＼と閃光が見えて五六發の銃聲が聞えて來た。土手の下の麥畑が風を切る樣にぴゆー／＼と鳴つた。西門の左手から、

「こつちはまだ射つなよ」

と呶鳴る聲がした。我々は息をころして、じつと前方を視つめてゐた。

次の瞬間、前とはもう少し近い所に、横に一列の閃光が見えてパン／／／／といふ銃聲と共に、

私の耳のそばをひゆん／／と彈丸が掠めて行つた。

すると私達の左手の壕から警備隊の機關銃がドド、、、、と火を吐き乍ら射ち出したのと一緒に我々は一齊に射撃を始めた。

硝煙の臭ひが鼻先に漂うて、耳がガン〳〵と鳴つた。

私は何も考へなかつた。たゞ引金を引く度の強い反動を右の肩先にぐい〳〵と感じるだけであつた。そして自分の銃聲が何れやら分らなかつた。薬盒から彈丸を出す手がもどかしかつた。私は前方の閃光の邊りを目標にして目茶苦茶に撃ちまくつた。

十分も二十分も經つたかも分らない。或は二分間か三分間であつたかも知れない。次第に近付いて來る樣に思はれた前方の閃光が全く見えなくなつた。我々は申し合せた樣に射撃を止めた。別の世界の樣に急に靜かになつた。我々は其の儘、前方を視つめて警戒してゐたが、塗りつぶした樣な闇の彼方には最早何の異狀も認められなかつた。何處かでまた犬が啼き出してゐた。

隣の壕の中から塚谷が、

「おい」

と言つた。私も塚谷の方を向いて「おい」

と言つた。私は壕の中へ腰を降して、たばこを吸ひ付けた。

ぽつり〳〵と雨が降り出して來た。

五月二十四日

朝早くから患者の後送が行はれてゐた。風は無く、陽が照りつけてゐた。

私は私物のランニングシャツ一枚になつて塚谷と二人で、まだろくに整理もしてなかつた家の中を取り片付けて、少しは經理室の事務室らしくしようとしたが、どうも狹いので家の前へ天幕を張つて其處を事務室にした。

他の部屋の兵隊が天幕の前を通ると中を覗いては「いよう、上等の事務室だな」と言つた。

土手の前方の麥畑の中を、友軍の歩兵が長い二列縱隊を作つて行軍して行つた。私達は仕事の手を休めて土手の上へ上つて見てゐた。皆んな戰鬪帽の後ろへ布切のひら〳〵を附けて歩いてゐた。腰から下は麥の穗波に隱れて見えなかつた。

縱隊の切れ目〳〵に、背嚢や雜嚢を背中に括り附けた驢馬が首を振り〳〵歩いて行つた。手拭で頰被りをしてゐる兵隊もゐた。

先頭はずつと向うの麥畑の中へ小さくなつて行つた。皆んな大分疲れてゐるらしくゆつくり〳〵

と歩いてゐた。

徐州は最早陥ちてゐるといふ。併しこれらの兵隊は何處から來て何處まで此の行軍を續けて行くのであらうか。私達は夫れは分らなかつた。或は行軍してゐる兵隊達それ自身にも分つてゐないかも知れなかつた。けれどもこゝに、誰にでもはつきり分つてゐることが一つあつた。それは此の兵隊達は、曾つて硝煙の下をかい潜つて生き殘つた者が、今またその行く手に拓けてゐるであらう硝煙の渦中への行軍を、何の變哲もない無言の表情で續けて行くといふ偉大な現實であつた。

兵隊達の背中にぶら下つてゐる鐵兜が陽にきら〳〵と光つてゐた。

夕方、私達の家の前の水溜りに首を突込んで泥だらけの白い驢馬が一匹死んでゐた。

陣中風物 その三

（於ばん埠） 昭和十三年七月三日發行

（オハラニュース第二十一號所載）

隨筆「ゐもんぶくろ」

差出人は斷然をんな名前に限る。受取つてから御禮の手紙を出すと、折返し優しい返事が來るで

あらうといふ連想が附き纏ふからである。袋の入組品等は第二の問題である。

私が若し他日故郷へ生還して、戰地へ慰問袋を送る樣なときには、たとへそれが自分の手で作つた物であつても、妻か妹の名を以てすべきであると思つてゐる。若し天蓋孤獨の男一匹であつても須く女名前を使用すべきである。

氏名僞稱の罪は、受取つた兵隊を喜ばせるといふ善行によつて、善惡の差引は立派に成り立つ。女尊男卑ではない。銃後の赤誠を性別によつて區分けするのでもない。理窟抜きにしてとに角女名前の方がいゝのであるから仕方がない。

『戰地の勇士樣へ　　××子より』

といふ手紙が袋の中から出て來た時には、二重の喜びに胸が湧く。

『勇士樣』にはいささかてれるが、勇士でないと言はれるよりは風通しがいゝ。

すぐに御禮の手紙を書く。情緒溢れる名文句を、軍事郵便取扱規定の二十グラムに秘めて送る。それで話は濟んだ筈である。

物を貰つて其の御禮の手紙を出す。それでいゝのである。それ以上の何物をも期待すべきではないのである。併し兵隊は積極的である。攻擊精神に富んでゐる。御禮狀を出しただけでそれで取引

相濟といふ風には考へないのである。そのまた返事の手紙が欲しいのである。

『すぐに御禮狀を出したのに、まだ返事が來ん。どうも薄情でいかん』

返事が來ないと斯ういふ具合になるのである。併し斯う言ふ口の下から、やがては返事が來るであらうといふ淡い期待を、勸業債券の當籤を當てにする樣な氣持で捨て難いのである。

私が先々月、○○で受取つた慰問袋は、私の鄕里に近い○○市の一婦人からのものであつた。喜んで御禮狀を出したが、今日に到るも未だその『返事』が來ない。是は緣なきものと諦らめてゐる。

此の間配られたのも、矢張り○○市の一婦人からのものである。而かも中々達筆な手紙が添へてあるし、內容品も一寸あか抜けがしてゐる。

斯んな女性からのは、何うも返事が欲しいと思ひ、御禮の文句の後へ次の樣なことを書き足して手紙を出した。

『僕の此の嬉しい氣持をお傳へ出來るのは此の一本の手紙に依る外はありません。併し、何分、澤山の軍事郵便のことですから、どんな事で御手に屆かぬ事があるかも分りません。さうなれば僕の感謝の氣持は永久に貴女に通じないで終つてしまひますし、併せて意外の失禮をした事になる

わけです。御面倒では御座いますが、僕の此の手紙が着きましたら「手紙來た」と唯それだけで結構ですから、御返事を下さいますれば僕は安心します。』

是れは我れながら上出來だと思つてゐる。

然るに爾來廿日餘、未だその「手紙來た」が來ないのである。

近い中に一ぺん催促をしようと思つて、いまその文案を研究中である。

諦められないからである。

陣中風物 その四

（於ばん埠）

（昭和十三年七月十日發行 オハラニュース第二十二號所載）

歌詞 戰線夜情

1、南京虫は出ないかと
今日も母から來た手紙
土間に寢轉ぶ高粱の
蒲團ですもの此の頃ぢや
もう馴れつこで平氣です
雨の夜更けに手紙書けば

おつと此奴めお母さん
2、兄さん射撃は上手かと
くれた其の夜の攻撃に
自慢ぢやないが兄さんは
おつと歩哨に立つ時間
3、坊やのことは此の妾
もしもの事がおありでも
畜生よくも言ひよつた
おつといけねえ泣けて來る

蠟燭の火で丸燒きだ
酒落た手紙を弟が
引いた引金銃火線
相當な腕になつてるぞ
驢馬が啼いてる星月夜
きつと立派に育てます
泣かぬ覺悟をしてゐます
賞めてやりたい妻ごころ
月の塹壕の薄ら寒

陣中風物 その五

（於ばん埠）（昭和十三年七月三十一日發行オハラニュース第廿四號所載）

隨筆 "戰死"

廣島に滯在中の私達の宿舍として、一方ならぬお世話になつた川口家から手紙が來て、

"息子も北支へ出征中のところ、名譽の戰死をした由知らせがありまして……" と書いてあつた。

川口家に出征中の息子のある事は豫ねて聞いてゐたが、それが戰死の報に接しては同じ出征中の我身に引きくらべて感慨淺からぬものがあつた。そこで早速、同家で一緒に世話になつた戰友數名に此の事を報告して、衆議一決の上、禮を厚くした手紙に若干の香奠を添へて、航空便に托し弔意を表したのであつた。

私はとてもいゝ事をした樣に思はれて氣持がよかつた。

ところがそれから何日か經つて、川口家から手紙が來た。多分此の間の御禮であらうと思ひつゝ封を切つて見ると、

"息子が戰死をした由、早速お知らせ下さいまして有難う御座います。まだ公報はありませんが、さぞ花々しい最期を遂げてくれたことゝ思つてゐます。御叮重に香奠までも頂きまして……云々"

とある。

御禮狀には相違ないが、何うも變な具合である。こつちは先日の川口家からの知らせで戰死を知

つたのであるのに、先方ではこつちからの手紙で初めてそれを知つたといふ風である。どうもおかしい具合である。

私は念の爲に前に來た手紙を取り出して、丹念に讀み直して見た。

あゝ私は何といふ忽々つかしい男であらうか。

私は慌てゝペンをとると川口家宛に謝りの手紙を書いた。

『私の不注意から飛んだ御心配をおかけしました。實は今日の御手紙で少しおかしいと思ひ、前に頂いたお手紙を讀み直しまして、戰死したのは馬であつた事を知りました。何卒お許し下さい。これからは間違はぬ樣にいたします。』

それから

お母さん。

今日は十月廿九日です。

私はいま、京漢沿線の要地「信陽」城内にゐます。

昨日着いたところです。支那の小學校であつたといふ古ぼけた建物が私達の部隊の病院になりました。私が勤務してゐる經理室は、表門を入つて運動場の片隅の、さゝやかな煉瓦造りの一室です。部屋は壁によつて二つに仕切られてゐて、前の方を事務室に、後の方は私達の寢る所にしました。支那人が使つてゐた、木の枠にしゆろ梱繩の綱を張つてある寢臺です。土間の高粱殼に毛布を敷いて寢たりした「北ゲン子」や「板橋集」に比べて、是は遙かに贅澤です。部屋の前から裏庭へ出る路地を境にして向ひが隊長殿の部屋です。

この町にはまだ電燈がありません。いま夜の九時半、私は事務室の机の上で蠟燭の光を頼りに此の手紙を書いてゐます。

此の部屋で一緒に暮す私の周圍の人は、前とは別に變りません。

辻主計少尉殿と梶谷横山、それに私の各衞生一等兵です。此の外に福島主計、青木衞生の各軍曹殿と、横山、森永の各衞生一等兵が經理室勤務ですが、此の人達は第二半部付となつて目下「蚌埠」にゐます。

私と仲の良かつた塚谷一等兵は、其の後の勤務交代で病室付になつて行きました。青木軍曹と森永一等兵は、其の時に他の掛りから經理室勤務になつた人達です。

斯うして時々行はれる勤務交代にも、私は相變らず經理室を離れません。

いつかのお母さんの手紙に、

彈丸に當つて死ぬのは諦めてゐるが、病室勤務になつて惡い病氣でも感染て死んでくれては思ひ切れない……。

といふ樣な事が書いてありましたね。

併し僕は衞生兵ですから、いつか一度は病室勤務をして見たいと思つてゐます。

あゝさう〳〵、手紙で思ひ出しましたが、此の森永一等兵がいつでしたか母から來た手紙だと言つて見せて呉れたのにこんな事が書いてありましたよ。

『お前は戰地にゐて豚や牛をいくらでも喰べてゐるさうだが、お母さんはあれは大嫌ひです。併し戰地のお前に喰べるなと言ふのは無理だらうから喰べてもいゝ。喰べる方の役ならしても仕方がないがどんな事があつても殺し役にだけはなつてくれるな、罰が當ります。』

お母さん。何處のお母さんの氣持も大てい同じですね。

お母さん。

私達の部隊はあの「板橋集」からトラックで、再び「蚌埠」へ集結しました。恰度六月の二日で

した。

其の前日まで雨で、ひどい泥濘の、道とも畠とも分らぬ泥の中を、車輪が半分位ゐ埋まり乍ら皆んな泥だらけになつて行きました。

蚌埠は四月に初めて來た時とはずつと暑苦しく、太陽が頭の眞上でキラ〳〵と埃つぽい道を照りつけてゐました。街には支那人と蠅とが驚く程澤山增えてゐました。部隊は以前使つてゐた建物をその儘利用して、再び此處で病院を開設しました。

今度は戰傷兵よりは傳染病患者がうんと增えてゐました。殊に蚌埠の南から西北方へ流れてゐる淮河が、連日の降雨で氾濫した七月の末頃には「コレラ」患者が大多數でした。

私は時々衣糧廠から來た患者用のちり紙や褌等を持つて傳染病室へ行きましたが、青いペンキ塗りの煉瓦の平屋建の其の部屋は、何處を覗いて見ても石灰で雪が降つた樣に眞白でした。「石炭酸」の臭が鼻をついてゐました。傳染病室付の兵隊達は食器に盛つた御飯の上へ、「ガーゼ」を被せて、左の手で「ガーゼ」の端の方を少しづつまくり上げ乍ら箸を突込んで食事をしてゐました。「ガーゼ」の上は蠅で一ぱいでした。恰度此の頃、部隊員の殆んど全部が代る代るに下痢に惱まされてゐました。六月から七月へかけての中支の雨期はじめ〳〵と蒸し暑く、別に變な物も喰べないのに直に腹

の具合が悪くなつて、部隊の藥劑部から藥を貰つて來て服んでも容易に治り切らない惡性の下痢に皆んな惱まされてゐました。私も劇しい下痢が一週間ばかり續き食慾は無くなるし、自分でも見違へる程に痩せて、蠅が眞黒に群り寄つてゐるアンペラの垂れを押し開けては、一日に五六回も便所へ通ふのが情ない程でした。そして大便の色を上から覗いて見たり、手の皮をつまんで見たりして赤痢か、「コレラ」になつたのではないかと私かに心配したものでした。

部隊でも皆んなの檢便等をして、色々と處置を講じましたが、結局これは皆んなが初めて經驗した大陸の夏と雨期とに禍ひされたもので、特に惡性の傳染病ではないとの事でした。

中には「俺は御飯にとまつてゐた蠅を知らずに喰べたのが原因だと思ふ」と言つてゐる兵隊がありましたが、蠅の蚌埠では實際有り得る事でした。

蚌埠の夏も八月の半ばを過ぎると漸く下り坂になつて、日中の暑さも夕方になると何處からか秋めいた風が吹いて來て、軒下の崩れた煉瓦の蔭あたりから蟋蟀の鳴き聲が聞えて來る樣になりました。

お母さん。

恰度此の頃、中支の作戰は次第に漢口へ〳〵と進展してゐました、私達の部隊も此の新らしい戰

線に加はる事になりました。

九月六日の朝、私達第一半部は、蚌埠の驛から貨物列車でその日の午後三時に南京の對岸の「浦口」まで下り、九日の朝、折からの小雨を衝いて御用船で楊子江を遡りました。小雨まじりの冷たい風が甲板を吹きつけて私達は夏服の上へ冬外套を引被つてゐました。午後五時、「裕溪口」といふ小さな村へ上陸して、兵站部が建てた「アンペラ」造りの宿舍に入りました。

夜中に雨が强くなつて、トタン張りの屋根がパタ〳〵と音を立てゝゐました。ひどい蚊で、私達は殆んど眠れずに一夜を明かしました。

此の「裕溪口」から西北方へ小さい川があります。部隊は十一日の朝、此處から小さい蒸汽船に分乘して、上流の「廬州」へ行く事になつてゐました。それから先は何うなるのか、私達には分つてゐませんでした。

お母さん。

十日はいゝ月夜でした。「裕溪口」の川端で見たあのまん丸い大きな月の夜景は、今もなほ私の印象に殘つてゐます。

私達は皆んな「アンペラ」の小屋から出て、川岸に積んであつた材木に腰を掛けてじつと月を見

てゐました。川面に碎けた月影が、直ぐ足許の草の茂みにまで美しく漂うてゐました。

明日、私達が乘つて行くといふ何雙かの蒸汽船の、月にそむいた黑い蔭が、銀の小波の中でじつと眠つてゐるかの樣でした。

皆んなはいつまでも、默つて月を見てゐました。

きつと銘々が別々の思ひ出を辿つてゐたに違ひありません。

部隊は豫定通り十一日の夕方「廬州」に着き、此處で當分待機することになりました。

廬州は町幅の細長い、ひどく荒れ果てた小さい町で、電線がだらりと下つてゐたり恰で震災の後の樣に崩れた家が並んでゐたりしてゐる中を、何れも着いて間もないらしい部隊が續々と往き來してゐました。

どの家の中にも支那人は全く見えませんでした。

こゝも雨が降ると町中が泥だらけになるし、お天氣が良くなると直ぐに砂埃が舞ひ上りました。

部隊は愈々、大別山の「光州」といふ町へ前進して病院を開く事になりました。併し雨降りが四五日續いたために、山道がトラックの通行不能となつたとかで、出發の準備をし乍ら毎日々々待機の退屈な日を送つてゐましたが、九月廿八日、廬州で十七日間の待機の後、やつと前進を開始しました。

例によつて、此の地方の兵站司令部から差廻しの「トラック」が、長い列を作つて大別山脈へ向つて行つたのです。

お母さん。いつかお母さんから頂いたお手紙に『お前の部隊はいつもトラックで行くらしいから辛くはないだらう』といふ事が書いてありましたね。併しね、お母さん辛いとか樂だとかは別問題として、若し私達の部隊が歩いて行かうとする場合には、何〇頭位ゐの駄馬がゐなくてはとても難かしい事です。それ位ゐ部隊の荷物が澤山あるのです。

差し當り、赤十字の印のついた、醫扱といふ大きな箱だけでも〇〇〇個位ゐは有るでせう。其の他に私達の經理室の荷物とか、患者用の御飯を焚く炊事部の道具とか、毛布とか云ふ衞生部隊に無くてはならぬ物が、どんな手近い所へ前進の場合でも差し當り厄介な「梱包」となるわけです。それには速くて能率の上る「トラック」が、私達の部隊にとつて一番重寶な足です。部隊にも何臺かのトラックはありますが、大移動の場合には足りないので斯うして兵站から廻して貰ふわけです。

さて九月廿八日、一路「大別山脈」へ向つたのでしたが、此の時には私達の部隊の名前は、それまでの「小原部隊」から「佐々木部隊」と變つてゐました。それは廬州での待機中に、小原隊長が

中支派遣軍〇〇長に轉轉され、其の後任として內地から飛行機で着任の佐々木軍醫〇〇ゝ隊長として迎へたからです。小原隊長は典型的な軍人肌ゝ人でした。佐々木隊長は初めて姿を見た時から優しい祖父さんと云つた樣な印象の人です。

先刻も私が此の手紙を書いてゐる背後へひよつこりやつて來られて、

「漢口へ入つたら美味いものを喰べさせてやるぞ」

等と言つて居られました。

さて、部隊は嶮しい山峽を越え、日が暮れると「トラツク」の上へ天幕を張つては露營をし交代で車の傍へ步哨に立つて、夜が明けると、又山峽を「トラツク」の行軍を續けて行きました。

一つの山の頂きへ來ると、車の縱列は一旦停車して、先頭の車から一臺づつ靜かに山坂を下つてずつと下の谷川の流れを這ふ樣に橫切つて、又向うの山の頂きへ移つて行きます。

私達の車ゝ後になつたり先になつたりして、〇〇快速部隊の戰車が日の丸の旗を振り立てゝ何臺も進んでゐました。轟々たる音が谷間や山の頂きにこだましてゐました。

途中良い天氣に惠まれて、部隊は異狀なく廬州を出てから八日目の十月六日の夕暮近く、目的地の「光州」へ着きましたが、此處で別の命令が出て更に西方の「羅山」で病院を開く事になり、翌

七日の晝過ぎ「羅山」の町へ梱包を降しました。「羅山」は大別山麓西方の小さい町です。

民家の殆んど全部は目茶苦茶に打ち壞されてゐて、煉瓦塀の崩れたのが道を埋めてゐました。そして僅かに形を殘してゐる家の壁などには、極端な排日抗戰の文句が書いてありました。此處は最も抗日思想の盛んな所であつたと戰友の誰かゞ言つてゐました。

部隊は此處で十月廿八日迄病院を開設して、それから現在の此の「信陽」へ入つたわけです。

お母さん。

「羅山」の病院では米と副食と、それに蠟燭とが缺乏して、其の上水が惡く皆んなは暗い氣持になつてゐました。直ぐ近くに衣糧廠がありましたが、米や麥が充分に來てゐないので私達は普通の一食分を一日分にして喰べてゐました。私達部隊員はそれでどうにか辛抱をして來ましたが、氣の毒なのは入院患者でした。

氣候は大分寒くなつてゐました。

蠟燭の足りない殆んど眞暗の病室で病室と言つても牛小屋の樣な家しかありませんでしたが——衞生兵を呼んでゐる患者の聲を聞いたり……。

お母さん、もう斯んな報告は止しませうね。

さて此處は「信陽」です。京漢線の要地、流石に可成り大きい町の樣ですが、私達はまだ昨日着いたばかりですから町の樣子は充分判つてゐません。昨日「羅山」から雨の中をトラックで約二時間程で此處へ着きました。

「羅山」程に町は壞れてゐませんが、併し矢張り砲彈か爆擊などでやられたらしい煉瓦の飛び散つた崩れた家が所々に見受けられました。

私達の部屋の裏手の庭にも煉瓦や瓦のかけらが一ぱいに散亂してゐます。多分此處に建つてゐた一棟が砲彈にでもやられたのでせう。

町には部隊が澤山駐屯してゐます。支那住民もぼつ〳〵歸つて來てゐます。

部隊の門を少し出ると、民家の屋根越しに此の町を取り卷く城壁が見え、其の向うに私達が越えて來た大別山の山肌が寒々と聳えてゐます。

今日は十月廿九日。

山から吹き下すのか木枯が可なり身に應へます。部隊は當分此處で病院を開いてゐます。お母さん、漢口は二三日前に陷ちたさうですね。私達の部隊もいづれ漢口へ入るでせう。上陸以來二度目のお正月は？　さあ、何處で迎へる事でせうね。

此處にはいゝ水があります。表門の傍にも、裏手にも「ポンプ」の付いた井戸があります。

私達の部屋の恰度裏手にある、小學校の教室にでも使つてゐたらしい煉瓦造りの幾つもの小さい平屋には、最早患者が一ぱい入つてゐます。私達の部隊が來るまで、第〇師團の第二野戰病院が開設してゐたのを、私達の部隊が引き繼いだわけです。

昨夜は雨でした。今朝起きて見ると雨漏りがしたのか私の机の上に雨水が溜つてゐました。此の地方特有の平べつたい瓦葺ですが、何しろ所々に穴が明いてゐますからね。

昨日も今日も豚の副食でした。

炊事部の兵隊が、

「何しろ此處の衣糧廠には豚がうんと來てゐるから豪氣なもんだ」

と言つてゐました。

此の分では「上海便り」の唄の樣に「豚の丸燒」も出來さうです。「羅山」での營養不良も此處では挽回出來さうです。

お母さん、安心して下さい。

殺し役ではありません。喰べ役の方ですよ。

二度目の正月

山の麓の此の町は夜の明けるのが遲く、午後は早くから陽が陰つて、庭の痩せた立木の梢に淡雪が降りかゝつてゐる朝が多かつた。それでもたまには、ずば抜けた樣ないゝお天氣に、折角取付けた暖爐に薪をくべるのを忘れたりする日もあつた。

こんな日には獨りで歩ける患者は皆んな病室の軒下へ出て、石疊に腰を降して毛布の虱を取つてゐた。

十一月の中頃、私達には冬の代用服が支給された。以前の樣な羅紗の服ではなかつた。夏服にコール天の裏を附けた樣な物であつた。私達には却つてそれが物珍らしく羅紗服よりも良い樣な氣がした。

部隊の建物から二町程離れた所に、〇〇の特派員のゐるあばら家があつた。

屋根の上にいつも見馴れてゐるマークを染抜いた旗が立つてゐた。戸口の壁に「ニュース」の張り出しが掲げてあつて、兵隊が集り寄つて見てゐた。或日私は梶谷一等兵と二人で此の家へ入つて

行つた。

特派員達が寢るらしい壞れかゝつた部屋の前で、二三人のオーバーを着た若い男が折れた電柱で焚火をしてゐた。私は持つてゐた「さゝきニュース」を見せて、是れからいゝ材料があつたら敎へて下さいと賴んだ。中で一番年輩らしい新聞社の腕章を附けた人は、特派員の菊池登です、と言つて快く私達を迎へて、お互ひに何卒よろしく、また遊びにいらつしやいと言つてくれた。

其處ら邊りには、米ざるや、バケツや、茶ツ葉や、茶碗等がゴタ〳〵と置いてあつた。若い人が私達に熱い「コーヒー」を淹れてくれた。とても美味かつたので私は三杯程お代りをした。斯んな事から私は仕事の暇々見ては時々此のあばら家を訪問して、內地のニュース等を聞かせて貰つた。部隊へ歸つて夫れを病室の前へ張り出すと患者や部隊員が集つて來て讀んでくれた。經理室の仕事よりも私には此の方が性に合つてゐると見えてとても面白く、あばら家訪問は私の愉快な日課の一つになつてしまつた。

或日此の特派員の一人から、

「オートバイで馳け廻つた故いか、お尻が赤く腫れて痛くて仕樣がないんですが、何か良い藥を頂けませんか」

と言はれたので、私は部隊へ歸つて松浦中尉に話をして、外用藥を持つて行つた。

數日後に、

「お蔭樣でとても良くなりました」

と御禮の言葉を聞いた。こんな町には醫者もゐないし藥屋も無いから、その人は本當に嬉しさうであつた。十一月下旬の或る日、K特派員が、

「今日はお別れ旁々病院を見せて貰ひに來ました」

と言つて部隊へやつて來た。

近い中に戰車隊に分乘して、漢口の支局へ引き揚げるとの事であつた。

漢口と言へば蚌埠にゐた部隊の第二半部も十一月初めに衞生部隊の一番乘りとして漢口へ前進して既に病院を開設してゐるのであつた。此の「信陽」も惡くはないが、私達も早く漢口へ前進したいと思つた。

此の春蚌埠を出て以來、電燈の光りがそろ〳〵懷しくなつてゐた。私達は未だ見ぬ大都會としての漢口に憧れと期待とを持つてゐた。色々な意味に於ての希望があつた。

十二月に入ると、雪が降つたり止んだりしてゐた。病室の患者は皆んな毛布を被つて默つて靜か

に寢てゐた。死線を越えて來た兵隊だけが持つてゐる靜寂の中で、此の兵隊達は銘々が踏み越えて來た幾百里幾千里の血の戰線を、じつと回顧してゐるかの樣に默つて眼をつむつてゐた。私達が今日までにどれだけ働き、どれだけ辛い思ひをして來たとしても、それは此の兵隊達の流した、血の一滴にさへ到底及ばないであらう。之は私の謙遜ではない。現に此處に斯うして寢てゐる兵隊達の靜かな寢顏に、私は私の頭上に激しい鞭の音を聽くではないか。

枕元に並べてある鐵兜と背嚢と、そして伸びたあご髯と病衣とが、生死の境を彷徨して來た人の偉さを語つてゐた。

十二月中旬、私達は皆んな上等兵に進級した。佐々木隊長が皆んなを前の廣場へ集めて、

「お前達は兵隊の最右翼になつたのであるから益々勉强して貰ひたい。お目出たう」

と訓示をせられた。なる程さうである。もう一つ進級すると下士官である。班長殿である。それではあんまり話がうま過ぎる。召集を受けた時の一ツ星が今は三ツになつた。もうこれ以上は增えなくてもいゝ。

經理室へ支那人「苦力」が一人當てがはれた。病室には前からゐたが經理室へ專屬に當てがはれたのは是れが初めてであつた。

私達よりはずつと體格の良い脊の高い男であつた。

私達は半可通の支那語で、彼の年齢と姓名とを尋ねたが、どうも判らぬらしいので、筆談をしようとしたが是れは尙更駄目らしい。

部隊の通譯に聞いて貰つたら、

年齢二十歲位

名前は「揚」

と判明した。二十歲位といふのは可笑しいと思つたが、本人がさう言ふのだから仕方がないとの事であつた。

一見鈍重であるが正直さうなので私達の氣に入つた。私達は早速、揚を使つて部屋の裏手へ「アンペラ」で屋根や圍ひを作つて、私達專用の風呂場をこしらへた。

煉瓦を積み重ねて、其の上へ自動車部から貰つて來た「ガソリン」の「ドラム」罐の空いたのを載せて上等の風呂場が出來上つた。之は横山上等兵の設計であつた。

今までは、病室へ行つては「ドラム」罐の入浴をしたが、今度からは私達の專用が出來たのであつた。

私達は「揚」に其處ら邊りの壞れた家の柱等を持つて來させては、時々風呂を沸かした。

「ドラム罐」の中から首だけ出していゝ氣持になつてゐると「アンペラ」の蔭から「揚」がにゆつと顏を出して、

「先生　冷水　要不要」

と尋ねる。湯加減が恰度いゝ時には、

「冷水不要、好々的」

と答へると「揚」は、

「おゝ」

と言つて其の儘向うへ行つて待機してゐる。アンペラの際間から寒い風が吹き込んで來る此の浴場は、と角湯が冷え勝であつた。

私が、

「揚、來々」

といふと、彼はまた、

「おゝ」

と返事をして「アンペラ」の蔭から顔を出す。
私は「ドラム」罐の中から章魚の樣に兩手を出して、もつと火を焚く樣にと手眞似で命令をする
と彼は、
「明白、明白」（分りました）
と言つて罐の下へ薪を入れて、どん〳〵と燃やし出す。焰で薄明るい夜の風呂場に白い煙が舞ひ上つて、「揚」の煙さうな半顔が、火影に赤々と照らし出されてゐた。
十二月も末になつた。
私達は髪を刈り合ひ、髯を剃つた。
部屋を綺麗に取り片付けて、破れた硝子窓には紙を張つた。部屋の入口へは、他の部屋に負けない樣に松飾りを立てた。
炊事部へは各部屋から押し掛けて行つて餅を搗いた。そして、襟布も靴下も「シヤツ」も褌も綺麗なのと取換へて、私達は昭和十四年の元旦を迎へたのであつた。私は三十二歳になつた。「揚」は二十一歳位になつたのである。
私は故郷の知人へ、

聖戰に召され
二度目の新年を迎へて無量の感慨を禁じ得ません。
遙かに東天を拜して
祖國の彌榮と
貴家の御隆昌とを御祈りいたします。
といふ賀狀を書いた。
是れは私の本當の氣持であつた。
此の外にもう一つ、とても嬉しいといふ氣持があつた。それは何故か知らぬが只わけもなく嬉しい氣持であつた。
前の廣場で遙拜式が終ると、特別加給品が出た。それはボール箱に組合せになつて入つてゐる正月用の御馳走と、酒であつた。
私達は朗らかな兵隊になつた。
午後一時から講堂で「新年演藝大會」が開かれた。講堂と言つても、古ぼけた畫でも薄暗い廣間であつたが、舞臺には青や赤の幕が張られ、天井には、皆んなが故郷から持つて來た寄書の國旗が

賑々しく吊り下げられて、とに角立派な會場になつてゐた。

定刻前から患者と部隊員で滿員になつてゐた。出演は、患者と部隊員の中から我と思はん者が出てやる事になつてゐた。而かも將校數名が審査員となつて、入賞者には佐々木隊長からの賞品が出るといふので開幕前の人氣澤山の態であつた。賞品の酒、たばこ、羊羹、日用品、金一封等が審査員の後ろにうや〳〵しく飾つてあつた。横山上等兵が進行係をやつた。

歌謠曲が出た。浪花節が出た。詩吟が出た。破れる樣な拍手と歡聲とが場内にどよめいてゐた。松葉杖をゴツン〳〵とつきながら戰傷兵が出て「佐渡おけさ」を唄つた。

左手を首から下げた兵隊が、い〻喉で「都々逸」をやつた。皆んな相當なものであつた。

藥劑部の山本軍曹の「にわか」の後へ、河野療工准尉と私とが「漫才」をやつた。これは四五日前、准尉殿がしきりに私にモーションをかけて私も其の氣になり、二三回こつそりと稽古をして置いたものであつた。

私は軍服の儘で出た。准尉殿は何處で心配して來たのか、黑い紋付の樣な着物の下から、女の赤い襦袢を覗かせてゐた。あご鬚の長いそしていつも無言で謹嚴な准尉殿が漫才をやるといふ事それ自體が既に人の意表に出たものであつたが、それに加へて此のスタイルに到つては、まさしく當日

の壓卷であつた。場内は俄然湧き立つた。私は可笑しさを堪へ乍ら何うにか相手役を果して引き下ると、こそ〳〵と自分の部屋へ歸つて寢轉んでゐた。

日暮れになつてから横山上等兵が、

「おい〳〵今濟んだ所だ。君らの漫才が一等だつたぞ」

と大きな聲で言ひ乍ら、酒の瓶ともう一つ紙包みとを持つて歸つて來た。

私は思はず、

「あつはつは……」

と大聲で笑ひ出し乍ら起き上つて蠟燭に火を點した。酒一升と金一封である。金一封には參圓入つてゐた。これは赤襦袢の賜物である。夜准尉殿が遊びに來られた。

私は、

「准尉殿が太夫元です」

と言つてその賞品を出すと、准尉殿はあご鬚を撫で乍ら、

「うあつはつは……。まあよかつた。ではこれから慰勞會をやらう」

私達は机を取り卷いて飲んだ。

× ×

各部屋では勤務の餘暇に水牛の角で煙草のパイプを作る事が流行り出した。

何處で心配して來るのか知らぬが、大ていの兵隊は、適當な大きさに切つてある角を大事さうに持つてゐて、こつ〳〵とナイフで削つては、パイプに仕上げるのであつた。

病室へ行つても、藥室でも炊事部でも、兵隊は皆んな根氣よく此の作業をやつてゐた。

私達の部屋では梶谷上等兵が最初にやり出した。彼は、

「庶務室の小林上等兵のがとてもよく出來てゐるぞ、俺は彼奴に負けんのを作つて見せるんだ」

と言ひ乍ら丹念にやり出した。

煙の出る穴を明けるのが至難の技らしい。

彼は誰かゞやつてゐるのを見て來たらしく、細い針金を暖爐で眞赤に燒いては、四角に切つてある角の小口へ突き立てゝ、

「此奴が眞すぐに向うへ抜ければしめたものだ」

と言つて完成を急いでゐた。

「じゆーつ〳〵」と音を立て乍ら、白い煙と一しよに膠の樣な臭ひがしてゐた。

外型は、「ナイフ」で大體の形を作つた上を、硝子の破片で綺麗に削つて仕上げるのであつた。

何の部屋へ行つても兵隊は手に手に會心の作を持ち出して、得意げに煙草を吸つてゐた。

私も梶谷が呉れた長さ五寸位ゐの角の切端で作つて見ようと思つたが、とても完成までの根氣が續きさうになかつたのでその儘にしておいた。

朝起きると外の水溜り等に、厚い氷の張つてゐる日が續いた。

大別の山肌はいつの間にか雪を頂いてゐた。晝過ぎ、しばらく鈍い陽の光が見えてゐたかと思ふと、陰つた空は霙になつて、戸口の外では苦力の「揚」がころ〳〵の綿服を着て水鼻をすゝり乍ら薪を割つてゐた。

そして、一月廿四日、部隊は思ひ出の「信陽」を後に待望の「漢口」へ前進して、第二半部に合流することになつた。

私達は、これまでに何回か行はれた前進の度毎にさうであつた樣に、命令を聞くと直ぐに品物を纒めて荷造りをした。

「信陽」から「漢口」までは最近復舊したばかりの鐵道に依つて一路南下すればよい。

明日朝六時に出發だといふ前日の廿三日の夕方、最後の「ドラム」罐の入浴をした。「揚」に薪を焚かせるのも此の日限りであつた。私達は一番終ひに「揚」に入浴をさせてやつた。

使ひ古した私物の「シャツ」や、たばこや「キャラメル」等をやつた。「揚」は私達の前進を、荷造り等をした事によつて察してゐたらしく、それらの物を頂く樣にして、

「謝々謝々」

と言つて受取ると、如何にも名殘り惜し氣に、私達一人々々に叮寧にお辭儀をして、鼻をすゝり乍らすご〳〵と表門を出て行つた。

一月廿四日午前六時、まだ眞夜中と思はれる眞暗がりの町の中を、私達は霜柱を踏んで「信陽驛」へ向つた。驛の「ホーム」にはかんてらが二つ三つ薄ぼんやりと燈つてゐた。

私達は大型の「トロツコ」の樣な鐵板製の輕便車に乘り込んだ。部隊の梱包が小山の樣に積んであるので、私達は其の上へよぢ登つて腰を降した。

七八輛位ゐ連結してある車輛は、私達の他に鐵道警備の兵隊が同乘して身動きも出來ない位ゐ一ぱいになつた。

機關車といふのは「トラック」の車輪だけを線路に合ふ樣に付け替へたものであつた。やがてホ

ームにゐる警備兵が、

「發車オーライ」

と言つて手を擧げると「ヘッドライト」の蒼白い光が前方の線路を照らし出して、「エンヂン」の音と共に列車が動き出した。

線路を挾む小高い丘陵の頂きには、雪がほの白く闇の中に浮いてゐる樣に見えてゐた。

所々の沿線に歩哨が立つてゐた。

腹の底まで滲み通る樣な寒い風が前方から吹き付けて、私達は外套の頭巾を目深に被つてじつとしてゐた。

登り勾配にかゝつて列車が停つた。

前の車から警備兵が下りて來て、

「皆んな下車して後押しをしてくれ」

と言つた。線路が凍つてゐて空轉をするからであつた。私達は梱包の上から飛び降りて車の兩側から押して行つた。足許には石の破片がごろ〳〵してゐた。

坂を一つ越して下り勾配にかゝると車は次第に速度を早めて行つた。私達は慌てゝ梱包の上へよ

ち登つた。

足の爪先が痺れる樣に冷たかつた。太腿の邊りに觸つて見ても自分の脚でない樣な氣がした。夜が明けて來た。列車は荒れた畠の中を走つて行つた。畠の所々に雪が殘つてゐた。小さい驛々には警備隊が土嚢を築いて警戒してゐたし、驛の屋根の上にも見張りの歩哨が立つてゐた。

「おーい、パイプがゐるぞ」

と誰かゞ頓狂な聲を張り上げて叫んだ。

指さゝれた彼方の荒野には、二三頭の水牛が悠々と遊んでゐた。

陣中風物　その六

（昭和十四年一月二十一日　於信陽）

歌詞　或る戰傷兵の戰線日記

1、
曇り後晴れ月曜日
乾麵包を嚙み乍ら
けふ突擊をしたあとで
默つて見合す顏と顏

とに角俺は生きてゐる

2、
二列縱隊鐵兜
とつた背の晩めしは
故鄕へ達者と手紙を書く
けふ山峽の追擊に
星を眺めて豚料理

3、
茜の雲だ血の色だ
死んだ愛馬のたてがみを
敵はきつと討つてやる
けふ明け方の激戰に
掴んで俺は泣いてゐた

4、
片割月が塹壕を
泥と砂塵と伸びた鬚
記すノートに血が滲む
けふは靜かに照らしてる
想へば長い戰線を

これは中支派遣軍が、兵隊から從軍歌の懸賞募集をしてゐると聞いて、私が信陽にゐて作つたものであるが、何だか齒の拔けた樣な賴りない歌である。

審査官はろくに讀んでも見なかつたであらう。併し、さう易々と私の頭腦から傑作が生れる位ゐなら、私は故鄕で自轉車屋なんかしてゐない。私はとつくの昔に歌の先生になつてゐるであらう。